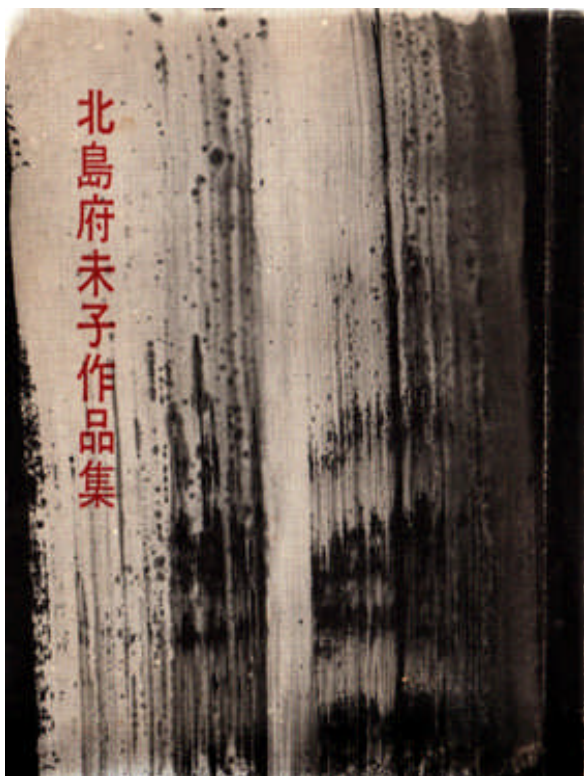


北島府未子作品集

装幀 間部学



目次

佐久間旅館	ラ ド ラ	え ん だ ん	沖繩飛行隊長	ほ う た い	カ ス テ ラ	ネ ブ リ ー ナ	金髪に気をつけろ	人生のあや模様	銭 (ぜに)	おいちよゆるせ	まにら丸異聞	運命のダグラス機	あとがき
-------	-------	---------	--------	---------	---------	-----------	----------	---------	--------	---------	--------	----------	------



佐久間旅館

『佐久間旅館は、サンパウロ市の中心部からほど近いR街にある。』
大サンパウロ市の、中心部を芯として、いま一つの円を描くとすれば、その東のへりに当たるところにあった。

直線にすれば、わずか五キロの距離であるのに、幾個所も曲る小路から小路をぬけてゆかねばならない古い街並なので、バスや電車の路線からはずされているためどうしても歩かねばならず、歩くと男でも十五分はかかる不便な場所にあるにしては、此の旅館に一泊五泊の客が多かったのは、あるじ夫婦が長い間、奥地の植民地を転々として、いわゆる掠奪農に年期を入れてきたおかげで、各地から、昔の知人がきて、泊ってくれるからである。

あるじの佐久間盛政は、本年五十五才、丙午の四緑の男は、実業家に向き、商運に強く、また、陽気で、バク運にも強いという故郷横浜の俗諺には、一向あてはまらず、珈琲、棉、薄荷、馬鈴薯、トマテ、と、日本人農家のやる、ひと通りの作物も経験してきたが、性来金銭に淡泊なのと、少しばかり好人物で、泣きつかれると他人に援助しないではいられない、という『不成功者』に特有の弱点があるため、今日尚、古ぼけた小さな二階建ての宿屋のあるじである。が、悟り切っているのか、別に卑屈な顔つきも

していない。

宿泊人のうち、いつも、二、三人はタダの客で、これは、田舎にいる頃、世話になった知人達からは、宿料を貰わないからであるが、そのかわり、そのお返しは、時に大変よい利益を持つて返ってくることもある。

豆類や砂糖がなくて街中の人が困っている時なも、ここには、タダで泊ったお礼として、田舎の各地から、俵で贈られてくるし、みかん、米、珈琲なども、どんどん貰えた。

戦前の日本人の間に在った、義理、人情の残滓が、まだ、この家には、濃く漂ようている様であつた。

二階が四間、階下が客間を入れて四間、階上、階下とも、片側は隣家との境の壁であり、上下、四ツの室は各々タテに並び、前を長い廊下が走っている、と言つた間取りで、片側の壁際には、空きトランクや、汚ないふとん包みや、ガラクタ類が山と積まれ、階下の廊下には米の袋や、豆や珈琲の入った袋果物の詰まつた木箱などがいつも並んでいた。

その廊下を通る老人の客達は、きまつて、何十年前前にどこかでこの匂いを嗅いだ様な気がするし、たまに、まぎれ込んでくる新来者などは、ツイ先頃まで、四十日間、この臭いに馴染んできたことを思い出す、というのは、廊下は、ひる日中でも、うす暗く、日本船、オランダ船の三等の船倉に似た臭気が、こもっているからで、この臭いは、人間や食物の臭い、というよりも、珈琲や豆の倉庫の埃臭くサントスの埠頭でも、しばしば経験する倉庫の臭気にそっくりであつた。

人々は、却つてこの臭いに親しみをもつ様であつた。自分の、短

かい人生のうちの、幾十日を想起させるからかも知れない。

主婦のおまさは、あるじから『東を向いている』と言われれば『はい』と終日東の方を向いているかも知れない、と他人には思われる程、亭主従順な、もの静かな女だが、働らくことにかけては恐らく百人に一人もない程の忠実な働らし手、と言っている。良人と同年であり乍ら、良人より十歳以上も老けて見えるのは、昭和四年三月十五日、着伯以来、モヂアナ奥地を振り出しに、終戦後、このサンパウロ市に出てくるまでは、アルト・パウリスタの森林開拓地に、奥ソロカバナの湿地帯に、アララクアラ線の、きびしい英人の棉耕地で、精かぎり、根かぎり働らし通してきた、言うなれば、この大サンパウロの膨張のかげに、立派なひと役を買ってきた女の『勲章』の様なものであるが、ゆき会った新来者の眼には、情けないいなか婆さんの、やつれ果てた姿としか、映らない。

この様に、従順一途で、よく働らく妻であっても、年中一緒にいると、その長所も、次第にまぬけなものに見えてくるのか良人の盛政はある時期、妻が馬鹿者に見えてたまらずうとましが嵩じた果て、ある料亭の女と深くなり、血道をあげたこともあった。

感謝や感激や、慕情すらも、時を経ると人間は、忘れ去る習性を、都合よく持っているようであった。

名前のことで、新移民当時、ちよつとした間ちがいがあった。モヂアナのある耕地に、配耕されて、まだ、間もない頃、同耕の新移民、大窪彦左エ門の一家と共に珈琲もぎの最中であった。当時、移民会社のリベロン・プレット出張所長であった、高本篤が、配耕先の新移民達の就働状況を 検分に やってきた。

『おい、そこにいるコロノ、オッセ（君）名は、何ちゆうか……』
暑い日で、額の汗をぬぐい乍らトルコ人そつくりの相貌の肥大
漠は、軀や顔に似合わぬ小さな唇もとに微笑をうかべて親しげに
言った。

『へえ。わし、佐久間盛政』

『ナニ、佐久間盛政？ どこかできいたことのある名だす。そっち
のおっさんは……』

『あ。わいの名かね。大窪彦左エ門や……よろしう、頼んまつせ』
大阪者の彦左エ門は、渡伯前、お茶やの男衆であつたので、軽
口の、ひょうきんなくせがついていた 大久保彦左エ門……と、
つぶやいたかと見ると、途端に、この『鎮台』と呼ばれている短
気な大男の顔色が、さつと変った。

『何のこつ！ どぎやんして、このおいどんを、こげんばつかにし
よるかーっ！』

大変な怒声と共に、大きな掌が、二人の頬に代る代るとんできた
……。

『おい！ おれは海興の出張所長だぞ、きさまら、ふざけると承
知せんぞ。』『何も、てんごう云うてまへんで……ほんまの名前、
名乗れというたから、言うたんやおまへんか、 何を乱暴しはる
のんや。』流石に気色ばんで、大阪の男は叫んだ。うたれた頬を迎
え乍ら、うららめしげな眼付きをしていた。

『おい……名簿、もってこい。』

あわてた耕地監督が日本人が恐る恐る差し出す移民名簿には、ま
さしく、茨城県人佐久間盛政、大阪府人大窪彦左エ門、とある。

『——やあ本当だな、これは』

高本篤の顔から怒りが急に消え、てれ臭い表情に変わった。

『すまんこつした……ゆるせ。まあ、あとで、ピング（焼酎）でもやろうや。』

『アホらしい。ウチのひとなぐりはって、すまん、で、すみすかいな。……あんまりいばんなさんな。』

大窪の妻が、のっし、のっしと背を見せて去ってゆく巨漢のうしろから喚いたが、巨漢は、手をヒラヒラとふっただけであった……。

戦国時代の武将と、徳川の忠臣と、同名につけた親は、後年そのために、ブラジル着早々に、その子がビンタを喰うハメになるうとは、想像もしなかったにちがいない。

おれの名は、そういう由緒ある名なんだよ……とあるじは笑うのである。

佐久間旅館には、三人の息子があつた。

長男盛雄、次男政男、父が盛政、母がおまさで、二男が政雄と、三人もマサの字がつくので、あとでしまった、と思ったが、仕方がない。二男の出生地は、アララクアラ線のマツトンの棉耕地、女の子の様にやさしい本年二十七の色白の美男。美容師をやって、月給をとっている。

長男は三十才。十年前、四ツ年上のイタリヤ女と結婚して別の街に世帯を持ち、これは機械工である。
子供はなく、小ぎれいに暮している。

『宿屋はどうせ、おれ一代だ。百姓の倅に生れて、百姓も長年やってきたがーブラジルでの百姓も、おれ一代』宿屋も……：

『おれ一代』に、なり相であつた。

『今どきの若いやつらは、親の心、子知らずばかりだナ』

『ホンニ。……子供は親の手に負えないものね』

珍らしく妻も同調して、自分の意見を述べ、しんみりするのである。

五十六年の生涯のうち、三十六年間を働らきつづけ夫のそばで、ひっそりと不平もなく過してきたおまさにとっては、イタリヤ女に渡してしまった息子は、もはや手の届かない棚の上の品物のようであり、今は手もとにいる次男の美容師だけは日本人の娘と結婚してくればよいと心秘かに願つてい、何かと母親らしい愛情をよせている。

昔馴染の百姓達が、皆、それぞれ成功して地方の有力者となり、上聖してくるので、客は絶えず、泊り客は毎日、河の流れの様に、新らしく変つた。おさしみ、塩やき、煮魚、天ぷら、新香の漬物、皿小鉢の間を走り廻り毎日、調理場で雇人たちと料理やつけ出しに忙殺されており、眠るのが唯一のたのしみであつたおまさに、近頃、道楽が出来た。それは毎週三館共に変る日本のシネマで、三館では足らずコラル館やアウレア館にまで、足を伸ばす大ファンとなつた。

宿屋稼業の午后二時―四時は、ちよつと息がつける。この時刻をシネマ館にいと、まるで、天国にいる様なたのしさであつた。やがては、飽きる時も、くるであろうが、まだ、当分は面白くて仕方がない。郷愁を慰してくれる上に自由奔放な戦後の日本の青年男女の恋愛は、生涯、そう言う経験を持ち得なかつたおまさにとっては一ひとつのおどろきでもあり、また、何かしら氣持よく

陶醉させてもくれるのである。

おまさは、近頃、物をたべる度に食道のまん中へんに軽い疼痛と食物のつかえるのを感じていた。

医学の知識に乏しいおまさにも、ふと、ガンではなからうか、という、おそれと疑いが出た。が、それを正確に、ガンだ、と診断される時のおそろしさにおびえて、おまさは、だまっていた。

医者に行くのが、おそろしかった。

シネマの中で、食道の痛みをじつと堪え乍ら、画面を見入るおまさの心は、半分はフィルムに、半分は食道の痛みに、複雑な囚われ方をするのである。

画面に、手術の場面など出ると、一層心はすくみ、あんな手術など、したくない、と、むやみに思う。

この無智からくるおびえ方には、何か宿命的なものがあり、シヤバに未練の十二分ある死刑囚が、十三段の階段を、遠くから眺める時の心に似ていた。

或る日、佐久間旅館に、一人の客があつた。日本から来た人だ。折柄、主人は留守で、おまさが帳簿にいて受付けた。

昨夜から、急に下がった気温に何か曇り日の様な陽ざしの弱い七月初めの夕方は暮れるのも早いのか午后四時半というのに、もう、四辺は寒むざむとうすぐらく、おまさは、朝から疼く様に痛い食道のあたりをさすりながら、いま見てきた「山河あり」のハワイの風景や、移民の悲劇を身につまされて心の中に、もう一度うつしながら、何となく、ぼんやりしている時だったので『へえ』と気のない返事をし泊る室は有る。と答えると、客は、内ポケット

から、大きな紙入れを出し、一コント札を七、八枚、無雑作にとり出して帳場の台の上に置いた。

『二、三日、滞在したいのだがね』

眼がさめた様に、はじめて、おまさは、しげしげとその男を見た。

背も高く、体格も良く、長顔の、ひげのそりあとの青々とした、濃い黒かみの前の方と耳の上は、パーマでもしているのか、波型に櫛目を入れ、色白の福々とした立派な紳士である。

四十四か、五位の年令に見えた。

タテ、ヨコにこまかな格子が青と黒で入っている上質のカンブルイア地の洋服に、クラークの特徴のある高価な靴を穿いていた。片手に真新らしい茶革の鞆を下げ足もとに飛行会社のマークの入ったボストンバッグをおいていた。

風采態度の堂々と尊大なワリにむやみに四辺を気にする様に横目を使うのと厚い大きな唇とが印象に残った。眼は美しいきれ長で、ほそいがどこかにするどさがあつた。

鍵と鞆とボストンバックを持って、給仕が二階に案内する客のうしろ姿を見送ったおまさは、ふとその男が、今見てきた映画の中の小林桂樹にちよつと似ている様な気がした。（立派な人だ）が、大切なことを忘れていたのに急に気づき、あたふたと客のあとを追って、二階のつきあたりの室に入った。戸を叩き、宿泊名簿を出して、署名と身分証明書か、旅券を見せて下さい、という、客は、事もなげにうなづき、高笑いした。『ぼくはひと月ばかり前、日本からきたばかりでね。まだ、そんなものが、ないんでね、あの、カステーラ、とか、カルテーラとか、いうもんでしょ

う？あゝ旅券、それはその、カルテラ何とかを取るために、リオの大使館の友人に預けてあるんだ……心配いりません、ぼくは、こういう者だ。差し出された名刺はハガキ位の大ききで、何やらむづかしい肩書きの様なものがゴタゴタと並んでいる。その中の特別大きい字の「医学士、佐久間盛重」というのを読むと、おまさは何かホツとした。

お医者様だったのか、此の人は。道理で立派な人だと思った。それに、佐久間、と同姓なのも、何か、ふしぎで、うれしかった。その心を読み取る様に、ちつと彼女にするどい視線をあてていた医者士は、きわめて、おうように言った。

『汽車でね、リオからいま、まっすぐ、此処へきたんだ。君の所が佐久間ってきいたんでね。外人のホテルは、もう、リオで、あきあきしたんでね……同姓のよしみもまた、面白いと思つてね。何か、うまいものを喰わして下さいよ。ねえ。おかみ』コロニアになじんだ人達なら「ママイ」と必らず呼ぶところを「おかみ」と呼ばれて、なるほど日本では、そう呼ぶものか、とおまさは感心するのである。その「おかみ」の眼の前で、客は、ベルを押して給仕を呼びつけ、洗い粉と洗濯石鹼で洗面台を充分に磨かせてから、ゆつくりと顔を洗うのである。

そういうところも、よほど旅馴れたまた上等のホテルに泊りつけた人物のように、おまさには思えた。主人は、帰宅して調理場に入ると、すぐ、おまさに、つかまつた。

『何でも、そうとう、えらい人らしいよ。厚生省の技官だつて——お医者様だよ……ガンの新らしい療法を研究している人なんだつてさ。あとで、あいさつに行くといふよ』『フーン。珍らし

い人がきたもんだナ。ガンの先生がまた何だってこんなところへ舞い込んできたんだ』

電話帳で見て、ウチが同姓だって、きて下さったんだよ……有り難いぢゃないか、それに、ガンを手術しないで消すことができるんだって……』

おまさはガンのことばかり気にしているが、その心底は、あるじには判らない。

その夜の佐久間医学士の食卓は、すばらしい日本料理で豪華なものであった。

おまさが、わざわざサンパウロ市の名だたる日本料理店から、でんわでとりよせたもので、ほかの客の食卓とは、ダンちがいであった。厚生省特別技官、医学士、大日本癌研究所々長、東京癌予防協会副会長、制癌薬「ガントール」製薬株式会社顧問、三共製薬、大日本製薬、塩野義製薬、武田長兵衛製薬各会社化学顧問……し これらの肩書にまずドギモをぬかれ、それに日頃のガンの恐怖にひとしれぬ悩みを抱いている身にとっては後光の射す様なこれらの文字にすっかり魅縛されてしまっている妻にむりやりあいさつをとすゝめられると、さすがのあるじも妻の言葉に圧倒されずにはおられない、盛政は背広の襟もとをなでなで、きゆうくつな格好で、ブリの刺身をたべている客の横にゆき、腰をかめた。

『わたくし、エー、主人の佐久間でございます。よくお出で下さいまして……まことにごくろうさんで………光栄なことでございます』さきごろ、日本から、吉田前首相が来伯した時、イビラプエラの日本館で、高知県人会長が述べたあいさつみたいなの

とを、盛政は、おもい口調でボソボソというのである。あの時、高知県人ではなかったが、盛政も、この高名な老政治家と、一生に一度の『感げきの握手』をしてみたさに、群集をかきわけて前列に出て、吉田老政治家の手を固く握った時とおなじ感動が彼をゆすった。涙がこぼれそうな気がした。

佐久間医学上は、あるじのていちよなあいさつに対して、起立はしたが、手は出さず、おうようにうなづくのである。

『ああ。……当分、やつかいになります。おたくは、料理が、うまいですね。……いや、満腹しましたよ……さあ、ひとつ、……一緒にセルベージヤ（麦酒）でも、やりませんか』彼は、ゆっくりとコップをとりあげ、うまそうに、のどを鳴らしてのむのである。

『いや。うまい……』

二、三日滞在の筈が、一週間が過ぎた。しかしこの人物のただならぬ高邁さに惹かれた主人もおまさも、宿泊料のことなどは、まるつきり頭にうかばなかった。

全く、この医学士の一挙一動は、高尚、そのものであり、優雅でさえあった。

彼の話題は、日本の現状は政界のことから女の髪形の流行のことにまで及び世界状況の一般に至るまで何もかも、おどろくほどの該博な知識を示すのであり、またその話術の巧妙さ、面白さ、と云ったら 傾聴しているまわりの客達は、誰も彼もひきいれられてうっとりとするのである。

ふしぎな雰囲気、此の人物は持っていた。また、言ひとたび専門のガンのこととなると、じつに弁舌さわやかに、とうとうと

して説き来り説き去る名講義ぶりで、彼は、『現下世界人類をおびやかしているものは、水爆に非ず、火星人の襲げきに非ず、すなわち、ガンと云う、人間の細胞は悉くこれを破壊して、飽くことを知らぬ憎むべき病である、』と演説するのである。

その口調は、しかし、上すべりがして、路傍で鍋底のわれをふさぐハンダを売る人間みたいに思われる時もあるが、この抑揚の美事さ、呼吸の巧みさ、おどろく程のガクを傾むけるのである。

二週間が、経った。

彼は、毎日、きまつて朝早くカバンを提げて外出し、中食と夕食時には必らず帰ってきた。

おまさは近頃はシネマにも行かず、ガンの先生のための献立に早くから調理場に入る。盛政はまた、せつせと市場にゆき、新鮮で味な魚介類や、野菜を買うのに熱心に歩きまわるのである。

その頃、サンパウロ市中の、街の人々の話題をさらったものに、『ガルボン・ブエノ街母娘殺傷事件』というのがあり、人々は、毎日、幾種類もの新聞を買い込んで、いっぱしの推理作家めいた想像説をデッチあげ、犯人達は北伯の大森林地帯へ逃亡の途中であった。

『そいつらを捕まえたら、死刑にする代りに、ぼくがもらって、ガンの実験材料にしたいですなあ』

『この国では、死刑はあいにくありませんのでね。わるいやつらにや都合がよいですよ。』

『ガンの実験と云うと、手術をしないでなおす、あなたの発明の、それですか？』

『そうです。その実験ですよ。つまり、兎代りだな。けつきよく

は。……ぼくの手術療法のおかげでまたなおるんだから、やつらにとつちや、何でもないし、社会へのつぐないにも、なりますよ』
『実験、というと、ガンを』

『ガン組織を、そいつらの体に植えつけるんです』

『へえ。ナル程ね。そしてまたそれを消して行くんですな、あなたの薬の力で』

『面白い位、完全に消えてゆきますから、ふしぎな位ですよ』
盛政と話している医学士のそばで、おまさは、ひっそりと、北伯に逃亡中の三人の青年がつかまり、この先生にガンを植えつけられ、それを薬品で消し除られてゆく光景を、想像するのである。

——何という、エライ、お医者様だろう……彼女は、そっと、自分の食道のうえを両手で押えてみた。近頃では、益々、痛い。

ある日、医学士は、言った。

『おかみ。ぼくは、自分の実験を誰かに、やってみたいんだがね。ここに泊っている人で、ガンの人は、居ませんか』 あいにくと、その時、そんな病気の人は一人も居ない。おまさに、ふと閃めいた考えがあった。……チャンス！

彼女は、大事な秘密をでも明かす時の様な、緊張した表情で、そっと自分の食道の痛みを訴えてみたのである。

『……だろうとぼくは、とうから、診断していたんだ……。ふむ。やっぱり……。』

彼は深刻な表情をしたが、すぐと明るく事もなげに、『よろしい、ぼくが、引きうけた……。しかしね、おかみ。御主人には、今

まで通り、だまつていなさいよ。僕がいまに実験して、あつと、みんなを驚ろかせてやるから。』それから彼は、声を低めて囁いた。

——手術をすれば、今どき、百コントス（百五十ドル）ぢや、足りないこと。おかみも判つてるでしょう。なる——その半分で、この実験は済むんだ。どれ、まず、ぼくが診察してみよう。』診察は、簡単であつた。

彼独特の診断法は、胃、腸、食道、咽喉などの場合は、その唾液（つばき）を採取して、彼の発明による薬をかけて何かの反応を見ればよく判るのだ相で、おまさの場合、果してその反応はプラスで、肯定であつた。

おまさはしかし、もう決しておどろきも、悲しみも感じなかった。

薬品で消し取って貰えるからである。

何か、胸のつかえが一ぺんに下りたような、安堵感に包まれ、その夜の食事は、特に念入りにこしらえて出した。痛みも何だか、うすらいだ様である。

これを飲めば、二週間で、ガンは、きれいに消えてしまう——という、くすりを、二週間分、五拾コントス（百ドル）で買ったのは、誰も知らない。この五拾ミルクルゼイロスは、おまさのへそくり金であつた。『これで大丈夫』と思うと惜しくもない。

薬を渡して金を受け取ると、大日本ガン撲滅協会々長は、翌日、リオへ出発した。大使館へあずけた旅券を取りに行くのだ、と言った。

その男は、それ切り今日まで帰らない。でもおまさは、ちつと

も疑っていない。あれ程ひどかった食道の疼痛も、嘘のように消え、近頃肥ってきた位である。

（五拾ミルクルゼイロスで、おそろしい『手術』から、逃れることができた、安いものだ）と心に思った。おまさは処方の通り、毎日菓をのみ、あと、一包みとなっている。

おまさは又、たのしげにシネマに通い出した。盛政も息子も、何もしらない。

ブラジル政界は、次第に近づく選挙期を前に、慌ただしい雲行を示し、日毎の新聞は、政界の巨頭の一举手、一投足に神経過敏になっていた。日系二世の各候補の名と写真が、塀や電柱に貼られ、まいにち、午後から夕方にかけては、拡声器を積んだ自動車、幾台となく街をゆき、通行人の耳に、尤もらしい政見を流し込んで行く。街角のカフェ店には、政談ずきの男達が、どこにもたむろし、しろうと観測の政治家評が、さかんに取り交わされる。

八月半ばの風は、春近さを思わせて、強い中にも温かく吹き、光度を増してきた午后の太陽は、何か人々の心を、のんびりとさせる暖かさを含んでいるようであった。金もうけに狂奔する人々の喧騒も、この界隈のおっとりした住宅街までは届かず、サンパウロ、という膨大な文明の都をおし包む大自然の悠々とした雰囲気は、何か、生活に疲れ、殺気だっている人間の心を、やわらかく、おし鎮める様な、ひる下りであった。

忘れられた様に静かな街のすみに、たった一軒だけ、『日本人』の家である佐久間旅館では、相不変おうような表情で、客の去つ

た食堂にひとり坐り込んで、見るともなく葡字新聞を眺めていた。
フォーリヤ・デ・サンパウロ。

血腥いガルボン・ブエノ街の母娘殺傷事件も、数日前、主犯が
レシイフエでつかまり、人々は、ややうすれかけていた噂の下火
を、また掻き立てる想いで、改めて気の毒な家族の顔を思いだし
たりしている矢先きであった。

主犯の自白は、予想通り強盗目的で、日本の若者の、無軌道な、
そして慾張った意図が、改めてここで営々と長い年月をかけてそ
ういうものを漸やく獲得している一世の気持を唯、啞然とさせた
のである。しかし、ぜいたくをしたいために、金を得る目的のた
めには、どの様な手段でも、えらばないと云う、やり方はあまり
に生存競争の激しい、生活苦の苛刻な国に生きている人々にとつ
てはあたり前のことでこういう生き方で、今日までやってきた
人々を迎えた、ゆったりした人口で豊かな収入の得られる国に何
十年を過してきた人々の集団は、ちょうど、ゆうゆうとした大河
の流れの中に、突然上から奔騰するものすごい滝水におち込まれ
た様な、おどろきと混乱とを感じるのである。

何気なく三面記事に眼を向けていた盛政は、その蟻の行列に似
た、こまかい横文字の中に、突然、やや大きい見出しの『日本人
捕まる』という記事を見て、視力を凝らすと、偽医者、手形欺偽、
不渡小切手、などの文字につづいて、SAKUMAという名を見
つけると、折柄の眠む気は一ぺんに醒めた。

南伯の某州で、数百コントスの不渡手形や不渡小切手を濫発し
た、というのである。

『……………』

うつ、と、唾を呑み込むと、あるじは新聞をわしづかみにしてあたふたと裏庭へ出た。『おまさ』『おまさ』と連呼したのは、この驚愕を、妻にも分ちたかったからである。

此の頃では、すっかり癌のノイローゼから解放された元気なおまさは、雇人を指図しながら小魚の干物を作っていた。

『臭い……臭い……臭いなあ、お前の手は……また、干物作りか……おい、ちよつとこれを見ろ　これ、あの男ぢやないか』
『そんなもの、私が見たって、読めるかね。あなた読んで説明してくれなきゃ……あの男、って、』

『誰のことさ』

鱗だらけの両手をうしろに廻し乍らおまさはげんな表情をした。

『あ、そうか　――　ほれ、あの、この間までウチに居たガンの医者よ……確かにあれだよ。……パラナで捕まった……』

『えッ、ほんとうかね……何でまたそんな……捕まったりしたんだねえ』

『ニセ医者だった、と出ているが』

『へえ――　だけど、それや何かのまちがいだよ。わたしのガンが治っちゃったんだもの、たしかにお医者様だよ』

『何だと、お前、何時、ガンになんか、かかっていたんだ？　誰がガンと診断したんだ？』

『もう、長いことね。　わたしの胃や食道にあつたんだって――。それが手術しないで治る薬を貰って、ちゃんと治っちゃったんだから――　本当だよ。あの医者がちゃんと診察してくれてね。何だか新らしいやり方だって、細胞発見の科学検査をしてみたら、立派なガン組織が、出た、って言われたんだよ……それ

がもう、今ぢやキレイさっぱりとれちゃって、ほんとに何でもないんだからね。……………五十ミルクルゼイロぢや安い位だよ』

……………うれしまぎれもあり、二セ医者と言われた憤慨もあって、ツイ、うっかりと、金を払ったことを喋べってしまった。……………

『何、金を払ったあ？ 五十コント』

——だから、お前は、バカなんだ、と言おうとして、ふと盛政は妻の顔をぢつとにらんだ。ふっと、ある疑惑が、胸を掠めたからである。しかし、この何十年に亘る妻の貞実さを考えると、それは、まさか、と思え、あわてて心の中でうち消した。

『……………そうか。金をな……………やっぱり』

『でも、治ったんだからいゝぢやないかね。私はねえ、もう何年も、ひとりで苦しみを堪えてきたんだよ』盛政の表情に、憐れみとも、悔どりととも、哀しみともつかぬものが、にじみ出た。彼は、じつと妻をみながら、低い声で言った。

『まあ、いゝや。お前が、得心づくなんだから、わしは何も言わん。お前のへそくりを、お前が使ったんだからな。だが、このこと、誰にも言うなよ。いいか』

しかし、その時、十日分の前払金を受取っただけで、三倍以上も滞在されて大分損になっていることをあるじは習慣的に思い出した。(が、まあ、仕方がないわい)不思議と、滞在費や、飲食代の未払いが惜しくなかったのは、十日や二十日の踏み倒しには馴れていたし、多少、ホラ吹きとは思えても、何よりもあの魅力のある話術や、人なつっこい微笑に、何かしら、親近感を抱かされていたためである。

人を騙し得る様な人間には、何か、こう言う妖しい雰囲気があ

り、好人物たちは、知らず知らずそれにひっかかってしまう。あ
るじも、これまでに、ずいぶん度々、損をさせられた。信用した
友達のために手形の保証をして背負わされた巨額の借金、共同で
商売を始めた時、ソシオの背任から担がされた借金や税金、四、五
年前は、閉鎖寸前の銀行の頭取から泣きつかれて『日本からすぐ
金がくるから、明後日まで』と、借り出されて、そのまゝになつ
てしまった五百コント。(約千ドル) 註Ⅱ一コントは一ミルクル
ゼイロス

——それよりも、なお、今以て忘れられないのは、三十年前、ブ
ラジルの西も東も判らない盛政達から、サントスの港に着くとす
ぐ、『両替してきてやるから』と称して所持のドルの全部をまきあ
げ、そのまゝ逃亡してしまつた移民監督助手のことである。無一
文のまゝ移民収容所から配耕列車に載せられ配耕先の珈琲園では、
最初の日給が手に入るまでの一カ月間、文字通り一文なしで耐え
たことである。

二、三年のあいだは、口惜しくて、見つけ次第、たたき斬って
やる！ とまで思いつめていたものであつたが——、その持
ち逃げ男は、今では他州で成功者となり、大地主、大果樹園、大
牧場主として『名士』の一人に数えられている……。人をだ
まさなければ金は儲からず、だまされた人は益々貧乏し、だまし
た人は、やり手、実力家として大きな顔をして通る世の中に、現
代は変貌してしまつたようである。

盗人に油断はなく、盗まれる人々には油断があり、騙る者にゆ
とりはなく騙られる者にゆとりがある、という格言に従えば、こ

のコロナには、ずいぶんゆとりのある人々ばかりである
……………

——『天網恢々、疎にして漏らさず………』って言ったな。お前はそれだ』

『アノお医者が捕まったことですか？

『いや。お前のへそくりだよ。おれにかくしてそんな金を貯めるから、ごっそりと盗られる様なハメになるんだ。天網だ』。

『私は、かたり取られた、とは思っていませんよ。立派に治ったのですからね』。

『まあ、そう考えて、よろこんでいたらいい。お前はへそくりを作るのが上手な女だ。五十コントや そこら、すぐまた貯るだろう。だが、よくわきまえておいて貰いたいのは、だな——人を見たら、泥棒と思え、という昔からのたとえだし』。

『ですけどねえ。ウチみたいな宿屋で、いちいち、人を泥棒と思っていたら、心配で気がちがってし まいますよ』

『おまえなら大丈夫だ、その心配はない』

『パパイは私が五十コントだまされたと思っていい気味だと考えてるんだね、私は立派に治ったんで すよ』。

おまきの腹の中では、あの疼痛や死への恐怖がなくなっただけでも、無上のうれしさであり有り難さなので、五十コントばかりのハシタ金、惜しい、などとは考えたこともない。ただ、(あの医者は気の毒だ。きつと誰か、ほかの、もつとわるいやつにだまされてそんなことになったに相違ない ——) と思ひ込んでいる。おまさには、あの男を、飽くまでも『名医』と信じていることに変りはない——この善良さ！

日本では、たった百円の金を盗んでも札付きになる。警察も、被害者も、決して容赦はしない。しかし、ブラジルでは——殊に、コロニアでは、まだまだ寛容な人情とか、友情とか憐憫とかの美德が、人々の間に濃く漂よい、悪質なものは、それを利用して狡狼に立ちまわる。

今、げんに成功者と呼ばれる人々にでも、過去、若い時代に金銭のことで他人に迷惑はかけなかったと心の中で言い切れる人は殆んど数えるほどしかないのだ。

それがその時、一々あばかれ、訴えられて、刑余者となっていたら——恐らく今日の成功者は、その大半が、影を背負った男となっている筈である。

それをそうさせずに、目こぼしされてきた温かさというものは

——遠く海外に出てきたより合っている同種同族の血の通いが、そういう寛大さを、醸成させ、温存させているのかも知れない、とは言い乍ら——期せずしてヒューマニズムの成果をなしているのである。

だが、この美しい零囲気も、ブラジルやコロニアの人口が稠密になるにつれて生活の苛烈さが、次第に消してゆくであろう。

時に宋襄の仁に等しい結果を招くことはあっても、移住以来五十年、コロニアに温存されてきたこうした美しいヒューマニズムも、次第にこわれて行くに相違なく、それに代って酷烈な権利と義務不履行の争いが、ますます増えてゆくにちがいない。

——でもおれはあの男を憎めないな。何しろ、おまえのガンを治してくれたんだからなあ——

今頃は、パラナ州の警察の留置場で、どんな顔をしている
かと思うと、あるじは何か可哀相になり、サンパウロだったら、差
し入れもしてやれるのにな、と思った。

ラ ド ラ

掃き終ったひろい前庭を、ぼんやりと見渡しながらしばらくの間は、ひどい疲れで何も考えられなかった 眼の前には、美事なばらの花が、真紅と淡黄と、白の大輪を半開にして、折柄の微風に、かすかにゆれているのだが、その花の美しさによせる詩ごろも、関心すらも、もてない重労働の日日なのである。

テレザは、ホウキの先の押しつぶれるのもかまわず、柄によりすぎる様にして停ずんだまま、眼はうつろに、いつとき、放心の状態にいた。

そのうちに、いつか想うともなく、彼女の腹の中に、子供を残したまゝ、『リオへ行く』と云って去ったきり、このふた月、何の音沙汰もないミナス生れの半黒の給仕男、アウロのことを思い出していた。

階上、階下で合計十二室もある、ぜいたくなマンソン（館）で、たった二人の主人夫妻が、何のためにこんなに宏壮な構えの家を必要とするのか、テレザには、殆んど不可能であり、毎日早朝から、夜おそくまで、掃除や整頓に追いまくられている忙しさを考えるとむしろ腹が立った。

夫妻別の寝室、居室、書斎、読書室、これは全面が総ガラス張り、以上が階上、食卓 コーパ、客間、控えの間、トランプをする室、玄関のホール、ポオチやテラスまでを入れると、一体何百平方米になるのか。

うらての車庫が、テレザの室で、これはまた、床板から壁、天

井まで、何ともお粗末至極なもので小さな窓が、北向きにたった一つありアヴニードに画した方は壁という不粋さで、結局、休息の時は眠るよりほか何も欲しくもない見たくもないテレザにとつては、いつそこれでもよかったが、これは、自分の住居としてこの館を建てた前の家主が、女中部屋の窓を、往来に面して作ると、外ばかり眺めていて怠けたがり、又、夜ともなれば道行く男どもをからかったり、呼び込まぬとも限らぬ女中どものくせをよく知っている家主の用心深さからである。

その家主が、此の住居に飽きて市中のアパートに移ったあとを、知人の紹介でこのアメリカ人の夫妻が買いとって住んでいるのだが、この静謐閑寂な富豪の住宅地が、すっかり気に入る、ここに住みついてから一年半である。

最新型の高級車を自分で運転して、凡帳面な主人は、毎朝九時には会社へゆく。夫人は、そのあと、もう一つの小型のくるまで、ブラジル語のけいこにゆく。

その帰りを、花とか買物の包みを小型のくるまに積んで十一時近く夫人の帰る時は、黒人の料理人夫婦が、もうやってきて、台所では、アメリカ風の食事の用意の最中で、テレザは此の時は二階から階下の掃除とアルマデイラの仕事で、やっと終ったばかり、ごみの吸取器とエンセラデイラ（電気蠟引機）と、ハタキとホウキと同伴して階段や玄関を出たり入ったりしている。

主人が帰ると二人むつまじく夕食、この時は主人の好きなクラシックな音楽や、夫人の好むアメリカのジャズのレコードが鳴る。給仕男がいないので、食堂の給仕役もテレザ。

午食のあとは庭園の花々を愛でたり、新聞やテレビを見たり、

それから寝室へ引きとって、約三十分の午睡のうち、主人は再び会社へ出勤する。午後五時までは、此の邸は、まるで人気がない様にしんかんとしてしまう。というのは夫人はアメリカの婦人雑誌に詩やブラジルの風物などの随筆を書いては送っているので、午後の四時間は、書斎にこもってしまうからで、通いの料理人夫婦は、用のない時は、殆んど町に出て食料の仕入れか、シネマにゆくのである。一週間のうち、月水は主人がクラブで夜を更かし、火木は夫人とシネマへゆく。金曜の夜は、判で押した様に、同僚の夫婦連れが二三組、くるまを連ねて集まってきて、翌朝の五時近くまで、オークション・ブリツヂか、ポーカーをやる。

感心なことには、此の夫妻は、アメリカの、どこかの大学にいる時、烈しい恋に陥ちて、双方とも、二十一才で結婚し、以来、十五年というものを、子供はないが、別居も離婚も考えず、担々と、仲睦まじく過してきた、という、近頃のアメリカ人にしては珍らしい夫妻で、二人とも、ボストンの名門の出で、夫人の方は女学校がケネディの従妹と同じ学校というのが、自慢であったが、テレザにとっては、ケネディも、キャンディも、どちらが菓子の前だったか、と思う位無関心だから、此の夫人の自慢も、一向に反応はない。

美しい妻にふさわしく、良人の方も端正な、男らしい風貌で、生粋のイングランド系の、金髪碧眼白暫、長身毛並みのいゝアメリカ人の典型的な夫妻は育ちの良さからくるのか或いは又その天性なのかまことに鷹揚で、慈悲ぶかく、金銭にもきれい、物事にこだわらず朗らかな主人であり、ほんとうに申し分のない雇主なのだ、しかし、まあ、此の忙がしきは、どうしたものだ！ テレ

ザの情人となっていた、ミナス生れのアウロは、こんなに良い主人達なのに、人の家に一生使われていたって、せいぜいモルドーノ（執事）になる位が最高だ。おれはメカニコ（自動車修繕工）の仕事を習い度い　　と言ひ出し、或る日、突然、リオへ行つて了つた。

代りのコッペイロ（給仕人）が、すぐみつかったが、此の若者は、あいにくと英語がよく判らず、それに忙がしいのにアイソをつかして、半月ほどで、出てしまった。

アメリカ系の会社は、土曜日は、休みなので、土、日は、大抵夫妻は泊りがけで小旅行をするので、此の二日だけが、テレザにとっては、命の洗濯が、できるのであった。

料理人洗濯女庭師と、それぞれ通いでやってくるけれども　金曜の夜の客の接待や　朝の主人夫妻のコーヒーの仕度、オレンヂをしぼり、グレープ・フルーツに砂糖をかけ、ハム・エッグスに杏の甘漬、チイズ、ゴヤバーダ、苺のジャムなどを盆にのせて運ぶだけでも相当な労働で、黒い木綿着に白い布を頭に被るが、これは髪の毛が食物の中におちるのを防ぐためで、純白の前掛け、此の女中のユニフォームは、テレサが、十七才でゴヤス州の奥から、このサンパウロに出てきて以来、もう六年も欠かしたことはないものだ。

あまりに忙がしいのに、気の毒になったか、夫人は何回も、新聞に“女中入用”の広告を出し、ずいぶんいろいろの女達が集まつては来た。が、四、五日いると、出て行くのや、油断のならないものばかり、時たま、真面目そうなのが来るが、これは必携すべき身分証明書や、前の主人のボーアス・レフエレンシアスつまり

推せん状の良いのを持たず、結局、今以て、テレザ一人が過労に喘ぎながら、一日中吐息と共に家の中を歩き廻わらねばならないのである。その代り、テレザの給料は、七コントスから十コントスに昇給した。

掘立小舎同然のゴヤスの田舎の家で、豚や鶏などと一緒に育ち、父親や、母親も、農奴の様な貧しいコロノ（農場労働者）で、大ぜいの兄弟姉妹たちは口減らしに十才ぐらいから次々と他家に雇われてゆき、テレザも九才から十六才までは土地の地主の家に守りにゆき、その家からグルポ（小学校）だけは通わせてもらった、が、ほかの娘とちがつて、読書の好きな彼女は、主人の家で、さまざまの雑誌などを見るうちにサンパウロに出たくなり、みんなの止めるのを振り切って、出てきた。

倖わい、その頃も今も変りない女中大仏底の折柄とて、すぐに主人がみつかった。ラッパ区のペルデーゼス街の、ある女学校の教師で、独身の老嬢の家で、このミス、ベエカアに家庭のさまざまな整頓の仕方とか、カンタンな料理とか、英語などを、少しずつ教わった。

ところが、此の老嬢は、猜疑心がつよく、口小言が多い上に、ヒステリの時は、ひどい毒舌となり、また、妙なニンフーマニアの癖もあつて、夜など、突然テレザの寝台に入ってきて乳を弄ったりするのに怖くなり、無断でやめて、ほかに移った。

アヴエニード・パウリスタに豪壮な邸宅で四ケタの数字の番地の家。黒い鉄門に金色の紋章がいかめしく輝やいていところだったが、ここで下働らきからアルマデーラ（小間使い）に昇格し、意地のわるいゴベルナンテ（家政頭）の独身婆さんにさんざ

んに鍛えられた。

ここも、一年足らずでやめたが、雇主は、降る程あり、じつさい、よりどりみどりの有り様で、次に入ったのが、ジャルーヂン・ヨーロッパ区の、モダンなすばらしく豪華な家、主人は、フランス人の子孫だとかで、サンパウロでも名だたる金物会社の社長、家族は尊大な貴族趣味であるが、ケチなことは此の上もなく、雇人も十数人いるくせに、食事はひどい差別をつけ、マンティガ（バナ）やケイジヨ（チーズ）は一切たべることを許されず、牛乳三十何人に一リットル、というきびしさで、ある時、一同総結末して申し合わせ、ストライキをすることになったが、グレベ（総罷業）に入る前に、まず、主人側を『教育“してやるべきだ”』と、牛乳会社に電話をかけ、毎朝十本の牛乳を配達させ、主人夫婦に一本、二人の子供に一本、あとの八本を雇人一同で、朝の珈琲と午後のおやつ時に飲んでしまい、月末に牛乳会社から勘定書きがきて、主人が仰天し、眼を剥いて怒ったら、一同直ちに総辞職！と、大事件のおきた時の日本の内閣みたいな宣言をしたところ、主人も折れ、それからは、牛乳五リットルは毎日のんでよろしい、ということになった。……………

お抱え運転手やモルドーノ（執事）、給仕人たち、男のいやらしいじょうだんや誘惑の手を、うまく逃れる術も、また、誘いに乗ったふりをして男共に金を使わせて面白く遊ぶこともだんだんと上手になり、うまいものを冷蔵庫からこっそりと出して喰べ、主人の愛犬に“呉れてしまいました”などとぬけぬけと言える程、女中の訓練の修業も経験も積んできた此の六年間であった。上手になまける方法も、ほかの雇人の眼を（これは主人以上にきびしい

眼なのだが）巧みにくります方法も、みんな、ぬかりなくおぼえ込んできた筈のテレザもも、たった一人で、この大きな家の仕事を任されるとなると、ふしぎなことに、責任感のようなものがかぶさってきて、此処ではどうにも怠けようがないのである。どこの家でも、富豪ほど、仕事はきびしく、その代り、給料は心配なしにきちんきちんと貰えるが、物品の出し入れは非常に厳重で、毎日の食物も、わり合いと質素であるが、その点このアメリカ人の夫妻は、もともとテレザひとりしかないせいもあるけれども、食事も主人と同じものを食べてもよいし、ナフキンとか、シートとか、食器類にも、一々、夫人は厳重に眼を通すでもなく、ひまさえあれば詩を作り、文章を考えているらしいので、通いの裁縫女や洗濯婆さん達は、いつも感心したり、有りがたがったり、それも馴れると、少しばかりこの世間知らずの育ちのよい、裕福な夫人を、かげでは小馬鹿にして、ちよいちよい品物などを、ケチなかすめ方で盗んだりしたが、そういう時、まるで主人のような気持で、テレザはこの卑しい女どもを監視し、憎まれた。もとより六年間も手馴れてきた一切の家庭内の整頓仕事の手順の良さというものは、他に比類がない位で、ミスベエーカーに仕込まれた英会話も出来るので、ひどく夫人の気にも入り、食事と、ねる室と、衣服（これは、夫人の上等な服のお下りが貰えた）と靴と、女中のユニフォームの支給があり、エンセラデーラ（床磨機）とホウキとハタキと真空掃除器と雑巾の職業道具と暮してさえいれば金は自然と残る理くつなのだが彼女は人一倍の親思いなので給料はそっくりゴヤス州の親の許に、毎月コンバロール（現金輸送）で郵便局から送金していたからいつも、手もとはピーピーであつ

た。

ある時、アルマデーラ（小間使）の一人に日本の娘が雇われてきて、ひと月程、テレザと一緒に働らいたが、此の娘は、歌を唱うのが上手で、ある時の日語放送局のコンクールに入賞して、これがエンとなってよいスポンサーがつき、音楽学校みたいな処に入った。

テレザの眼から、うろこがおちたのはこの時で、実を言うと、彼女も歌は好きだし上手であるのだ。

ミス・ベエーカーは楽譜の読み方も教えていたから、かんたんな歌謡曲やジャズは、すぐおぼえられ、又、曲を耳に聴き留める才能にもめぐまれていたからそれまではべつに歌うたいのことなど、考えたこともなく毎日狩犬に追われている兎のようにかけまわっていたのが、この日本娘の “歌手志望” が、テレザに一つの刺戟を与え、それ以来、彼女の心の中に何か、希望の灯が、ともった様である。

このまゝ、一生を忠実に女中をしていたところで、ゴベルナンテ（家政頭）となる位が関の山、トキコのように、私も歌手になりたい！ この想いは、最近、益々熾烈となってきた。しかし、この腹の中に宿っている一物を、一体、どう、仕末したらよいか。

七ツ八ツの頃から、男の子達の相手となり、性の遊戯もしたし、今までにも、幾人もの男達と肌を合わせてきた。が、アウロのような、まぬけな男は、みたことがない。このまゝ腹が大きくなれば第一、音楽の学校に入ることすら、出来なくなる。

どっちにしても、『お金』は要る……金が欲しい……金が……。

その考えにとりつかれ、彼女は、のろのろと、体を動かして家の中に入った。四辺はもう夕方の気配で、どこかで、自動車の爆音がした。

テレザは『金』というものを、この時ほど、欲しい、と思ったことは、はじめてであつた。

彼女は、ジョンソン夫人が、ブリッジで負け、沢山の金を失つた翌朝、きげんがよくないわけが判る様な気がした……。あれだけ金持の夫人でも、紙入れが無一文になれば、やつぱり、多少のヒステリイも起るといふものだ……。『金』というもののありがたさ、尊とさが、しみじみと思われ、その金も歌手になったら、ぞくぞくと入ることを考えると、何か、いて立つても、いられないような、あせりを、おぼえるのであつた。

いつしか四辺はたそがれて、十月半ばの夜が来ようとしていた。選挙の前後のさわぎも興奮も、この辺は至って閑散で、どこかの家から候補者の票数をかぞえるラジオの声が、きこえていた。

厭に寒くなってきた、と思つたら、シヨボ、シヨボ、と雨が、おちていた。

主人夫妻は、昨夜から、リオへ遊びに出かけている。しんかんとした、このひろい家には、私一人…。

テレザは客間に入ると、ヴィクトロラの箱をひらき、手あたり次第にレコードをかけてみた。

——威勢のよい声で、急テンポな調子を取りながら歌っている。この黒人の料理女みたいな人は、この歌で、一体、いくら、儲けるのだろうか？ 中年の、アメリカ黒人女の愛嬌のいゝ笑顔が厚い唇を大きくあけ、白い歯と赤い舌をのぞかせて歌っている……：

…レコードの袋をしばらくテレザは眺めていた。

黒人歌手の顔が、せいっぱいに笑っている……。金が儲かるから、こんなに威勢よく笑っていられるのだ……。テレザは笑えない。

金のないテレザは、笑うどころか。

——少々、妬けてきて、途中でやめると、次のジスコ（盤）をかけてみる。

ルビンシュタインのコンチエルト。

こんな静かな陰気な曲は、つまらない。舌うちして箱のふたをした。

今度は、テレビを映してみる。R放送局（カナル7）のセッション・ヂグ・ザグにはまだ間がある。

と、突然、ブラウン管に出てきたのは、やはり黒いブラジル娘の歌手が、何か陽気な歌謡曲を、けんめいにうたっている姿で顔は黒白の陰影が汚なくついて美しくはないが声はすばしかった。テレザの心は、躍った。ああ、私も！なぜ、もっと早く、私も歌手になることを、考えつかなかったのだろう！今頃歌手になっていれば、テアトロ・レコードかどこかの晴れの舞台で、あの娘のように手を胸にあて、沢山の聴衆を前に楽しく歌ってあの様に拍手をうけたであろうに……。

急に自分が、みすばらしく、つまらない女に思えてきて、テレザは、やり切れない気持になった。

——何か、やけっぱちな、不逞な心に駆られた様である。気がつくといつの間にか歌謡は終り、テレビは、アギア・ブラバ（勇

敢な鷹）アメリカ・インディアンの冒険物語を映していた。（こんなものは子供のみるものだ！）手あらくダイヤルをぐるぐるとまわしてみる。765432………歌手の出る番組は、どこにもないようだ。あきらめてスイッチを切り、ラジオの方へ手をのばす、これは、ガチャガチャとそうぞうしいカバキーニヤ（ウクレレ）の三人奏である。きき流しながら、物想いに憑かれたテレザは、そのまま夢遊病者のように、二階への階段を踏む。

灯のついていない客間の、深緑の厚いカーテンが、ひだを折り重ねて莊重に、おごそかにテレザをみている様な気がする。

ビシャビシャと、次第につよくなる外の雨の音をききながら、ふかぶかとしたじゆうたんを踏んで、やや足早やにテレザは二階に上った。夫人の寝室は、廊下のつきあたりにあった。

足の低いぶんだけ、クッションのうず高い上等な寝台。

化粧台の上の、ぜいたくな香水や、化粧品 of 林立。金いろに、輝やいている手函。

テレザは衣裳戸棚をあけてみる。

ぎっしりと詰まった上等の服。貴金属類を入れる内側の小棚、手提げもいくつもあった。一つ一つ、とりあげて、思い切つて中をあけてみる。奥の方に、無雑作に放り込んである手提の、一ばん下積みの古いのをあけてみた……底の方にくしゃくしゃになつてアメリカの紙幣のようなものが見える。

指の先でつまみ出して見ると、それは百ドルの紙幣であつた。二枚、重なっている。現在一ドルが、

五百クルゼイロス近い。それが、二百ドル！——忘れているにちがいない。あの夫人は金を隠匿してしまつておくような育ち

の人でないことをテレザはよく知っていた——忘れられた、この二百ドル！ 選挙で、落選候補の捨てる金が一人で、何千コントスときいて、その気の遠くなる様な金の、セメテ百分の一でも、私の音楽修業に出してくれたらとずいぶん口惜しかったものだが、今この偶然にも発見した二百ドルは、テレザには、何か、神様が与えて下さったような気がした。

テレザの指は、魔法にかかったように、ふるえながら、その紙幣を、固く、握りしめていた。——忘れられている位の金なら、しばらくの間、そうだ、借りて行こう。——借りるのだ。盗るのではない。借りるのだ。

一日中、あくせく、あくせくと働らき通しで、なお、わずかなぜにしか入らない人間と、親や夫のおかげで、ひねもすを、何もせず、ただ習うこと、遊びごと、交際ごと、花をめ、ゴルフに興じ、テアトロやシネマや演奏会やポーカーに夜を更かし、ぜいたくで高価な品物を次々と買うことしか考えず、それで一生を何のこともなく送れ、このような大金を時には古い手提げの中に放り込んで忘れていられる身分の夫人と、自分とは、ああ、どんな星のちがいのなか。しかし、そんなセンチメンタルな感情に囚われているひまはなかった。テレザは、前途に何か光明を見出した様な心地に駆られ、これを借りなければ、自分のチャンスは、歌手となって沢山の金を儲けるチャンスは二度と再び来ぬような思いに夢中になっていた。罪の意識は全然感じなかった。強い誘惑！ 抵抗し難い金への執着！もう、いゝもわるいもない、借りるのだ、借りるのだ。と、つぶききながら、彼女の十本の指は、手

あたり次第に、夫人の高価な服や宝石をかき出していた。

彼女は主人の居間に走り込み、戸棚をあけ、机の引き出しをかきまわした。指輪、金のカフス釦、金のシガレットケース、金のライター。リビング・ルームから、書斎と、次々と走り込み、金庫にも手をかけてみた。が、これは、さすがに手に負えない。

読書室に走り込んで、ぐるっと見まわす。書棚は、ぎつしりと厚い書物ばかり、鋼鉄の整理戸棚……こんなものはだめだ。……体は熱っぽくふるえ、絶えずがたがたと、ひざが鳴った。しかし、どうしたものか、手だけは特別の生きものの様に品物を探しまわるのである。

気がつくとき、白い前だれのひもは解けておち、頭布の白布も、どこかにふりおとしていたが、もはやそんなものには用はない。

階下では、スイッチを切り忘れたラジオが、まだ、鳴っている。誰かが、何かを、いい声で歌っているのだがそんなものももう耳に入らない。胸がときどきしている。

各室の鎧戸を下ろす、ふだんのしきたりも忘れ、空腹さえも忘れていた。何か、自分の手や足が、ちがう人間の手や、足のようには、思えた。知らず知らず、呼吸が喘いでいた。

最後に、もう一度、夫人の室に戻り、夫人のふだん差のスーツを取り出し、ついでに下着は上等のものを出して、身につけた。

アメリカ人にしては、夫人は小柄の方なので、これはよく適った。衣裳戸棚の鏡に、ちよつとの間、自分の姿を、うつしてみる。

未来の歌手の姿が映っている。

自分も、中年になったら、レコードの袋で笑っているあのアメ

リカの歌手のように、肥って、あの様な顔になるだろう――。

彼女は、しばらく、うつとりと、鏡の中のくろい顔と、赤く厚い唇とを、眺め入っていたが、はっと気がつくのと、急いで衣裳戸棚の戸をしめ、一ぱいに品物を詰め込んだスーツケースを廊下に運び出した。戸外は、完全にもう夜で、どこかの鳩時計が八ツ、鳴っていた。

夫人の上等の手提げを、一度は、もち出したが、また引き返して一番質素な、目立たぬものと替え、二百ドル、その他、ありたけの金や宝石も入れ、走る様に玄関先に出た。

が、外戸へ出る時は、用心ぶかく裏口を閉じ、ふたたび玄関から、今度はきわめて堂々と出るのである。

何か、めでたい門出の様な気がしていた。通りがかりのタクシーをとめ、スーツケースと自分のからだとを押し込むと、頭の毛にかかった雨を払いながら、テレザは、ちよつと弾む声で言った。『ロドビアリオ（バス発着場）へ。』ゆく先は、リオ、と、きめている。兎に角、音楽の学校は、どこかに在るにちがいない。早く立派な歌手になって、この借りた金や品物は、倍にして、返せばいい――。

テレザの心の中には、ふしぎと此の時、盗んだ、という意識は湧かず、悪いことだとも感じない。良心が、麻痺していた、とも、ちがう、無断で他人のものを『借りて行く』ことが、すでに盗む同意義であることには思い及ばないのである。

希望の微笑に、その丸い大きな眼は輝やき、くろい顔は、いきいきとしていた。

躍るような、活潑な足どりで、彼女はタクシーを出ると、『コメッタ乗合自動車』のリオ行切符売場をちして、エスカレーターに乗るのである。

あくる日の朝。遊びつかれてリオから戻ったアーネスト・ジョンソン夫妻は、玄関の戸がすぐにあきラジオが鳴りつづけ、テレザの見えぬことに、まずいぶかしく思ったが、さらに階上に行きものすごく取り散らされてある各室をみて、今度は、ほんとうに肝をつぶした。

二人とも、茫然と、寄り添って停ずんだまゝ散らかり放題のあたりを見まわしていたが、やがて夫人が、眩やくように言った。

——魔がさしたのね、あの娘はきっと。……私たち、飢えた犬の前に肉をおいていたようなことを、していたのかも、しれない。……でも……可哀相に……あの娘には、

あの娘の運命しか、ありはしないのに……。

え ん だ ん

沼田さと子が、三十五才の今日まで、独身できたのには、別に何の変った理由があったわけではない七人兄弟妹の、丁度まん中で、兄も、二人の姉も、とうに結婚し、すぐの妹も恋愛結婚が成功して至極幸福な、おちついた三十才の人妻となつて納まつているが、さと子だけが漫然と、嫁ぎおくれ、居残り組、売れ残り組。レターリヨの仲間に入ってしまったのだ。中学から、高等商業を出て、英文葡文の簿記、速記も達者なさと子は、米国系の大きな自動車会社の、秘書課につとめ、十三年の無欠勤で、つい先頃、社長から表彰され、月給も、七十コントスから、八十コントスに昇つた。

長兄は、すぐ近所に家を持ち、米の仲買で盛大にやっているし、長姉、次姉は二人とも会社員に嫁いで別の区域に住んでいる。

恋愛結婚の妹は、郊外に住んでいるが、良人が自動車工業の経営者なので、すばらしい車で、いつも六十五才の父親(市内を廻っている。)は、約四十年の俸給生活から離れて、此の数年は、もっぱら十二軒の貸家の家主で、ゆつたりと、毎日、碁や将棋で日を送っている——といった、典型的な、まじめな中堅階級の上の部の生活である。さと子の弟二人は、一人は、齒科医大を出て開業し、伯人娘と目下熱烈な恋愛の最中で、末弟は、工大在学中(すでに婚約している。)で、未来の大機械發明家を夢見ているが、これも、ヨーロッパ系の金髪碧眼娘と喋々喃々を、はじめている。

長身で、からだ全体が見事な線の上に、脚がまた、すばらしくきれいで、山本富士子そっくりの美貌、少し勝気だが、ブラジル生れとは思えない程、日本語も上品に使いこなし日本式のしとかさも充分身につけており、教養と、理智の深さから来る輝やぐばかりの美しさに惹かれない男は無く、殊に、外人が夢中にならぬ筈はない。

十年ばかり前までは、言い寄る男の数はかぞえ切れず、日系青年との縁談も『降る程』あったのだがその頃は、まだ、ガンコ一点張りの父親が、日本刀を振りかざしての大妨害に、外人達は恐れをなして皆引き下がり、恋は次々と破れて行つた。その代り、降る程の縁談は、そう言う父親への反抗もあり、片っぱしから、こつとわつてしまったので、結局、どれもこれも、あぶ蜂取らずの有りさまで、今日に至っている。

さと子の花の唇に、熱く重なつた男の唇は、いくつもあつたが、暗い夜の木下闇などで、どんなに男が夢中になつてきても、男の手にからだをふれさせず、チチハルから、マンチユリアまで――満洲鉄道旅行は許さぬ彼女であつた。その冷厳さ、道德堅固さは、しかし、彼女を結局、不幸にしてみましたのかも知れない。

『ねえ。どうして、お前は、そう強情なんだろう　――　いつまで、ひとりでいるつもりなんだよ?』

おろかな母親は、まるで自分の責任でもあるかの様に、さと子の『売れ残り』に心を痛め、持病のリウマチの痛さよりも、この方が心にひびくらしく、日に一ぺんは、かきくどくのであるが、今ではさと子は決して強情を、はるつもりも、独身を通すつもりもないのだ。が、土台、もう、手おくれの有り様でまともな「縁

談」というものは、一つもなくなっていた。

——四十九才の商人だが、妻が、伊太利人と逃げてしまった。子供はないから、そのあと釜にどうか』

——三十八才の働らき盛り、財産家で、大銀行につとめ、申し分のない愛妻家、ボアテや料理屋などは 見向きもせず、ゴルフと釣が趣味、六人の子供を残して妻に病死され、大層困っているから、ひとつ、貴女が——』

——六十四才の、チト年齢はとりすぎているが、体格は良し、若い者に負けない精力もあり、働らき手 で気性も若々しい。息子たちは、みな結婚して、それぞれ別居し事業だけを共同で手びろく経営している。この度び、婆あさんが突然、脳溢出で亡くなったが、まだ、老い朽ちる気もない故、三十五、六の後添えが欲しいので——』

そうかと思う

と、『五ツばかり年下のエカキで、絵の修業をしているが、コロニアでは、絵描きでは喰って行けず、抽象画しか、描かないので、看板屋にもなれず、才能はあり、将来、或いは間部さんのように、ならないとも、限らない、さと子さん、どうです、あなた一つ一緒になつて、あなたの月給で大成するまで見てあげたら——』

これは、と思うのが、一つあった。

同年齢のメカニコで、自動車工場につとめ、むろん初婚三男で、実家はパラナのファゼンデイロ（珈琲園主）。珈琲景気の好い頃、父親から分けて貰った金で、その内、自動車の部分品工場を、自分で経営するつもりでいる。

顔も体格も良し、温和で熱心なカトリック。会って見て、その男らしさにうっとりとしたが、（グループ（小学校）卒業だけ、と

きいてガツカリし、男が独学で、かなりの教養を、身につけていることには心が向かず、『教養の差がちがうから』という実に下らない理由で、アツサリと断わってしまった。

それが三年位前のことで、現在は経営の工場が成功して、ウイリスの新車や、シンカのきれいな車を乗りまわし、おや？と思つた時は、きれいな伯人の妻君とつれ立っていた……。

社用族の『ブラジル妻に』どうか、とすすめる人もあつた。

——何しろあなた、日本では、奥さんが、肺病の三期も、もう終りの方で、今日か、明日かという有り様。とてもこちらには来れないし、何ですよ。とても立派なお方でねえ。三十七とは見えない好男子。チョツと宝田明——イエ、あれより、もつと堂々としてますよ。月給も、ドルでねえ。何しろ奥さんの方が、実家が大阪のすごいお金持なんで、日本へ送金なんぞしなくつてもいゝんで、こちらではぜいたくの仕放題、どうですか？ちよつと会つてみては？そりや、ほんとに立派で、やさしい人ですわよう。『いくら立派で金持でやさしくても

『伯妻ぢやありませんか、そんなの！いやだわ！バカにしてる』怒気を露骨に出してことわると、でも、あんだ、このまゝ、何時まで、ひとりでいるつもり？苗間で穂を出しちゃったあなたが、今更、まともな結婚をしようたって、そりやムリですわよう……』失礼ね、オバさんも苗間で穂を、出そうと出すまいと、あなたのコンタ（勘定）ではないでしょう　私は、自分で、ちゃんと見つけます、放っておいてよ』

苗間で穂を出してしまった三十五の処女は、実りたくもみのりの持てないカラ穂を、もてあまして、なやましくもだえるのだが、

一 さて仕様が、ないではないか。

誰をめあてに、今更、結婚の申し込みが、出来るというのだ。

さと子はないた。

たったひとりの、夜の寝台の中で、——が、仕方がないではないか。

そんな時、突然、『まともな縁談』が出現した。

さと子の一家は、むろん、さと子をもふくめて、一家総がかりでこれに応じた——というよりも、とびついた。

相手は、伯国の工業会社に技術者として招へいされてきた、という大学出の電気技師で、一ツ年下だが、容貌は端麗な男。やや卵型の、上品な顔に、眼が澄んでいて美しく、鼻すぢの細い、何か、女性的な弱さがあつたが、長身のうしろすがたは殊にほれぼれする程まっすぐで、やせて美しく至って物静かな態度物腰、ひと目で智的教養の深さがわかる人物であつた。

ただ、眉が細くて、うすいのと、唇が、うすくて小さいのが、ちよつと、利己的な、冷酷な人の様な感じを与えたが、色白く広い額は美しくかった。

東京の生れで、家柄も良く、父は工業会社の重役、母は旧い華族の出だと云った。

何しろ、挙措動作一点非のうちどころのない若紳士である。

『わたくし……エ！、×××の工科を出まして、あのう……』
女のような、やさしい物言いと、唇をすぼめて、オホホホと笑うのが、へんな感じを与えたが、ばか丁寧なことばや、慇懃きわまる行儀のよさに、こちらは、何か、圧倒されてしまうのである。

『ねええ。立派を人ぢやないか。日本の上流の人って、きつと、みんな、ああなんだろうねえ』

母親は、ひとりで、ホクホクよろこんだが、父親は、さすがに、このやさしすぎる青年が、果して、勝気なさと子を、うまく、制馭することが、できるか、どうかと、心の中で、考えていた。

いつも伏眼勝ちで、細く低い声で話をし、何か、はにかんででもいるように、時々、長身をくねらせるのが、さと子には気になった。が、しかし、兎に角、交際してみることにした。男が、理想以上の教養を持ち、相当な家柄の出である上に、『初婚』という、ふれ込みが、何よりもさと子の気特を、うごかしたのである。

浜口雄幸、とその男は名乗った。

これには、さと子の父母は、全く、びっくりした。さと子達は、伯国生れだから気がつかないが、『浜口雄幸』は、日本の曾つての大政治家。昭和の初めかに、東京駅頭で、凶弾に斃れた政界の大巨星である。

『父が、浜口氏の崇拝者だったものですから、それで
——
ホ、ホ、ホ』

と若紳士は、つつましく笑った。

それで、一応、納得は行ったものの、故、浜口ライオン首相とは、似ても似つかぬやさ男。營養のわるい女形（おやま）みたいな、何となく生氣にとぼしいような人物が、果して、娘と、うまく合うだろうか、と、父親は、長いこと思案した。

何だか、少し、ぐにやぐにや、してて、あんまり好きになれそうもないわ』

ある日、さと子は言う。

——また、お前のアレ、コレが始まった、自分の年を考えなさいよ。けっこうぢやないか。』
と母親。

——そうだよ。よく考えてなあ。人には添って見ろ、馬には乗って見ろ、という、ことわざが、日本には、昔から、ある位だ。……まあまあ、という所で、ガマンしなけりや。』
と父親。

兄、姉、妹夫婦、口の悪い弟達までが、大賛成だった。

——みんな、私を、あの人に押しつけて、ヤツカイ払いをした
いんだわ。』

そんな時、老嬢特有のひがみを出して、苦笑したが、しかし、さと子にとって、雄幸氏のするどい聡明さと、教養の深さは、一つの魅力となったことは、否めない。

……世間のしきたりどおりの交際期間を過ぎたのち、二人は、遂に婚約し、さらに半年後には、モウ、近々に結婚式という、ところまで、ゆき着いた。

父おやは、碁、将棋の方は忘れて、しきりと、結婚費用の計算に没頭しはじめ、弟は、姉さんよりあとで結婚式をするのだから、姉さん、なるべく早くすませてよ、とせき立てた。

六月に入ると、サンパウロは一層寒冷を増し、今年はとくに、太陽の黒点のせいで、例年よりも寒気がきびしいとの気象台の報知が、どうやら実現するけはいであった。

ある日曜日。恋人の日で、二人は、とても幸福であった。

雄幸氏の、ぜいたくなアパートで、客間のソファに向き合ってすわり、中年の恋人同士は、とりとめのない話を交していた。

高級な家具調度よい趣味の置物や絵画。高価な敷物。一切が何かテアトロで見る舞台装置めいて居て坐っている二人が、せめて二十代だったら、ほんとに美しい場面に、なったにちがいない。

——ものうい位、よく晴れた、静かで、平和な、午后だった。

温かい太陽、ややつめたい風……。いづれは、此の新居に、女あるじとして起居するようになるのだと、さと子は自分に言いきかせながら、うっとり陶酔したような、心地になっていた。

その時である。

雄幸氏が、じつに、奇妙なことを、言った。

——さと子さん。あの……。ぼく……。見たいんです。見せてくれませんか。』

——あら、何を、ですの？』

おどろいて、眼がさめた様になり、さと子は、あわてて居ずまいを直した。

——あなたの……。きみの肌を、ぼくは、一度、よく観察したいんです。』

——ハダ？ ハダ？ あの……。肌！？』

——きみ、いま、裸になって、くれませんか。』

——なぜ？だって……。私たち、もうすぐ、結婚するんじゃないですか？』

——だから、ぜひ、見て置くことが、ぼくには、必要なんです。結婚しちやってからでは、もう、おそいんです……。取り返しが、つきませんからね」

終わりの方を、ひとり言のように言うと、雄幸は、起ちあがった。

——さあ、……すみませんが、ヌードになって下さい。ただ、見るだけなんです、安心して下さい』

——いやだわ、こんなところで』

——では、ぼくの室でもいゝ、——着物を脱いで、出てきて頂きましょう』

——だから、何のためによ?』

——結婚式、すんちやってからでは、君の肌に、失望したって、あとの祭りですからね。殊に、カトリックで式を済ませたら、日本の様に、そうカンタンに離婚なんて、できやしない……結婚登記もそうでしょう? ぼくはね、女の人の肌については、とくに、やかましいんだ。……貴女の首すぢ耳のうしろ、えり、手や足などの肌いろは、ぼく、最初から気に入った……。すばらしい! と

さへ思った……。

しかし、きみの肌そのものは、まだ、ぼくは見ていない……結婚しちやってから、ぼくの理想とちがっていて、ガツカリしたって、取り返しはつきませんからね。ほんとうに、ただ、見せて頂けただけなんだ……何も、しやしない。さあ、ヌードになって下さい。……早く!』

平常のやさしさに似ず、毅然と立ったまゝ上から、きつと彼女を見据えている雄幸氏からは、あの柔弱さはどこかへ消え失せ、ゾツとする様な、つよい男の気がまえが、そこにあった。

『お前。まあ! まっ青になって、……どうしたの?』

いつもに似ず、ドカドカと、騒々しく、玄関から駆け込んでき

た娘の容子の、ただならぬ有様に、ドギモを抜かれた母おやが、編み物を放り出してそばへ来た。

—— あんまり、失礼だわ！ ひっぱたいて、逃げて来ちゃった！』

—— えっ！ 雄、幸、さん、を、かい？』

母親のあたまに、ピンとひらめくものが、あつた……。 (もうぢきに、結婚するんだから、すなおにしてあげればよいのに……。此の、強情な、バ力むすめは——)、 まじまじとさと子を瞋めて、

—— お前、ナニも、そんなに、さわがなくなつたって—— 接吻ぐらい—— と言いかける母おやの抗議を、ひったくる様に、

—— ナニ言つてんのよ！ それどころぢやないのよ！ アノ人すこし変態よ！ はじめてだわ、あんな男

さと子は、まだ、息を切らしている。

父親も、愕ろいて、次の室から、将棋の駒を一つ、握つたまゝ、出てきた。

—— さと子。何か、あつたのか？』

—— 、私に、ハダカになれ、つてきかないの、それもまるはだかに！

—— 写真でも、撮るつもりだったんだらう

—— 父親は、鼻の頭にずれた眼鏡越しに、娘の昂奮した顔を眺めた。

現代は、ヌード写真の流行である。

しかし、あの物静かで、教養深い紳士が、まさかとは思つたが、

—— からだに手でも、かけてきたの？』

母親は、高い所からでも飛び下りるような気持ちで、恐る恐る、きいてみた。

——そうぢやないってば！ 手なんて出しやしないってば！』
ふたおやとも、安心して、

——『ぢや、どうしたんだよ？』

同時に、声が出た。

——私の肌を、観察する、必要があるって—— 結婚前にぜ
ひ見るんだって……そんなこと、あるかしら』

——でも、手を出す、って言うんぢやないんだからね。ただ、眺
めるだけなら、眺めさせてやればよか ったのに……あの人、
きつと、芸術心があるんだよ』と母親。

父親は父親で、

——肌を、しかし、何で、眺めたいんだ？ 結婚すれば何時で
もいくらでも眺められるぢやないか』
と、ツイ、ほんとうのことを言った。

——だって、ずいぶん、失礼なのよ。もしか、私の肌が気に入
らなくて失望したって、あとの祭りだから、今のうちに、よく
見ておきたい、って。それで私、言つてやったの。ぢや、私の肌
が、もし、お気に入らなかつたら結婚、おやめになるつもり？
って、そしたら、何て言ったと思うの？まあ、そういうことに、な
りましょうねえ。だって！そしてこんなことも言ったわ。三十五
の処女の肌なんて日本では不具者は別だが、見たくも見られない
—— っ。あんまりバカにしているぢやないの！ ずいぶん
よ！ほんとに……。ホントに、ほんとに、いやなヤツ！』
さと子の胸は、まだ、おさまらない。

浜口氏の所からは、それつまり、何の音沙汰もなく、むろん、婚

礼も、一時、断絶の形になった。

日が経つにつれ、さと子の憤激も、次第に冷め、冷めるにつれて、何とも言い様のない寂寥さが、さと子の心を、閉ざし始めた。コラソン・ソリタリア——。淋しい、ひとり者の境遇が、以前にも増して犇々と、身心にこたえてきて、夜など、酒を飲んで見たくなる位であつた。

あの時、雄幸氏の顔を、思い切り叩いて逃げてきたことが、何か、大変、間違つて居た様な、悪い事をした様な相すまない心地に、しばしば、なつてきた。

『後悔』というのは、こういう気持を、指すのであろうか。(あの時、もしも、すなおに、裸になっていたら——、今頃は、もう、とつくに結婚していて、あの、きれいで豪華なアパートに、ぜいたくな若夫人として、納まつて、居られたであらうに……。

事情を、何もきかされて居ない弟達は、また、姉が、いつもの、反抗癖を出して、断わつてしまったのだ、と思い込んでいるから、一層、姉を、バカだ、バカだと罵しり父親は、二ガイ顔をして、また、碁や将棋に戻り、母親は、気のぬけた狸の様な表情で、つくねんと長椅子にすわり、時折、思い出しては、

——ほんとに、お前も、困った人だねえ。さと子。雄幸さんは、あんなにいゝ人だったのに——』と惜しがるのである。

——だって、いやだわ、あんな男！……そうきつく言い返す娘の抗議の口調も、しかし、だんだんに弱つてきているようであつた。

父親は、時折、

——いや。浜口君の言葉にも、一理あるな。女の肌の色や起伏

というものは、全く、男にとっては、大切な条件だからな。……..
おれも、じつは、結婚してすぐ、母さんに失望したのも、それな
んだよ。

浜口君は、その点、じつに用意周到で、また、責任観念もある
と、われは思うな。非難すべきではないよ。見あげたものだ』

——あなた！お父さん。今頃になって、へんなことを、言い出
さないで下さいよ！私のどこに失望なさ たんですか？』どこ
も、かしこも……。第一お前の肌は、くろくてザラツいている
よ。ウチの子供達の肌が、おれに似て白くてなめらかなのは、もっ
けの倖いだよ。』

——いやらしいねえ。お父さんも。』

口の悪達者な末弟は、

——姉さん。淋しくないかい？ あのおホホ氏も、淋しがっ
てるよ。きつと』

——よけいなこと、言わないでよ！うるさい！』

——可哀相だなあ。あの、おホホ氏……。彼。姉さんがずいぶん
好きの様子だったものな。

『それはまことに、残念で、ございます。おホホ、って言ってるよ。
きつと』

——つね雄！だまりなさい！』

母親に叱られて、弟は舌を少し出し、片眼をつぶって、室を出
て行くのだが、誰も、笑わなかった。

雄幸氏を、強いて、へんなヤツ、変態男、と、悪く考え様とす
ればするほど、理智にするどい教養の深い紳士的な言動の一々が
思い出されてどう仕様もないのである。（あんな人は、もう、二度

とは、出て来ないであろう）そう考えると、とんで行つて、もう一度会いたいと心が灼けつく様に焦せる。これが、『未練』とでもいうものであろうか…………。

その上、雄幸氏は、接吻の名手でもあつた。さと子の方にも、それを、充分に識別出来る過去の経験が、あつた…………。

二人の唇が、熱く熱く、しかし、強く触れ合い、カチツ！と、どちらかの皓齒が鳴る…………。唇と唇とが、まるで、ほんとうの恋人同士のように、熱烈に、鮮烈に、ふれ合い、もみ合い、こすり合わされ愛撫し合う時の、——あの触感の、こころよさ！

上唇が、下唇を、探し求めてこれを追えば、下唇は、上唇に縋りついて、これを吸う…………。やわらかく、やわらかく、磨り合わせる時の、息の弾み！かすかに、鼻の先が、ふれ合い、二人の喘ぐ息吹きと、二つの心臓の鼓動が、唇の動きにつれて、緩急する。このふれ合いの、とろける様な心もち！——いつか甘い追憶にうっとり和我れを忘れるさと子である。ああ、もう一ぺん会つて、見たい！

写真はどうに、破つて、捨ててしまった。さと子は、空想の中でだけ、雄幸氏と会うよりほか、仕方なく、夜の寝台の中で、雄幸氏の唇に愛撫される想像に身をもだえ、幻の男の面影を、空しく追い求める女となつた。

——姉さん！今日、ひる頃、あの、おホホ氏に会つたよ…………。ブラッサ・ダ・セエで…………。そしたら、一緒に食事しましょうって、カレ、きかないのさ。どうしても、僕を、放さないんだよ。で、いろいろ話をきかされちゃったけど…………。姉さんは、あの人がヌー

ア（裸）になつてくれ、つて言っただけで、怒つちやたんつだつて？ えゝ？ バカだよ、オッセ（君）は！

『常雄』。

さと子は、思わず弟の腕を、固く掴んでいた。

——それで、エレ（彼）何て、言つてた？ 私のこと』

——どうしても、どうしても、すきで、すきで、仕様がア、なアいつてさ！』

日本語で、そこまでを、唄う様に言つた弟は、突然、きつと姉を見据えると、つよい命令口調で、

『VOLTAPARAELE！』

（彼に還れ！）と、ポルトガル語で言つた。

同胞の血は、やはり、水よりも濃く、日頃は犬猿の間の様でも、この夜ばかりは、弟はしんみりと姉を説得し、姉はまた、至極神妙に、耳を傾むけるのである。姉弟の会話の時は、むつかしい事となるとしぜんに、しらずしらずのうちにポルトガル語となり弟は演説めいた口調で「男ごころ」というものの微妙さを説明した末、最後に、日本語で、

——姉さん、まじめに言うよ。もう一度仲直りしたら？ 今のままぢや二人とも不幸になるばかりだろ』 弟は、姉の、今まで知らなかった雄幸氏の過去を、詳しくきいてきた。

雄幸氏は、大学を卒業して、欧米に留学するまでは、ゼツタイの金髪碧眼礼賛者であつた。

未来の妻は、白哲人種よりほかは無い、とまで、思け詰めていた相である。ところが、ロンドン、パリ、ニューヨーク、ボストン、

と、諸外国の女性と交際してみても、判ったことは、碧眼金髪は美しいが肌の美しい人がいないことであつた。十五六から、二十才位までの、白哲人種のバラ色の肌は、全く、此の世のものとも思われぬ程の美しくしさであるが、しかし、モチ肌というのはすくなく、また、三十才過ぎると、恍惚とする様なバラ色もこれが世にも汚なくなり、ソバカスだらけに変わる幻滅を発見して、ガク然とした。南欧系の、スペイン、イタリア女達は、また、やはり、少女のうちには実に美しい、浅黒い弾力ある肌をもっているが、これがまた三十才過ぎると、脂肪が濃く皮下に澱んできて、まるで燻製の鯡の腹の皮のようになる、（雄幸氏は、浅ぐろい肌の女は、きらいであつた。）到るところの国々で、いや、という程、女の肌の幻滅と失望とを味わい、日本へ帰つて見て、はじめて、女の肌の美しさ、というものに、少しく開眼してきたのだが、それでも、彼の心に、ピツタリと合う、肌というものは、無かつた。

招かれてブラジルにきて、あるパーティーで、さと子のえりあしの美しさを発見し、交際してみたところ、益々その肌の色の美しさに、心を惹かれたが、それ以上に、ブラジル日本人のさと子の心の美しさ道德の堅固さと、さと子の家庭の健全な温かさ、平和さにも心を惹かれたのだ、と言つた相である。

雄幸氏の母親は、三千年の日本の伝統を享けついできた京都の公卿華族の出身であり、その血統的に洗練された肌の美しさ、というものは、比類のない位、美事なものでその母を、此の上もなく尊敬し愛する雄幸氏は、いつか、女性の皮膚に、やかましい条件と希望を持つ男になっていたのだ、という。

そして、弟は、笑い乍ら、こう、つけ加えた。

——姉さんの肌は、彼の好みにピッタリなんだって——日本語で、エレ、言うんだよ。”幽玄で、夢想的、神秘的、なんだってさ。そして昼顔の花の色のような可憐さも、あるんだって——ほんとうかい？　姉さん。ぼくも見たいよ、そんな肌！』

——よしてよ。常雄。いやだわ』

その夜、さと子は、自分の室にとどこもり、永い間鏡の前に立ちしみじみと自分の全裸の肌を眺めた。その肌のうしろに、いつしか、雄幸氏の、これも、全裸の姿を描き出そうとするのであるが、処女の哀しさ、ほんとうの処女の哀しさ、男の肝心のところはボヤけていて一向にハッキリせず、それでも、ひとりで、赤くなり、身全体が、熱く、ふるえて来るのを、どうしようもなかった……。

弟が、どこを、どう、とりなしたもののか、或る日曜日、突然、雄幸氏が、やってきた。跳び上る程、おどろいたり、よろこんだのは、父と母で、『さあさあ、どうぞ、どうぞ』と父親は、将棋盤を持ってうろうろと、客間を歩きまわり、母親は、台所で、ヤカンをひっくり返した。

弟は、姉の手をそつと引っぱって、『姉さん、うれしいかい？』とからかった。その弟の顔に、感謝の微笑を送りながら胸をドキドキさせ、客間に一步、入った途端、さと子は、手、足、からだ全体が、すくんで、動かなくなった。

恋しい、なつかしい人の姿が、顔が、瞳が、ああ、唇が、そこに在った！

——いつぞやは、大変、失礼致しまして……………」
相かわらず、物静かで、丁寧な、紳士である。

——ほんとに、すみません……………」私が、わるう、ございました……………」

さと子は、深々と、ひざの辺まで、頭を下げた。此の十何年、ついぞ、娘の口から、『すみません』の『私が悪うございました』のと言うような言葉を、きいたことのなかった父母は、互いにうなづき合うのである。

——驚ろきましたよ。僕は……………」三日程、痛みました』

雄幸氏は、つつましい微笑と共に、左の頬を、なでて、見せた。
……………」

消えてなくなりたい、と、さと子は、思った。

——いや、貴郎は、じつに率直で、わしの氣に入りました。結婚前に、一切を調べる、ということは、これや、大切なことですからな。無責任な男なら、失望したら、それつきり、別れて平気で、居りますからな。貴郎の責任観念は、見上げたものですよ。じつに、実に立派だ!』

ハゲ頭を振って、ホメそやしたあげく、さと子の父親は、嬉しさのあまり、――

——如何ですか、浜口さん。今日、さと子の肌を、ごらんになつては』

と、すつとん狂な提案を出して、母親を狼敗させ、さと子を室の外へ、駆け出させてしまった。弟は、ひとり、ゲラゲラと、笑いころげた。

流石に、雄幸氏も、顔が、あげられない。まっ赤になって、う

つむいていた。

こうして、覆水も、盆に還り、さと子と雄幸氏の『えんだん』も、再び、軌道に乗り、どうやら、結婚という、最後の駅に着くようである。

沖縄の飛行隊長

サントスの海は、凧いでいた。

まるい空は、あくまでも澄明な青さを堪え、茫洋たる海は、涯しない群青の漣をつらねて、かがやいていた。

しめった砂地は、まるで艶のいゝ海獣の感触を以て、なめらかに光り、その、やはらかく、やゝくろずんだ灰色の、裾を、細い一条の縞形に、白泡が嚙んでいた。

美しい、そして、静謐な午後……

遠い水平線の涯てを、小さい、一点の黒影となつて、汽船が、動いてゆく……。

海鳥も飛ばず、雲ひとつない海と、空——。

ただ微風だけが時々、潮の香を、いっぱいのせて、私のまわりを、吹きすぎてゆく——。

沢山の人々の群れている、ゴンザガの浜をあとに、私は、たった独りで、人気のないところを求めて、渚づたいに、歩き出していた。

いまこれから、心の中に、くりひろげようとする、おもいでを、よけいな人間達によつて、かき乱されなくなかった。

思い出、それは、私に許された、たったひとつの愉楽でさえ、あった。

人気のない、静かな海上はるかに、またしてもうかぶ、彼の人のおもかげ、は——

誰も知らない。 誰にも判らない。

サク、サク、サク、と私のサンダルは、軽く砂地を噛み、噛まれた砂地は、そこだけ可愛らしい凹みを作って、ひとさじの潮水をためる。

海辺の街々の、高い建物も、低い家並みも、もう、はるか背後の彼方に距り、私の後方には、たゞ、湿った砂と、前方には、光る海面と、青いあおい空のほかには、もう、何ものもなくなった。湖の香にみちた空気と、さわやかな風のほかは、何も触れず、視野を遮ぎる何ものもない。

膨拝たる海洋の大气と、陶々としたその雰囲気とは、私をいつか空想の世界に導びき入れていた。

空想。これにひたることこそは、貧しい市井の一女画家である私にとって、苛烈な酷薄な此の世の中から、完全に隔絶逃避出来る、たゞひとつの桃源境であった。

そこでは、未来に、はてしない飛躍の翼を伸べることも、過去に限りないなつかしさをこめて追憶の水脈をひいるみることも、心ゆくまで可能であった。

沖縄の戦いに、二十五歳の若い身と魂とを大空に散らした愛する人のおもかげは、白昼夢よりも鮮やかに、空の彼方にうかび、微笑して私を呼んでいる様である。

思い出は、二十二年前からあった。

宗武之と言った。

其の時、八才の少年は、みすばらしい服装と、よごれた手足はしていたが、その顔立ちは意外に凛々しく美しく、ふしぎな気品をさへ持っていた。

南米行の移民船、さんとす丸の甲板上で、この少年は、いつもワラゾウリをはいて走り廻っていた。

沖縄移民の呼寄せ妻として、渡伯する母親に伴われた少年で、天にも地にも母一人子一人だと言った。

次に偶然会ったのが、またそのさんとす丸や、ブラジルに母の墓を残し、十二才のまだ幼ない身柄を唯一人、船長に托されて沖縄に帰る武之の、可憐な姿であった。

そうして、ふしぎなめぐり合せは、さらに私たちを三たび九年の歳月のちに内台連絡船となってその時就航していたさんとす丸船上で、ゆき合わせてくれたのであった。仕官したばかりの海軍飛行将校、二十一才の少尉として私の面前に彼は出現したのである。

台北の任地に、航空士官の彼が、なぜ、海路をえらんで行ったのか？

さんとす丸こそは、彼にとっては亡き母の思い出につながる、なつかしい船であったのだ。それとともに、ああ。私とめぐり合うという見えない偶然も、その時神の手で作られつゝあったことを、彼は、知っていたであろうか。

沖縄の豪族、某氏と、年わかい小間使いとの間に、世をしのんで生れねばならなかった運命の子はしかし、母と父との美点ばかりを身につけて此の世に出てきたようであった。

まことに美しい顔だちと、類い稀な優秀な頭脳と良い資質とを受けていた少年は、八才、母と共に渡伯して以来、酒乱の義父に

虐げられながら、モジアナ奥地の甘蔗耕地を、母と共に転々としていたが、四年後、母は遂に過労と栄養失調から病に斃れ、武之十二才の六月、遂に耕地の茅屋で二十九年の若い生涯を了った。義父は甘蔗で作った焼酎を浴びる程呑んで母の死骸のそばに眠りこけ、武之は冷めたい母の骸に顔に掌をあてては咽び泣くのであった。

耕地中の同郷人達が集まってその同情と耕主の情けで葬式は出し、武之の賢いのを惜しんだ人々の情けで、少年は再び沖縄のふるさとへおくりかえされたのであった。

母方の親戚や篤志の人々の温かい援護のもとに奨学生となった武之は、県立那覇中学、鹿児島高校、九大工学部を進学中、学徒兵として応召、海軍飛行隊に甲種学生として入隊、わずかなうちに優秀な操縦士となった。そして、新設の台南航空 基地に赴任の途中 さんとす丸船上で私と三度目の邂逅をしたわけなのであった。

—— 私にとって、生涯忘れられない母はいまモジアナの奥石ころだけのM耕地の墓に眠っています—と、宗武之の重い言葉のはしはしから私がきき出したのは、神戸港を出てから三日目、船が魔の台湾海峡、世界最深処といわれる辺りを、暴風雨を衝いて難航中のある夜半であった。 かつて、駆逐艦“早蕨”の沈んだ辺りで、この海峡を越える船びとたちの、最もいやがり恐れる洋上であった。

七千屯。かつて南米航路の優秀船として、七ツの海を渡り、南十字星を、その檣上にいく度か仰いだ黒い巨船は、巨浪荒ぶる海上を、潮流をわけつつ針路を台湾本島に向けて、とりつつあった。

沖は暗く、風はさけび、波浪は泰山の崩れるが如くどどつと船腹をうち、甲板上に氾らんし、闇の濃い洋上はるか、幾十頭の白馬の、たてがみを乱して走るが如く白浪の連続する夜であった。

浪しぶく船首上甲板の条索のかげに、飛沫を浴びて、ずぶぬれになり乍らも、私達は長いこと停ちつくして、過去を語り合うことに我を忘れていた。

夭折する程の人は、早く老成するものか、二十一才とは思われぬ沈着さと逞しさ、十三年前の可憐な幼童は、その時、厳たる端正な海軍士官となっていて、三十才の私を威圧する如くに、私の眼前に佇むのであった。

日米開戦前の、日本内地の空気は、非常に惶ただしく、啻ならぬ殺気を、国中に孕み、国民のすべては連勝の誇りに酔い痴れている二千六百年祭典の盛儀は、じつに“神国”の無窮をさえ感じさせ、海外各地から馳せ集まって参列した同胞達の眼も心も、祖国の、このけんらんたる有様に、たゞたゞ、誇りと歓喜とおぼえるだけであつた。

思えばそれは、大日本帝国の、敗れを知らなかった時代の、常勝国としての最盛期の最後のその姿でもあつたのだが……。

東洋諸国の船舶の不足と、独英開戦につれての南米航路の危険から、大阪商船の南米航路は一九四〇年十月の興国丸を最後に殆んど廃止され、船は多く近海航路や南洋方面或は南方支部各地への航路に就航しているようであつた。

南方支部各地への戦域の拡大はまた、台湾航路さんとす丸船客たちの上にもよく表われ、積載する糧秣武器弾薬の夥しい擬装貨物は甲板、船倉を埋めつくし、草色、カーキ色の軍人色で船員の

服装から船客から一色にぬりつぶされている感じであった。

のんきに絵具函などを肩に女の一人旅などをしている私などは、決して歓迎されるものではなく、杉山船長は、『あなたののんきなにもおどろきますなあ』と笑った位であり、台湾に着いてからも、私は各地でしばしば憲兵の誰何をうけたものである。ただ台湾医大外科部長、台台赤十字社病院外科部長台北外科病院々長歴任等の肩書を持つ実兄の名声と、台湾憲兵司令部の大佐である叔父の紹介状とが、からくも私をスパイの嫌疑から救い、私は無事に、ともかく台湾を一週間することができたのであった。

長崎港外で、のちに、爆雷のために船と運命を供にしたブラジル拓殖組合の理事、古関徳弥氏などもこの時、拓務関係の要務を帯びて、台湾視察の旅をこの船上にあった。

その頃もうすでに日本の政府の肚は日米開戦の計画を充分に練っていたらしく、当然そういう時には南米ブラジルの珈琲は入手出来なくなるので台湾の各地を開拓して此処に珈琲を栽培させるため、ブラジルから珈琲の栽培に経験のふかい人々を逆に移住させ、台湾全島に珈琲とコカとペルー特産の規邦樹とを植えるのだ、などと、古関氏は船のサロンで話していた。

その時は、そういう話までもが、いかにも一つの“国策”らしく語られていたのである。

船が、神戸の第三突堤を解纜して間もなく晚餐が始まり、二等食堂が満員の際で、どうしてもテーブルの都合がつかず、たった一つ空いている右舷、窓寄りのテーブルに、司厨次長は私を案内した。

そこにはすでに、海軍少尉の略装の制服をつけたひとりの若い男が、端正な姿勢で、行儀正しく着席していた。

『ご婦人で、窮屈でもゴワしようが……他に席がございませんので、……何卒、ひとつ、お願い致します』

ていねいに、司厨次長は、頭を下げるのである。

『は。………かまいません。………何卒。』

ロかずすくなく、礼儀正しく、会釈した青年士官は、秀麗な顔をあげて、まっすぐに私を正視した。

その顔に、何か記憶を、ゆすぶられるものがあり、私は、瞬間に、はっとした。が、記憶は、私に、それ以上のことは教えず、あいまいな気持ちのまゝ、軽い会釈のちに、卓を挟んで私は青年士官の向う側の椅子に、静かに坐った。

前菜がすみ、スープも終り、うつむいて匙を使っていた私が、ナプキンの端で、そっと唇を拭き乍ら何気なく顔をあげた時、少尉の美しい目が、またたきもせず、ちっと私に注がれているのを見えた。

青年の前の皿は手もふれてない。もう一度、私が、はっ、としたのは、突然青年が弾かれた様に起立したからである。

『——貴女は、——なみ——なみ姉さんでは、ありませんか！』十三年前、ブラジルから、さんとす丸で、僕と同船して日本に帰られた方ではありませんか！………そしてまた渡伯された………？』

灼けつくような、しんけんな、瞳のいろであった……。

『あら………わたくし？………そうです………そうですわ。確かに………

十三年前、このお船で、日本に帰ったことがございます。……まだ、わたくし、学生の時……』

『ああ——』

と青年は声を低くひいて、

『やっぱり——なみ姉さんだ！　ぼく、……宗……武之。』

突然、さっと、忘却の闇の彼方から、一条の記憶の光りがさした気がした。

『武——ちゃん！』

同時に、どちらからともなく、差し出された右手と右手が、犇！と卓の上で、固く握り交わされた。

『まあ……本当に！　貴郎は、武之さんだったわ！　立派に成人なすったのね！　お母様、さぞ……』

言いかけて私は声を呑んだ。うかつな私は、此の青年の母が、すでに亡いことを、どうして忘れていたのか。われ乍ら、赤くなつて狼敗てた。突嗟に、それきり、言葉が出なくなった。

『僕、東京駅で、貴女をお見かけした時から、どうも、そうではないかと、思っていたのですが。……『燕』に乗って神戸まで来られたでしょう？　そして、トア・ホテルに……』　そう云われれば、その通りであつた。

しかし、私は、どうして此の人の居たのに気がつかなかつたのである。

再び腰を下ろした青年は、無遠慮な位、しげしげと私を眺めるのである。迫力、というより、もつと強いものをもつ眼ざしであつた。

私は平常にもなく、羞耻に顔のほてるのをおぼえ、何か、まぶ

しい様でさえ、あった。十三年前の、渡伯の時とその後の帰国の船上での、少年の姿が、はじめて鮮やかに、それは昨日のここのように私の心の中にうかび上り、なつかしさが、噴水のように私の全身をひたしてきた。

もう、食事など、二人とも、忘れていた。卓付きの給仕が、非常におどろいた様な表情で、眼を瞠って私たちを見ていた。

八才の少年を自分の船室に呼んで御馳走したり、入浴させてあげたり、した十三年前の記憶や、四年後、日本に帰る船中で、又偶然にもめぐり合った時は、一層の可愛さをおぼえて、それに孤児となった少年へのいとおしさも加わって、ずいぶん親切にして面倒をみてあげたことなども思い出された。たった一人旅の少年なので、特三のある家族部屋の中に割り入れられていたが、帰日訪日の人々みんなに可愛がられ、托された船長もまた、特にやさしく眼をかけてやっていた。

『沖縄のどこにかえるの?』

『摩文仁のおんちゃんところ』

『お母さんはどうしたの?』

『ママイ、……死んぢやった……モレウ(死んだ)』

死んぢやった、というところを、もう一度ポルトガル語で、くり返すのも哀れであった。

私は船旅の間も、絵の勉強は忘れなかったが、そのついでに、十二才の少年に絵画の歴史や絵の描き方などをも教えたものであった。下甲板のプールで、何日もかかって、泳ぎの手ほどきをしてやった日のことも、次々と思い出されてきた……。

私の父は、明治初年、北白川宮が、台湾御征討の時、扈從した軍医であつた。外科の名手として知られ、日本が完全に台湾を領有後、つまり日清戦争ののち、父は再び台北に渡り外科病院を経営し、現在では私の実兄が、そのあとをついでいた。

父の弟は外交官で、永らくヨーロッパや南米各地に駐在した、此の叔父には子供がなく、こん望されて、私は叔父夫妻にもられ、従つて、幼少から私は叔父夫婦について海外各地で育つた。父がリオの大使館に書記官として赴任した時も、伴われて渡伯、その時ブラジル移民として渡伯する武之母子に会つたのである。四年後、叔父一家が賜暇帰朝の折、奇しくもまた、日本のさんとす丸で、沖繩に送られる武之と会つたのである。

其の後、私が東京で絵の勉強中、叔父は任地のヨーロッパで亡くなり、叔母も帰朝して間もなく病死したが、叔父の遺言で、私は商大出の貿易商社々貞早川岩雄に嫁ぎ相携えて来伯した。販路を南米に拡張するためリオに支社をおき早雄がその責任者となつたのだつた。

しかし、此の結婚は、完全に失敗であつた。ひとり子同様に甘やかされ、表面はどこまでもぜいたくで華やかな外交官の家にめでいつくしまれて育ち、よく言えば自由闊達、悪く言えば苦勞を少しも知らず我がまま一ぱいに成長した私であつたし、その上、女の子のくせに（と当時の私の周囲の人々は口を揃えて言つたものだ、また、お前に上村松園や池田蕉園女史のような大天才でもあるなれば、格別、自分で好きだから、位で絵の修業にうち込むなんて、とんでもないバカげたことだ、とまで言つたものである）

しかし私は絵画を描くことに特別の愛着をもち、幼少からどんな時でも絵を描きたがり、長ずるに及んでは益々、憑かれたように画に執心し、また、十七、八から二十の頃にかけては、恐らく叔父のおかげもあつたに相違ない『絵の天才』だなどと周囲の人々は私をオダて、春陽会とか、二科会にまで私の油絵は人選し、東都画壇の一隅に、天才少女画家などとその名を呼ばれた輝やかしい日も一再ならずであつた。叔父の遺言、実家の父母の賛成、それに先方からは三年越しの執拗さで求婚され、懇望された果てに、意を決して家庭の人となるべく嫁いではきたものの、——画筆など、取る女性のつねとして、どこか通常の家庭婦人とは異なる、遍つた私の性質、——カンバスに向う時は一切を忘れ果て周囲を顧りみなくなるという、あの救い難い私の癖、熱狂に画のとりことなってしまう私の偏執的なひたむきな気持は、画家としてこそは当然であり、ほめらるべきではあつたかもしれないが、家庭の婦人としては——まったくラクダイであつた。通常の家庭の平凡でつ、ましい妻として期待され、迎えられた私の性質、行為、することなすこと一切が規格外れの感じを夫及びその姉妹達に与え、姑を始め一切の良人の家の人々の気には入らなかつた。ほんとうは、絵筆をとるより箒をとり、絵具を溶くよりも、雑巾でも使わなければならない舊式な制度の日本人の家の嫁でなければならぬ私には、それがまた、はたの者が呆れる程の、のろまき、不器用さで、はじめは私の画才に、多少の好奇心を持って、言はば一種の世間態えの見栄、に、私を懇望しては見たものの、伯龍が娶つた天女の如く、炊ぐ術も知らず、裁ち縫いのわざすら、定かでない私を、岩雄よりも姑が満足する筈はなく、また、世間智

にうとく、物事をただありのままに、かくさずに言動する私の言うことなすことのすべては、あまりにかげも、うらおもてもなさすぎるのが却って甘ったれのお嬢さん、苦勞知らずの我がまま者に誤解されることも多く長い間を未亡人で暮し、世間の表裏を見極めてきた姑には、至極心もとないおぼつかない浪費ずきのハデ好きのバカ嫁としか映らず、そこには又、さまざまの、折角高給をとつてくる岩雄の収入は、皆、嫁に使われてしまふのではないかという、慾からくる羨やみとかその他もろもろの挟雜物的邪心や障害が入り、その上、もつとわるいことには、十人ちかい男女の子をもち乍ら、長男の岩雄ただ一人がかあいくて、かあいくてもならぬ、と言った姑の偏愛が高じて、その大切な岩雄をこれから日毎夜毎このロクでなしの嫁が占領してしまふのかと思うと、嫁憎さは倍となり、若い生命に対する老いたる生命の嫉妬、羨望、やるせなさ、淋しさが渦をまいて老人の心をいやが上にも意地悪なものに変質させ、絵をかくだけが、能というまぬけな私は、瓦礫の中でもみくちやにされるやわらかい板みたいなもので、満身創夷の有様であつた。そうした暴れな妻をかばう愛情は、多少はあつても、氣弱な良人は母おやの怒りをおそれて敢て表面には出さず、時とすると母と共に妻をひどく侮辱したりして母におもねる仕末であつた。そうした私達の間は、数年後には、当然、誰が見てもつめたく、他人よりもつめたく、お互いに蹤いてゆけない大きな距離を隔てて、互いにその距離をちぢめようとする氣持も出ぬままに、灰色の道を彷徨するばかりにまで達していた。

幸か不幸か、子供は生れず、岩雄は、すべてを知りつくしてしまつた上に、母や姉妹からいつも非難の的にばかりさらされてい

る能なしの妻になぞは、最早や、何の興味も愛着も湧かず、ただ、二人ともによく判っているのは、双方とも、歩みよることのできない間隙の大きさ、巾の広さだけで、——遂に当然のこと乍ら、岩雄は妻に求め得られなかったもろもろの不満を他の女性の上に求めてこれを受する様になり、それに拍車をかけるような一族共の仕打ちであつた——。

そうした折も折、二千六百年の祭典を機会に、両親の生存中ぜひ日本に一度帰るように、との実兄のはからいに、もう父母や兄達に会いたさに矢も楯もたまらず、岩雄に許しを求めた所、渡りに舟と二ツ返事の大賛成は、妻の留守に充二分に愛人と楽しめるからだったとはその時は心ずかず、いつもの冷めたい夫にしては、ずい分寛大だと感謝の方が先にたち、あとの事などは何も思うひまもなく、匆惶と日本に帰ってきた私であつた。

鎌倉に隠棲す両親を訪ね、横浜の叔父叔母の墓参も済ませ、台北の実兄を訪ねる船中で、私は宗武之少尉にめぐり合つたわけである。

『私ね、武ちゃん、…結婚なんかするんぢやなかった——とつくづく思いました。やっぱり、絵だけ描きながら、ひとりでいればよかった、——とよく考えるの』

——その絵はまた、結婚後十年絶えて画筆は持たされない状態にあつた……。

最近では、とくにそうであつた。

『画はまだ描いて、居られますか』

と、問われて私は、そう答えたのである。

『近頃では、もう何もかもだめ、——何も描けなくて、——虻蜂取らず、とは此の事ね。……家庭生活もうまくゆかず、絵の方も、まるで駄目、なまじ女の書描きなんて、——結婚なんか、するものぢやないわ——つくづく後悔してるのよ』

不覚の涙が頬を伝わった。沢山の小姑、権力を振う姑、そうした中で、とても、画業へなどの精進は望むべくもなく、両立しない家庭生活と絵筆況して良人に何の理解も援護の心もないとしたら、——才能など、しばむばかりである。

世の良人は、大低の場合、妻が一つの才能にすぐれ（自分のないものを妻がもった場合）それにうち込むことを極端にきらい、憎むもののようなのである。そしてこれがふつうの様である。

男の嫉妬。男の狭量さ。は逆に妻が自分より全てに劣っているとこれをよろこぶのである。口先では罵りながらも大層満足しているものなのである。

妻場合だったら、良人の上に、何か特別のすぐれた才能を発見した時は、大低の妻は、自分の一切を犠牲にして良人の才能を伸ばし、これを世に出し世にみとめさせるために献身する。良人達の狭量さとはまるで反対である。通常の社会的通念に生きている男と、なまじ芸術や芸能などの道を歩もうする女とでは男によほどきれいな心、深い愛情と理解がない限り、溶け合うことはむづかしい。しかも、妻の方が音楽とか絵画とか文筆とかの道に憑かれた様にひたむきに打ち込む時、良人はしばしばなをざりにされ、良人の雑用はかえりみられない。これを耐え得る良人はよほど愛情のふかい、妻への思いやりの厚い心根のやさしい人である。ま

た寛大な人でなければならぬ。

殊に日本の男だったら暴君型が多いからうまく行く筈がない。男のエゴというけれど男からみたら、また女のエゴイズム！と怒るであろう。——こうして、世の中の多くの女は才能をもち乍らも良人の眼識の不足または良人の狭量からくる妬心に防害されて、敢なく埋もれ、良人のエゴイズムは妻の中にかくされている才能の芽を枯らしてしまうことが多いのである。特に古い觀念に女配されているブラジルの日本人一世の間では……しかし、私は岩雄を愛していた。

妻の画に対する時だけ、激しく嫉妬し、自分にはない画才を妻がもつことに対して、ひどく嫌厭と憎悪をおぼえる狭量さも、時々は却つていとおしく、私は良人のために、十年間絵筆を捨てて家事に献身した。岩雄の嫉妬をあふるものにまた、周囲の雑音が在り“世間”というものは一對の夫婦、一組の主従雇傭者と被雇傭者側、債権者と債務者、そういう人と人との間の微妙な感情の動きを極めて鋭敏にまたすばやく感じ取るものであり、ちよつと隙でも出来ればみのがさず、たちまちこの間隙に更に狭木を入れてその隙を大きくすることにのみ、興味をつないでいると言つた残酷さを持っているようであつた。

その惨忍な他人のかきまわしに思うさまかきまわされ引きずり廻されている様な、氣の弱く我ままな坊ちゃん氣質が、岩雄には、確かに在つた。

十年。

こうしてつよい絵への執着も憧れも抑えつゞけ乍らそれに手をつけることもなく轍のあとに水を求めて喘ぐ小魚の様なもだえに

過してきた十年。

私は解き放された猟犬の様に絵画への希望をもやした。再び伯国へ帰れば、又捨てねばならぬ絵筆ではないか。

せめて此の旅の間でも……そういう気持で、船の中でも、私はカンバスに向っていた。

『なみ姉さん。僕もね、応召までは、絵をやっていたんですよ。好きでね』

武之は、自分の船室から六号ほどの大きさの習作をもち出してきて見せるのである。

私はおどろきで、顔色が変わる程であった。十二年前少年に、ほんのひまつぶしのつもりで、絵の具の溶き方や、デッサンの仕方を教えた遠い日の船旅のことが、ありありと私の心の中によみがえってきた

——こんなに、何も彼も、私の記憶を、身につけて成長していたのか！（此のひとは、もしかしたら、私を好きなのかも知れない………）

女に特有のうぬぼれが、私の頭の中を掠めた。——何か、この十歳近くも年下の青年にとりすがって、わあっと思ひ切り泣き出したい様な、烈しい衝動に、私は憑かれるのである。

チラ、と遠いブラジルに居る良人の顔が、心の隅にうかんだ、が、なぜか、私の心は、とがめなかった。不貞という観念は、その時不思議と起こらなかった。

このひとが私を好いてくれるのも何か当然であり、また、私がこのひとを好きになったとて仕方のないことなのだ。すべて運命で誰も悪いのではないのだ。そんな気がしていた。

私達は、十三年間の空白を、恰かも、此の四日に埋めつくそうとでもする様に、昼夜のわちなく語り合った。

深く話し合えば話し合う程、私達の心と心は近ずき、私は曾って良人には一度も感じなかった心の充足をおぼえるのであった。これは自分でも意外なしかし、快ろよい発見であつた。年齢の距離とか、良人のある身、とか、そういうことは少しも考えられず考えもせずまた私達二人の心と心とのふれ合いには、何のさわりにもならなかつた。

私の心は、というよりは恋情は、いつの間にか、この、二十一才の凜々しく初々しい青年に向つて、火の様な烈しさと熱さとで、執着するまでに、船が、愈々基隆の港に着く頃には、なっていた。

既婚者であり、三十才の女体ではあり、通常的感覺は、充分に備えている私である。男の肢体は、心の中で、不足なく鑑賞玩味することが出来た。また、この人を対象としてどの様な愛慾の場面もほしいままに空想することも容易であつた。過去の良人との愛慾情痴の場面を思い返して、それに武之の幻をすり代えれば充分満足できた。

が、そういう私であり乍ら、私は何も積極的には出来なかつた。手も足も出ない、自虐的な「道德」に固い風を装おっているよりほかどう仕様もなかつたのである。良い躰、などというものにすっかり縛られてしまっている自分を発見した時、私は自分の心の憶病さに腹をたて、涙を出した。

武之が下甲板のプールで泳ぐ時など、私の眼は、うつとりと彼の陽焦けした逞しいからだに見とれしずくのたれる水着の下部を

喰い入る様に飽かず眺めた。妖しいまでの全身の疼きが、そういう時、私をさらに陶醉させるのであった。

今まで、放つてあつた貴重な宝物が、いま、眼前に在り乍ら、それにどうしても思い切つて手の出ないもどかしさ！一つには、武之に、淫奔な女と思われたくない、という虚栄が私を縛っていたのかもしれない。此の年頃の青年が、母親とか或いは心の中で崇めている女の人を極端に美しく純潔な偶像として考えているのを、私は感じていたのである。

しかし、それでいて、みたされない悲しさに、私の心は苛立つていた。

基隆入港を前にして私達は、暁近くなるまで、語り合つた。

『十二年間、母のことと共に、貴女のこと、僕は、一日だつて忘れたことはないんです。どうかして、もう一度お目にからたいと、そればかり考えていました』

そう言う時、武之の頬は赤く染まり、美しい美しい瞳は濡れた様に光った。喰い入る様なその、つよいつよいまなざしであつた。激情に、溺れ様とする一瞬を辛うじて自制している男の、痛い様な真剣さであつた。

反射的に、私の心も昂ぶり、ふるえてくるのである。

——此の人に、恋人があるかないか、不思議とその様な推測には、思考は向かず、唯、このひとは、私をすきなのだ、と、思い込むことに私は溺れていたようである。それは快よい溺れ方であり、此の快感に身を浸していることは、曾つてない愉樂であつた。『お姉さん。ほんとに僕、最初から、貴女を好きでした……。』

吃りながら、武之は小さい声で、呟やく様に言った……。

『有り難う。武ちゃん！』

なぜ私はこのひとを抱擁出来ないのだろうと、自分ながらもどかしい。いづれは、大空に、散る人ではないか。少年の日の初心な憧がれを、いまこそ、充たしてあげられる筈なのに！ 私は幾度か、そう考えた。

しかし、どうすることも出来ないうちに、日は過ぎて行つた。

……

船は、台湾に近づきつゝあつた。

その夜も、私は少尉の船室に坐っていた。

幾十回の南米往復に、やゝ、潮古びたさんとす丸の、太い煙突から流れ出る黒い煙りが、ゆるやかに右舷の海上を流れて行つた。くらい空に、星屑が、チラチラとほんの少しばかりまたたき、夜光虫が、その星屑のこぼれたかのように、海の中できらめいていた。

船窓のカーテンがゆるくゆれて、時折さわやかな風が入ってきた。

単調なエンジンの音が絶えず足の下にひびき、航海の終りが刻一刻と近づくのが感じられた。

二人は、互いの眼をぢつと見つめ合つたまま言葉もなく坐っていた。

——いづれは、別れねばならない私達ではないか……絶え入りたい程の哀しさで、惜別の情が、私の胸の底からわき上つてきた。いつそ、ひと思いに、わつと此の人の胸に泣きすがり、この人

の腕の中に身を投げてしまえば、ふたりの想いは遂げられるのに、私は、もどかしくて、ぢれったくて、よけい苛々した。このひとに女のひとの情が、どんなに熱くつよいものであるかを思い切り知らせてあげたい！眼も昏むような昂奮と熱望に、私の全身は、ほてり、疼き、手足は、痺れた……。

だが、私はしばらくすると力なく吐息しつつ『おやすみなさいね』やさしく軽く握手だけして自分の船室へ帰るのであった。いつものように――。

――相知つて以来、私はしばしば宗武之の室の前をを夜となく昼となく彷徨し、武之も亦、しばしば私の室の前を、夜も昼も、往ったり来たりするのであった。

彼が、私の船室の扉口に立停つては、また、ひそかに立ち去つてゆく蹀音を、そのひそやかな靴音を私は、何遍、きいたことか――。すでに幾夜も、そういうことがあった……。耳で聴く、というよりも心がすでにつよく感じ取っていた……。

甲板や食堂やサロンでも、いつも彼は私の傍らにきた。私がサロンで、シヨパンの小曲や、シュウマンの「君を見てより」などの古い小曲の一、二節を弾く時など、彼は、熱くふるえる手をしばしば私の肩にのせたりした。青年のひたむきな情熱が側々として、私の心からだに注がれていることを、私は充分に感じとっていた。しかし、所詮は、私も、ふるい時代の日本の道徳に、しばられていた女の一人であつた……。

明治時代の女大学式の観念をどうしても、はねのけることのできなかつた可哀想な、『戦前の日本の女』でしかなかつたのだ

……。

十年間の早川岩雄の妻という境遇が、私を、このように情ない、もの怖ぢた心にしてしまったのであろうか。

私は自分を、良人という一本の柱に、妻という鎖でしばりつけられて、一步鎖を切れば手の届くところにある美味しい果物に、もだえながら、ひとりで泣きもだえている哀れな猿のようだと、自分を感じて自嘲した。その自嘲は口惜しさに変り、私はこの時ほど、良人を心から憎いと思ったことはない。

その夜も、これが最後という気がして、彼の船室に坐った私は、物が言えなかった。

少尉もだまっていた。

『武ちゃん！貴郎、死ぬつもり？』

なぜそんな、ばかな言葉を口にしたのか――、ただ、戦死させたくない！という気が、強く私を支配していたために、思わずそんなことばを出してしまったのであろう。なぜこんな若い人を、わざわざ空で死なせなければならぬのか、――なぜあなたは飛行機乗りになんかなったの？ と私は言いたかった。軍医か主計にでもなっていれば、よかったものを――。

愛する人を、よろこんで戦場へ、死地へと送り出した昔の女の人の雄々しい心も、その時の私には、なぜか不自然な、偽っているもののようにさえ思われた。ただ世間体や、体面をえらそうに装おうための偽りの感情であつたような気がした。（私はいやだ！）（武之を死なせたくない！）私はせいっぱい、心の中で叫んでいた。

それと、もうひとつ、大切なことを、私は武之の口からぢかにきいておきたい事があつた。

『武之さん』私はあらたまつた。

『あなた、これまでに、誰方か、すきな人か、恋人、あつた？』
『ありません！』

断呼とした、否定であつた。

『ぢや、…思い切つて言うけど。貴郎、ほんとうに私だけを好きだつたの？ そううのぼれても、いい？』

かおを伏せて、武之は、首の根まで赤くなつた…。少時の無言は、それがすべて肯定のしるしであつた…。

青年が全身でそうですと答えていることを、私は知つた…。

『うれしい！うれしいわ！！武之さん！！！！』

われ知らず、つつしみも何も忘れた私の双の手は、固く少尉の膝頭を掴んでいた…。

この感動は、私にとって、生れて、はじめてのものであつた。

新婚の夜良人に愛情を囁やかれた時の感動に比べてこの感じの何と能動的なつよいものであつたろう！未熟なままの、ただ羞恥と怖れとおののきながらきいたあの夜のすべてをあなた任せにしていた時である時の自覚のなかつた感動にくらべて、この成熟し、自信にみちた感動のふかさは！良人のあんな言葉さえ、思い出すさへ、白々しくいやらしく空しいものに感じられた。いまこそ、すべてを忘れ、すべてを抛つて、この人の唇にふれるべきではないか——ふれようか……ふれたい！からだがふるえ、呼吸が、はずんだ。私はそつと少尉の唇を見上げた。

武之は、端然と微動だにしない。が呼吸はすこしあらく、深く

なっているようであった。

あくまでもつよい理性と少尉の全心を止めている純粋な潔癖と軍人の名誉という観念が、少尉の心をせきとめていたのに相いない。

彼はじつに端然たる態度でちっと坐っていた。——そして、機会は永久に去った。給仕が扉を叩く音ぶした。

基隆入港の朝は、あいにくと雨であった。小雨で、しとしとと、やさしく降る雨に、乳色に煙る港の内外には大小の船舶が、影絵のようにうかび、灰色の巨大な軍艦のすがたも、三ツ四ツ見られた。

『この港、どこことなく、サントスの港に、似ていますね』

『ほんとうね。熱帯のせいかしら』

『港の形も似ていますよ。あの草の生えた岸なんか、そっくりですね』

二十一才の宗武之少尉の胸に、九年前の思い出のさざなみが、ひたひたとよせていたのにちがいがなかった。

彼はぼうとした瞳をして、いつまでも、いつまでも基隆の港を眺めていた。

演習のためなのか、雨の基隆の上空を、沢山の軍用練習機が飛んでいた。

その鉛色の空に、陰にこもる重い爆音を聴いていると、戦争がすでに、そこまできている様な圧迫感に、私はとりつかれ、なぜともなく私は、その時、武之は決して生きては還るまいという予感のようなものに心は暗く、沈んでゆくのであった。

海鳥は、もの哀しげな叫びをあげては、はたはたと、翼を檣上

にはためかし、起重機は鈍い軌り音をあげ乍ら、まるで無限のよう
に、船の底から沢山の物資を陸に揚げていた。

カーキ色や草色の一団の人達が、長剣を握り乍ら牛群の様に乱
暴に舷梯を下りてしまうと船の中は急にひっそりと寂まり、ただ
荷役の音だけが甲板でやかましかった。

雨に暮れてゆく基隆の港もまた、雨の日のサントス港とそつ
くりであつた。

入江形の内海。青い草の伸びた細長い砂洲、埠頭にただよう牛
皮や馬皮や雑穀のしめった匂い……黒砂糖や甘蔗やバナナ、マン
ゴー等の熱帯果実の匂い……。とくにつよい紅茶の匂い……ここでは、
気のせいか珈琲の匂いすら、するようであつた。その匂いに誘わ
れて、ふとブラジルを思い出した私であつたが、なぜかその時、良
人岩雄のことなどは念頭に浮ばない私であつた……。

台北から、一人娘の千江をつれて、迎へに来てくれた兄は、ます
ますやせて、白髪が目立ち、医者らしいおちつきと学者らしい威
厳とを身につけ、船長としきりにゴルフの話などをしていた。

私は宗武之を兄と姪とに紹介したが、私達の過去を何も知らない
兄は、なぜ特別に、そんな若い軍人を紹介したのか、という様な
表情でいた。

宗武之との別離！

愈々、私達との再会にも、終止符をうたなければ、ならないのか
…………。

もどかしさと、いらだたしさと、惜別の哀しみに心も乱れ果て

た私は、全身が灼ける様な狂はしさに焦り、久しぶりで相合う実兄との肉親の愛情も、骨肉をわけ合うものの温かさも感ぜず兄のやさしいことばもねぎらいの掌も其の時の私には殆んど何も投映せず、兄の言葉などは上の空できき姪にも冷淡に振舞っていた様である。

ただ一度でもいい、——あの少尉に、せめて別れのくちづけをしたい……もう良人のことなど、念頭になかった。私は、ものに憑かれた様に港を馳せ廻り、少尉の姿を求めた。漸やく探しあてた少尉の姿は、基隆の停車場から、台北行の急行にのるために数人の同僚の将校達と共にすでに、改札口を入れてこちらに背を向けて歩廊の方へ走ってゆくうしろ姿であった。

一九四〇年の秋の末のことで、文芸春秋社の台湾巡回文芸講演会が台北市で開かれるというビラが、駅の壁に貼りつけてあった。吉川英治、火野葦平、それに、菊池寛……。

だが、それらの貼り紙すら、私はよむ心の余裕を持っていなかった……。

基隆から、台北までの旅は、ふだんならまことに快適な旅路であったにちがいない。が、私にとってはすべての山形も、緑濃い景色も、眼に入らなかった、と云っていい。一時間と十分のみちかい沿線の景色は、サントスからヂュキアに至る南聖沿岸そのままであったが、それらの椰子やバナナやマンゴーの茂林、甘蕉畑なども、その時は何も記憶していなかった。眼はあいていても心の中では、ただ武之の面影ばかりをみつめていたのである。……気がつくともう、台北の市の入口で、黒い豚、褐色の大とかげ、

ロバの背に竹籠を積んでゆく台湾人農夫の浅黄色の上着などが、車窓越しに過ぎて行く。

草屋根、赤い裸煉瓦、泥壁の茅屋、それらの一つ一つが、ブラジルの南聖海岸の山の中そっくりだと気がついたのは、大分後になってから思い返してみた時にそう感じたのである。

『この向うの方が、草山の温泉のある見当になりますよ』

誰かが、窓の方を指して、誰かと話しているのを、私は、夢の中のようにぼんやりと耳に入れていた。

とつぜん、私は、この細長い台湾島の岬の一部に、ブラジル大陸の相似をみつけ、その錯覚からかブラジルにいる良人の顔を思い出した……。今頃は愛人を抱いてよろこんでいるであろう良人。長いあいだ、すげなく、つめたくされ、愛してもくれなかった良人をこんな時、こんなところで、突然、想い出すなどと……と、皮肉な気持で私は唇をかんだ……。

再び、私は自嘲的な虚無感に何か自棄的な気持に隋ちてゆくのであった。

その気持は、誰にうちつけようにもい憤おりとなつて私の胸をくらくかきむしるのである。

武之に近づくことは、何か快ろよい復讐を遂げることなのに、

——なぜ私はそれをする勇氣をもち得なかったのか？

台北市東門町の兄の家についた時は、もう三時を過ぎていた。

武之とは、船で別れたきりである。

台北の飛行場から、高雄の飛行隊に向けて、彼が出発するのは、もうあと一時間の後である。

私は、全身を灼かれる様な気がした。いっそ、台北の飛行場まで、タクシーでかけつけようか？——といら立っているところへ、門前にオートバイの爆音がし、やがて玄関に武之の声がきこえた。

——やっぱり、彼の方から別れにきてくれた。——うれしきで、眼も眩む想いだった。ほんとうに飛び立つ様な、——とは、この様な心を形容、表現するのであらう——

『お別れに、まいりました……』

せつない哀しい彼の瞳であつた。

思い迫つた——一瞬の沈黙……。

私とてまた、この焦燥！

かつ！と長靴の踵を鳴らして、姿勢を正すと、挙手注目の人らしい札を彼はした。

別人のごとき彼だった。

気の遠くなりそうな惜別の想いに、私の目頭からは、どつと熱い涙があふれ、私は呼吸の出来ないまでの切なさを感じた、思わず『武ちゃん！死なないで！』叫ぶと、われしらず私は少尉の革手袋の両掌に掴まってこれをゆすぶっていた。

『……はい』

忽ち、私は、彼のつよい双腕の中に抱え込まれ、彼の顔が私の顔のまうえにきた……。若い男の火の如き息吹きと、轟ろく胸の鼓動とが、はつきりと、私の皮膚に感じられた……。

——少尉の両腿に密着し、さらに固く私は抱き締められた。その肢も腕もからだも息も、ふるえているのが、私には痛い程感じられるのである。

——にもかかわらず、ああ、何というぢれったいことであろう私の本能的な“人妻”意識は、この瞬間の衝動的な忘我の抱擁の間にも、厳然と顔を出すのである。―あれ程、岩雄を心の中で今の今迄憎み恨んでいた私だったくせに―。

武之の、思いつめた熱情をも、われ知らず、固く拒むような姿勢を、自然のうちに、とっていたのである。

臆病な、怯懦な、かたくなな道德意識！偽りの、虚栄の道德どころ！

心の中では、あれ程求め望んでい乍ら、この期に及んで、私の両掌は彼の胸をおしのけ、顔は彼と重ならぬよう、横を向いていたのである―ばかな、大ばかな私！無意識のうちに、私の姿勢は、拒絶の身もだえをしていたようである。

人妻という、とり去ることのできない精神的なしがらみが、私を十重二十重にしばっていたのである。

彼は、ぱっと私をつよくつき放した。

『ごめんなさい！なみ姉さん！』

そこえ、扉が叩かれ、兄夫婦が静かに入ってきた……。

五分のち、兄夫妻、姪、私達に送られて門外に出た彼は、エンヂンをかけ放したちまのオートバイにとびのると、姿は一瞬のちに街角に消え去った。

それが、彼を見た最後であつた。

私は、再び応接間にひき返すと、彼の去つたあとのソファにふかく身を投げて、思いきり慟哭したのであつた……。

私が、台湾の兄の家を辞し、鎌倉の老父母に今生のいとまを告げて、再び帰国の身を大阪商船最後の南米航路船興国丸に托し

たのは、日米開戦直前のあわただしい気配が、もうそこら中にみなぎっていた、一九四一年の七月末であった。

日米開戦を目前に控えた日本の軍事当局は、恐らくその用意のためなのか夥だしい軍需資材、雲母鉛、銅、鉄屑、鉄鉱、牛牛馬の皮革、羊毛、甘蔗、砂糖、珈琲、硝石、乾肉、乾果、米、棉花、馬匹、等を、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ諸国より積み込んで帰るため、交換物資となるべき莫大な日本の物産、絹地、生糸、軽工業品、精密機械、光学機械類、綿糸、綿布などを船倉一杯に載せて横浜を出航したが、船客はわずかに、一、二等を合せて十一名の少数さであった。船員達の囁やいている話をきくと、帰航の時は、船腹に積める丈け沢山の棉花と雲母とを積むよう、出航の日に指令されたということであった。

『どっちも、重要軍需品だもんな』

などと、彼らはしたり顔に話していた。

その頃の日本内地は、どこでも対米の戦争説でもち切りで、どうしてあんなに米人を憎まねばならないのかと、私には、むしろふしぎであり、腹立たしくもあった。国民は皆、盲目にされ、ただ米国を憎むことだけを盲目のままに号令されているとしか思われなかった。

いやな予感が、その頃から、私には、していた。アメリカのミッションで教育を受けた私には、それが何とも情なく、悲しかった。アメリカ人のよさも温かさもおおらかさも何もかもみとめようとはせず一途に嫌う日本の人々が哀しかった。私には、むしろ、ドイツの方が、いぢわるでまけず嫌い、陰険で、きらいであった。学校にいる時、ドイツ人の学友にはいぢめられたが、アメリ

カ人の学友達は、みな私をかあいがってくれた、その記憶が、いつまでもあった。しかし、日本国内の人々の心持は全然ちがっていた。親英米派の人々は軍部や国民に指弾されて息をひそめ、親独派の人達が、大いばりであった。

その上、前年の、二千六百年祭典の盛儀の光景は、なお、人々の記憶を去らず、酔い心地でいる人が多かったので『常勝国日本』とか、『鎧袖一触、アメリカ恐るゝに足らず』とか、『わが海軍の威力を以てせば、世界を征服すべし』などの新聞雑誌の記事は、いやが上にも、当時の言葉でいえば『国民の士気を昂揚させていた』のであった。『大東亜建設』の壮大雄大な理想は、その頃の軍官民すべての人々の心の中にもえているようであった……………。

『愈々日本は、アメリカとやりますぜ……………こんなあんばいでは、どうしても今年中だなあ』『ぐずぐずしていると日・米の軍艦の比率があべこべになる』『欲しいなあ……………全く、あの油田……………まっ先にあれを占領したらよいのにな』

帰航の途次、いつもニューオルリンスを通過してくるという船員達はそんな話をした。

『しかし、これあ君、ひよつとすると本船が、南米に着かんうちに、始まるかも知れんな……………。何しろ昨年あたりからのようすじゃ、我が艦隊の猛演習はもの凄い相だものな……………：始まるすると、本船はむろん米国のどこかの港で捕まるか、抑留ですな……………。早川さん、貴女もその最悪の場合をカクゴしておいて下さいよ……………』長身の陽灼けした顔の事務長は、デッキゴルフの休みの合間に、そんなことを言って笑うのであった。

『パナマ辺りで抑留になりやしないか』

『この様子ぢや、パナマ運河もうまく通過出来るかどうか——むろん帰航にさ。……判らん』

『うまく通過するといふが——往航はまだ大丈夫だが——帰航がこれあ怪しいぜ、君。往きはヨイコ　ヨイ帰りはこわい、か。』
興国丸の一等食堂や甲板では毎日のように、船長、機関長、事務長達の間で、そうした話が交されていた。

いまは遠い『祖国』となつてしまつた父母のいます地を、私はよく思い出した。しかし、心にすぐうかんでくるのは、父母でも兄でもなく、武之の顔言葉姿であつた。日・米が開戦したら、ブラジル其他南米の日本人たちはどうなるのか。それが一番心配となるべきことであり乍ら、私には、まるでそのことには無関心であつた。

武之を失つてしまつた今は、良人も自分も、どうにでもなれ、と考へていた位である。アメリカ側も充分に危機を感じとつていたと思う。事実、パナマ運河の警戒のものものしさは、これ迄になつた程でガツン湖の最狭路の兩岸には新たに装備された砲台に八吋砲が並び、高射砲、高角砲の配置も数力所に在り、また、パナマ沖を遊弋する哨戒艇や、沖合はるかに、洋上を圧して並ぶ、灰色の巨大な巡洋艦戦艦、駆逐艦、また、無線機を背に負いマイクを口に近づけた米国兵が『日本船一隻！まだ異状なし』

などと叫び乍ら、物々しい武装でタラップをかけのぼってくる有様や、税関吏や警備兵達の猜疑心に充ちた表情、船の方に向けて据え付けられてある重機関銃、これは兩岸の土提の上に処々に在つたが——あらあらしい英語の叫び声、罵しり声のような会話、嚴重きわまる船内、船底検査、乗船客一人々々の

訴問、身体検査など、まるでもう戦争が始まってでもいるかのような、もののしきで、何か、捕えられてどこかへ連れてでもゆかれるのではないかという様な錯覚を、船客の数がすくないだけに、皆は持ち、米兵のくる度船客たちは、船室に逃げ込んだり、上甲板を上ったり下ったりうろたえるのであった。

うっかりと携帯していたアメリカの地図を、あわててひそかに海にすてる人も在った。誰もがおびえ切った表情である。

あわただしさと殺気にみちたパナマ運河を過ぎると警戒してついできた米国の哨戒艇も一隻二隻と後に去ってゆき、はじめて船中の人々は、安堵の顔を見合わせるのであった。

パナマ以後はどこも立ちよらず、ヴェネズエラの港にも寄港せず、船はひたすらにブラジル北部のベレン港に急ぐのである。

貨物船にしては、飛び切り上等の毎日の食事さえも、誰も今では味わう人もなく、あとになってたべたかさへも、おぼえている船客はなかった。高級船員、船客合して十八名程の食堂は、入口に停立する司厨長、司厨次長、給仕の人々ぜんぶ、みな蒼白い頬を硬ぼらせてキヨロキヨロと眼を舷窓に向け、口を利く者もない。

アメリカ領海航行中は勿論のこと、ブラジル沿岸を南下航走中でさえも、うす白い霞の精のように水平線上に浮動する他国の客船にも米艦の追跡かとおびえ、海中に出没する海獣のくろい頭を潜航艇と見誤ってさわいだりするのであった。

愈々無事に、明早朝は、ベレンに入港する、という前夜々半の、全船の人々のよろこびというものは、またその興奮は、人間が、歓喜を表現し得る最極限のものではないかと、思われる程であった。

船中の上等な酒、食物、煙草、菓子等が、惜しげもなく、全船の人々に配られた。この宴会の最中、

『――だが、――君達。まだ、喜ぶには早いぞ、』

：帰航があるぞ、帰航が、：どうか、みんなと、無事で日本へ帰りつきたいものだ』遠山船長が突然大きな声でそういった時、後甲板の宴席に集まっていた人々は一時に水を打った如く、静まり返り、やがて吐息が、大きなざわめきとなって、潮風に流れた。こうした異状な、スリルにみちた航海であつたにもかゝらず、その洋上の夜々の起きふしに、私の脳裏を去らず、忘れかねたのは、宗武之の面影であつた。

夜もひるも、瞼の中にうかぶのは、あの台北の兄の家での別れの一瞬、私に拒まれて、私をつき離れた時の、あの切なげな眼の色であつた。

ブラジルで、恐らく私をなど、待っている筈のない良人岩雄のことなどには、すこしも心が向かず、時には、そのことの反省に、私は、自分自身を責め、しばしば理性の鞭を以て、わが心を叱つたが、理屈や、道德感や、自責や、そうした、あらゆるものを以て自分を諫めてみても、なお、うかびくる彼のことを、私はどうしようもないのであつた。

私は不眠症におち、体は、心よりも、なおみじめに痩せ、疲れてしまった。

その頃、われとわが心を、正しく処理したために、悩み苦しんだ末、ふと聖書を繙いてみた私の眼に『すべて色情を抱きて人を見る者は、すでにおのれの心のうちにて姦姪したるなり』という一節が針のように射し込んできた……。私は武之を対象として、

すでにすでに、心の中では、たしかに姦淫の罪を犯してきたのではなかったか？

かたちの上では、辛うじて、とも角も潔さは保ち得た……。肉体の危機も漸やくの思いで、やつとやつと切りぬけては来た……。その点、表面だけは、道徳的に、正しく処理し得て来た——と、何のやましさも ない如く、まっすぐに良人の瞳をみつめて、言うことは出来るかも知れない——しかし、私の内心をのぞかれたら、決して昂然とそんなことを言い切ることは出来ない筈であった。

——そう反省した時、私は良人に会ったら身をなげ出し、ひれ伏してわびたい気持ちに、しばしば駆られるのであった。良人の心が、その愛人に移ったから復讐だ、などと考えていたツイ昨日までの自分の時の心が、言いようもなく醜汚な、不貞なものに反省されて来たりするのであった。

——この心の変化もまた、衝動的に、ある日を境いに湧き起ってきたもので、それが何のためにそう変わってきたのかは、私自身にも不可解であった。

船が、良人のいる国に近づくに従って、女の持つ狡さ虫のよさが私の心をそう言う気持ちに変えたのか武之を無理にも忘れようとする反省のあらわれがそうさせるのか。私には判らなかった。

サントスで良人を見たら、何も彼も忘れて、良人の腕にとりすがり、良人に詫びた上、良人を心から愛して行こう——私は航海の終る頃は、真剣になつてそう考えそう考えることによって、少しでも武之を忘れようとしていたし、また、そう考えると事実、武之の思い出も、うすらぐようであった。

私は快復期の病人が、努力して薬を飲み、忍耐して食養生を守

る様な努力のしかたで、けんめいに良人のことを考え、武之のことを忘れようと努めた。

航海も、終りに近づき、リオ、サントスも、あと数日という或る日、私は思いがけなく三通の電文を無電局長から渡された。

一通は鎌倉の両親、一通は台北の兄、そして三通目をあけて見ると、――

ハルカニゴ　コウカイノアンゼ　ンワイノルタケユキ

私は、じぶんながらおどろく程冷静な気持で、その電文を、いつとき眺めていた。心の中に当然なみだつであろう情感も、これ程平静に抑えることができるとは、われ乍ら、よかった。と、その時は考えたものである。

翌日――また、一通来た。

アスカラハ、ウミノウエ、ハルカニゴ　ケンコウワイノルタケ
ユキ

明日からは海の上――とは何であろう。飛行母艦へでも乗り組んだものでもあろうか？　発信地は、相かわらず〇〇である。これでは返電の打ち様もない。台南の飛行基地へ打っておけば或いは届くか知らとも考えたが、返電は止めることにした。しかし私は、二度目の電報を見て以来、またしても私の心が乱れはじめたのを知った。私は、電文を握りしめたまま茫然と舷側に停ずみ、はるかなる水平線上に、大空のまっ白い雲の間に、武之の幻を画く女となってしまうたのであった。：何も考えず、想わず、また、再び、茫乎とした過去の思い出にうち沈む私の眼前を、伯国中部海岸の椰子茂る陸地が、船首から船尾へ――と、右舷近く次々と過ぎ去ってゆくのだが、それらも、私には、ただ、ぼんやりとしか

映っていなかった。

そうした痴愚の日夜を重ねた果てに——サントス港は目前に迫ってきた。

またもや私ははっと眼がさめたようにわれに返り、一切の過去を払拭する気で、武之からの電文も悉く破って海にすて、良人に全心を傾けようと一生懸命考えるのであった。

それは、名状し難い複雑な、心の中の幾日、幾夜、幾十夜、幾十日の、葛藤の果てであり、やっと、ややすがすがしい、最後の心のおちつきが、きた様に思った。——やがて、船はゆるやかに岩壁に着き、埠頭の、他の大勢の人々の顔々々の中に（私の愛せねばならぬ）良人岩雄の顔があった……。

けれども……。

ああ。私の期待は、みごとに裏切られ、私は、ただ表面だけの愛想じみた、強いて作られた良人の笑顔のかげにひそむ、白々しい冷めたさと、私の顔は眺め乍ら、その瞳はうつろに、そのうつろの奥に他の女性の影を宿して悶えている良人岩雄を見たのであった。

折角、やっと心にきまりをつけて、良人に烈しく燃えてゆこうとして、帰ってきた私の心は、また、みるみるうちに凋み——その蒼ざめてゆく胸の中の寒むざむしさが自分でも眼に見える様であった。夫と妻という世の掟や、法律を超え形式を超えた真実の心と心の距離はやはり、一年前と同様少しも短縮されてはいなかった。

私達は、極めて言葉すくなくしかし、表面は大そう仲の良い平

和な行儀の良い一對の夫婦のように、『ばか丁寧な』ことばでお互いをいたわり合いながらそのくせお互いの心の中ではその時のサントス埠止揚を吹いていた風の様な寒い思いで、並んで旅館に向ったのであった。

ホテルの夜は、まるで、義務の様にあじけなく、軀を並べて横たえては見たものの、体と体の距離は腕一本の近い距離にあり乍ら、お互いの住む心の世界は、千里の遠さに在るような白々しい思いでだま

り合ったまま横たわり、眠れぬ夜明けを迎えたのであった。

少しばかりとろとろと眠って―眼をさまして見た時は、私達は、お互いが、まるで、癩病やみのそばにでも臥したように、出来るだけ、距離を遠くして背を向け合っていた……。

他人よりも、仇同士よりも、仕末のわるい二人であった。

『ね？ 淋しかった？』

私は、それでも、きいてみた。

『――いゝや、少しも』

正直な良人である。

『僕はきみが、もつと永く日本に居たらいいと思っていたんだよ。……もう二、三年、お父さん達のところで、甘えてくるとよかったのに……手紙でも、そう書いてやったらう？』

『そうだったの？』

それが、あなたの本心だったのか……。

孔のあいた風船から洩れる空気のような情ない力ない声で、私は伏目勝にもう一度言った。

『――そうだったの？』

『……………』良人は無言。

『おい！嬉しいんだろ？一杯、奢れよ』

『君たち、昨夜は眠らなかつたろう——かくすなよ。羨やましいぞ』

『再び、新婚気分だね』

悪友達に、ホテルのバアで、捕まっている良人の表情は、泣き笑いに似ていた。

ほんの、しるしばかりの、力のこもらない抱擁、私は、次第に蒼ざめてゆく自分を意識した。私は少し意地の悪い気特になつて言つてみた。

『私ね、白状しなければなりません……。実はね、……旅行中、好きな人が、出来ちやつたの……』

わざと、思わせぶりな表情まで作つて、良人の顔を覗いて見た。と……ああ！見る見る良人の顔にうかんだ、何とも言い様のない、喜悦の表情……。良人は言つた。

『そうかい？ ……それあよかったねえ！ちやあ、淋しくなくて、ほんとに、よかった！』

（おれも、助かったよ。それで）露骨に、その瞳は、私にそうとまで言っている様だった。

『それなら、なぜ君は、おれの家になんか帰つて来たんだい？ 帰つて来なくなつてよかったんだぜ』（ふん。おれもそれでセイセイすらあ）横顔がそれを示していた。私はたまりかねて良人の胸に縋りついた。自然と声が嗚咽になっていた。

『……貴郎……そんなにーそんなに、私が……いやなの！きらいだつ

たの？』

『い、いやぢやあないさ……き、きらいでもない……』

良人は狼敗して私の肩に手を置いた。が、またすぐに離れた。ふれてはならないものにふれてもしたような態度であった。

私の頭脳の中は、自嘲と自虐的な自責の念がうづを巻き、そのわりに良人への怨みはすぐに出て来なかった。ただ、自分で自分を虐げる気持。罰があたつたのだ！良人がちゃんとあり乍ら武之のような若い男に心を惹かれたりしたからこんなつめたい目にも会うのだ——何か、そんな強い苛責めいた自嘲にだけ責められていた。

武之を想い乍らも——その本当の心の底では——それでは、私は良人を、やはり愛していたのか？ 今迄の良人の態度や心のつめたさをいやという程知らされて来た上に、あれ程のむごい冷淡さを示されても、やっぱり私は良人にひかれ、良人を愛し良人を頼らなければならない、あわれな妻でしかなかったのか……。

私は泪が頬をおちるにまかせた。

日米開戦と同時に、日本は、完全に『枢軸国側』となり、伯国は『連合国側』となった。

在伯日本大使館、日本総領事館、領事館分館、在伯日本商社に つとめる人々とその家族たちの母国引揚げが始まった。これらの人々の乗る船は『交換船』と呼ばれ『和蘭』その他の中立国の船で、リオ・デ・ジャネイロを出て、葡領アフリカの、ローレンソ・マルケス港の沖合で、同じく日本から英、米、伯、其他連合軍側の国々の外交官や会社員らの引揚げの人々の乗った船と出合つて、此处で双方の乗船者を互いに交換して、それぞれの母国へ向けて

ゆくのだ——と伝えられていた。

この交換船で日本に引揚げて帰る人々がサンパウロ市のノルテ停車場（現在のルーズベルト駅）からリオに向けて出発したのが日米開戦から約七カ月後の一九四二年七月十三日の七時、風のつめたい朝であった。

南米の七月は冬のさなかでやはり寒い。凍てつくような寒風と冷気とは、近づく霜のけはいをさへ感じさせ、停車場の玄関口に続々と鞆を提げて集まってくる人々は全部日本人で、一沫の不安のかげりをその面上にいづれも漂わせつゝも、さすがに名残り惜しげにあたりの街の姿を眺めるのであった。

大使以下の館員はリオから乗船するので、サンパウロは総領事以下の人々で時の総領事原馨氏以下、現地採用の雇員をのぞく書記生以上とその家族たち、商社の連中など二百名に近い男女や子供達が肅然と乗車を待つて歩廊に並ぶのである。これらの老若の男女の胸中にはさまざまな感情が去来し人々は殆んど口もきかず、見送りの人々もまた、明日のことは誰にも判らぬ不安で、悄然と去りゆく人々を見まもるのみであった。

大戦の渦中に突入してしまった母国への、はかない期待（その時はまだ、しかしつよい期待であったが）と、雲煙万里の異郷しかも、現在は敵国となってしまうている地に、同胞をおき去りにしてゆかねばならぬ悲痛さに、心ある領事達の表情はくらくかった。とり残される在留民の上に万感の思いを馳せればまた、在留の人々は、決して安全とは言えない七ツの海を渡ってこれから日本に帰る人々の上に複雑な思いをよせつゝ、ただただその旅路の無事を、誰もが心の中に祈るのであった。遠ざかりゆく車窓から涙

と共にふられる白ハンカチの重なり、見送る人のあいさつも途だえ勝ちにすゝり泣きの音さえまじって、見送る人も去る人も、ともにその心の中は、ただ暗澹としていた……。

日本の必勝だけは誰しもがこの時信じていたようであり、ただこの五字のみに縋りついていたのであったが、なお、わり切れぬ一沫の翳りのようなものは燻るのであった。

この時位、海外、外国に在る身の心細さを、誰もがしみじみと味わったことはない。

何十年の間、市中の目貫の場所に日毎掲揚されていた日の丸の大国旗と、ビルの高い所に燦然と輝り

かがやいていた菊花の御紋章とは 此の時以後、なくなり、それだけでも、在留民にとっては何とも言い様のない淋しさ、心細さであつたのだ。

海外に在る日本人達にとって、その土地生れの、いわゆる第二世は別として、日本から大人になって渡伯してきた人々にとっては、日の丸の旗、菊花の御紋章が、自分達のいる国の中に存在することが、どれ位心強い慰さめになるものであるかは、一度海外に出て住んだ者でなければ判らない微妙な感情である。生家を去って他人の家に養子にゆき、はじめて生みの親の有り難さを知る子の心境と云えるだろう。また、官僚々と蔭では悪口を言い乍らも、その『官』に頼り、官名に力強さをおぼえることに馴らされてきた海外の日本人達は、やはり何と云ってもそれまで心の中よりどころであつた外交官に去られてしまうと、中心を失つたような何かまとまりのないあやふやさに一時は途まどつたものである。そういう日本人社会に、後年（と云っても引き揚げから三年後）さ

まざまな血腥い大混乱の起ったことも、すべて中心になるものに頼り切って生きてきた人々の弱さを露呈したとも云えよう。

主だった官民が引きあげてしまったあと、在留の人々の上に一時的の受難期がきた。

枢軸国側の人々の、いわゆる敵性財産の封鎖、と日本語の禁止、これは日常の会話を禁じられ途上でゆき会った日本人達は、うっかり朝晩のあいさつを交しても警察に曳かれ、拘置聖に入れられた。また家宅搜索と称して二セ刑事までが日本人の家に入り込み「搜索にかこつけては家財道具を没収することであつた。無論

日本人の殆んどが失職し、事業上の権利も何も奪われ、サントス海岸沿岸地方の日本人達は、十四時間以内の立退命令を受けた。街には日本人達の、うらぶれた失職の姿や、居住地を追われた人々の気の毒な彷徨が、始まっていた。噂はとりどりに流れ敵性国人の日・独人は收容キャンプに入れられるなどの話も流れた。これは、ペルーやアメリカの在留民のキャンプ行から、こんな噂が流れたものであろう。がブラジル政府は、直接の被害国でないせいか、日本人に関しては、割合に寛大であつたからキャンプ行迄にはならずにすんだのであつた。ただ、旅行するには特別の許可と旅行許可証の発給をうけなくてはサンパウロから外へは一步も出られないという不自由はあつた。

こうした有り様で、それでなくてさへ曠野の中に孤立してとり残された様な心細さにすくみ上っている日本人達の上に、日本軍が緒戦の頃、米軍を圧勝して南洋方面を破竹の勢で席捲すればする程アメリカの示唆もあり、その宣伝のマスコミの影響もあつて、

ブラジル人達も、次第に日本人の惨虐性などと日本人を怖がる仕末となり冷視白眼を向ける者も多くなってきた。その頃、いくらブラジル生れの子供達が『ぼくはブラジル生れだからブラジル人だ』などと弁解してみたところで『顔がそれを云わせないよ』という返事で報われた。『日本は保証された』と、この『顔が助けないう』という新語は戦後何年かの間、サンパウロの子供達の間流行したものである。母国の軍隊が、連戦連勝、征くとして可ならざるなき好戦果をおさめている時に汎米ブロックの一班に列するこの国の人々が、邦人に対して好感を抱く筈はなく、恐怖心までも募り出した果ては、日本人に対して可成り嚴重な弾圧が加えられたことも亦仕方がないと云えよう。さまざまの名目で日本人の男達は、次々と拘禁留置の憂き目を見た。

しかし、また一面、農業にたずさわる人々にとっては此の戦争は、まさに天の恵みで、濃産物の高騰、特殊な生産物薄荷の出現、養蚕の降盛それらは農業者とそれを扱う商人達をおどろく程富裕にした。

被圧者であり乍ら、此の戦争中に農業者が八割を占める在伯日本人は、経済的に異常な躍進をとげ太りに太ったのである。このめぐまれた環境の変化が、単純な農家の人々を『日本が敗けていたら、敵国の側に居る自分らが、この様に恵まれた生活に居られる筈はない』との一種の狂信を保持せしめる遠因を作った、とも云えよう。これらの人々は、しかし、日頃は、勤勉な実行力に富んだ優秀な生産者であり衷しいまでの忠誠心を、母国の陸下に捧げている愚直な人々である。この人々の心の中の母国大日本の姿は、恐らく死ぬ瞬間まで輝やける最盛期の帝国陸海軍に護られた旭日

昇天の姿であるに相いない。

しかし——事實は一九四三年以後、この輝やかなしい旭光は、太平方面から、さきに、徐々に、もうろうと、その光りをうすれさせ始めてきていたのであったが……。

アツツ、クエゼリンの悲愴な玉砕を皮切りに、マキン、タラワの惨烈な全滅、比島の米軍奪還、ガダルカナル、サイパンの失陥、グワムの奪還、其の他日本の、南方の生命線であるマリアナ、カロリン、マーシャル諸群島の、次々の失陥、ビルマ戦線の敗退、硫黄島の悲痛極まる玉砕。そして遂に……ああ……沖縄まで！この相踵ぐ悲報にも、遠隔のブラジルに在っては、一切の眞実から距つていた大部分の邦人達の心から『我が方の大勝利』『最後の必勝』の信念というよりも狂信を、とり去ることは困難であつた。

そのはじめに於て、あまりにたやすく勝ち進みすぎていた報ばかりをきかされていたのと『敵の大戦艦〇隻轟沈』などのあまりにも誇大な日本のラジオに酔ってしまった在留民達の心には、長い間、敗戦を信ずるという方へ心のスイッチを切り換えることが出来なかった。

ブラジルの葡字新聞などのニュースの方が、ずっと眞相をつたえていたのだが誰も、殆んどそれを信じなかった、いつも割り引するか或いは逆に日本の方が有利、として解釈され日本側についての悲報は、一切、敵方の宣伝による誤報だときめられていた。

この時はまだ負け組も勝ち組もなく、在留民の指導者と自認する一部のインテリ達ですら、まじめに日本が勝った時のことばかり話し、最後に日本が勝ったら、この国に在る我々は、まず此の

国から何を賠償としてもらうかなどの事までを、得々として論じたりしていたことも事実であつた。その『我が方の大戦果』が、思いきや、とんだ虚報であり、伯字紙のつたえる虚報と云われる記事がすべて真実であつた——のを在留邦人達がほんとうに心から合点して知つたのは、終戦後一年位を径てからである。ポツダム宣言の受諾、そして遂に大詔が発せられ、それがラジオで放送され、伯国のあらゆる新聞に特大の字で日本降伏と出ても、なお、思いまどう在留邦人が多かった。

沖繩失陥の報を、伯字新聞に見、また母国からのラジオで聞いた時でさへも、大多数の人々は、これを我が方の作戦上の一つの奇略だなどと思つたり話したりしたものである。そして無敵海軍の威力を妄信する人々の瞋には、武蔵、大和、長門、摩耶、島海、赤城、鳳翅、竜巖などの威風堂々たる『帝国の猛瞳』が、まだ依然として在るように信ぜられていたことも否めなかつたのである。ラジオを持つことは一切厳禁で見つけられ次第没収されるのであつたが、在留邦人達は巧みに隠して夜とか朝早くとか ラヂオのある家に人々は集まってこつそりと母国からの放送をきいたものであつた。こうして、伯国側の官憲にかくれては、ラジオにかじりついている日本人達の行動は、しかし、不思議とその等ノ時のサンパウロの、一般のブラジル人達にも知られていたにもかゝわらず誰もこの日本人の挙動を密告することのすくなかつたのは、戦前から渡伯していて永住している日本人連が、日頃、隣人であるブラジル人達に謙遜な態度で、いつも交際し厚い友情を勝ち得ていたからでもあつた。日本人を恐怖したのは、つまり日頃あまり日本人と交際のない上層部の官史学者達などで一般庶民

たちは、在留日本人の無害な存在をその頃の態度から充分に知っていたのである。この信用は一朝一夕のものではなく、一九〇八年以来、日本移民が営々として保身のためにあらゆる忍耐の果てに蓄積し得た尊い信用なのである。

こうした在留日本人間の、精神的、物質的、起伏、波らん、社会的変化の相次ぐ五年間、母国と隙絶した五年間、大局から見れば、地上におちた一粒の麦にもひとしい私達、早川一家にも、また、それ相の波らん、浮沈はあった……。

在伯日本人商社の『敵性資産凍結令』による閉鎖の余波は、岩雄の経営する商会にも真先に波及し、これらの、戦争による貿易の杜絶、資金の凍結等は甚大な痛手で岩雄はリオ、サンパウロ市の本、支店を閉鎖されたのち、わずかな隠匿資金をアテに、聖市郊外に、移つてささやかな肥料取次業者となつた。弱気で、お坊ちゃん育ちの上、なまじインテリの良心的な精廉が禍して、太く逞しく生きねばやってゆけぬ商界に、今迄の協力者や、雇人達の助力を離れて、独立した彼に、うまくやつてゆけるはずはなかつた。

岩雄の商法は、次第に失敗の一路を辿り、生活にも困る有様となつた。愛人とも別れ、みずからもまた病み、弱り目に祟り目の不運は、続々と、踵を接して早川家を訪ずれてきた。

そういう場合、いわゆる商才をもち世故に長け女ながらも商界に躍り出して男を相手に、虚々実々の商略、コンタンをめぐらし、美事に財を積む、などのめざましい性格は、全然私にはなく、岩雄は、それを露骨に口にも出し、態度にもあらわしてグチを言う

のである。

しかし、何と罵しられても、私には一言の返す言葉もなく、たゞ画布に向つて、絵の精進に一心を傾ける時間があれば、まだよい方で、大抵は貧しい生活の雑用と糊口のためのささやかな内職仕事に精を出さねばならず、貧窮は、目に見えて迫るのである。

その上——人を信じ易い岩雄の不注意から、終戦後、折角の店も、ペテン同様に、或る伊太利系伯人に乗り取られ、私達は、無一文で街路にほうり出される結果となった。岩雄の悲憤と失意落膽は、益々、病状を募らせ、その上彼は、次第に荒む心を、もともと大好きであつた、つよい酒によつて慰める悪習に隋ちた。

彼はまた、妻を憎んだ。妻の無能を罵しり怒つた。

別れた愛人に対する絶ちがたい未練店を乗り取られた憤おり友人に対する不信の怒りしまいには世間の冷めたさまでが、呪わしかった。もともと慾のない、金銭には、しまりのない位、のんきな岩雄は、事業の順調な時、さかんな時などには、親戚、兄弟、友人、雇人達のすべてにまでずいぶん物質的にも援助していた。岩雄のおかげで、相当な成功をおさめた人々もすくなくなかつた。

苦学生には、学資の援助を、失敗した人々は、更生の資金を、可成り親切に、自分の財を投げ出していた。

にもかゝわらず、自分がおち目となつた時、それらの人々は岩雄のお人好しを話題にこそすれ、援助の手をさしのべる人は一人もいなかった。

『人盛んなる時は、巷間、未知の者までも、これに従き来るが、一旦、落ち目になった時は、年来の友までこれを疎んずる』とは、李白の詩ばかりでなく、実際のことであつた。それらの人への、不

平、不満慣おり、すべてをひつくるめて、一切を、岩雄は妻の私に当り、私の上にそのうっぶん晴らしをするのであった。

気の弱い性格の彼には、それよりほかに、心の鬱を散ずる方法が、なかったであろう。

徹底的な自由主義、放任主義のもとに育てられてきた岩雄にはまた、自制心とか、克己心とかは全然身につけていなかった。何事にも飽き易く、その一面異常な位の気位の高さと、それと同じ位の程度で気弱さも持ち虚栄心もつよかった。しかし他人に対しての、異常な位の気弱さ臆病さ遠慮ぶかさは自分の生活を守る上にも力を欠き、周囲の人々の言葉に動かされ易く、他人に対しての過度の気兼ね、そういうものを、たゞ自分の妻に向った時だけは、その代りのように、外で出せなかった慣おりをまでも加えて、我ま、一ぱいの暴君に変わる性質であった。いわゆる外面のよい、内面のわるい性癖だった、これが一度おち目になると一層激しくなった。幼少から、金の苦勞も何も知らず、我がま、一極に育ってきた上、性格的に金銭にあまりこだわらず、浪費してしまうたちの岩雄と、似たりよったりの私との一対が、生活に砒綻を来すのは当然でもあったろう。物慾にかけては、良人に輪をかけたお人好しで、けつべきをみずからほこる私などに、良人のこの方面の欠点など非難する資格はなかった。

しかし、生活を授ける意味で、というよりは、生活の資を得るために、私は、とうとう、今度は以前よりも、もつともつと真剣に、絵筆を、とりはじめた。

戦後、一時に復活した在留日本人社会の音楽演劇舞踊等の文化方面運動競技等は、おどろく程迅く、盛大に、華々しく、まるで

一時にぱつと花ひらくように都といわず田舎といわず盛んになつて行つた。

私の絵画の仕事もそれにつれて、次々と注文があ合た。今迄は夢にも考えた事のないたゞ好きな絵が、糊口の代を得ることになろうとは想像もしなかった変化であつた。ブラジルでは、『生活』という、毎日の、逃れられない、生きるための、糊口の道は、私達の前途に、倖いにも、はてなくひろがつていた。とは言え、働らいても働らいても、人間はたゞたべてゆく丈けで精いっぱいであまりにも、余裕のない日常が、大部分の人々の有り様であることも、また、自分達が、完全に、その仲間の一人であることも、私には、よく判つてきた。

ぜいたくであつた昔の生活が、嘘のように、思えた。夢のようであつた。あの時は、どうしてあの様に金があり、今日は、どうしてまた、このように、金がないのか、ふしぎな位であつた。芸が、身を助ける不仕合せ、——幼ない頃、いろは歌留多でおぼえた諺を、そのまゝの私であつた。

世の中の冷めたさと温かさとを、同時に、本当に知つたのも、この時からであつた。女が、なまじ、絵筆をとる——などと言う事は、他に生活の糧を得る術のない私であることを充分に知りつくしている人々すら、あまり快ろよいものではなかつた。

まして女が、絵画で生活の足しにするなどということは、これまでその様な例のすくなかつた在伯日本人社会では、何かと異例と思われたらしく、最初のうちは、ずいぶん辛いものであつた。妨害もあつた。黙殺で報われることもあつた。徒党を組んだ人達に、貶されたこともあつた。また、

しかし、その一面、私に温かい心と手を差し伸べて、岩雄の再起と、私の折角の『絵』を、この上は出来る丈け勉強して、その長所を伸ばす様に―と、精神、物質両方面からいたわってくれる人もあった。

本当に真剣で、私は岩雄を看護るつゝ、その再起を希う気持で絵に向った。

最初は、女の分際で――絵なんぞ――女のくせに―何かにつけて、そうした莫然とした反感を露骨に示した人々も、次第に私の、真執な生活態度、精進の態度に、良き理解を深めてきてくれるのも有りがたいことであつた。中年で、生活に破れた、云わば情ない落伍者となつたことも、私にとっては神の試練であつた。

岩雄は、私に特別の愛情を示すでもなく、と云つて、以前のようには憎しみもなくなつた。言わば、無関心に近く――私の在ることが、生活の便宜上、良い位の程度の関心の持ち方であつた。

生活の激変に次ぐ激変、戦争中と終戦の後の日本社会の相次ぐ事象に心を奪われて、何時とはなしに武之のことは私の心からうすれて行つた様な形にはなつていたが、良人への愛情のやり場困る私は、次第にまた、絵を描き乍らも、武之の思い出にふける様になつていた。生活に追われている間は、心に何のゆとりもなかつたせい、あまり記憶に浮ばなかつたのも、何か、すまない、とさえ、考えられる程で――それには、良人の心を、しっかりとつかめない、情ない妻の苦悶が、かくされているのであつたが、岩雄には、到底判ることではなかつた。

『忘れられた妻』、傍らに一緒にいながら、いつも忘れられている妻の地位は、『おき去りにされた妻』の地位よりも、まだみじめ

なものであった。

『武ちゃん、一体、どうなったであろう』

そう言った思いは、再び日が径つにつれて、私の上によみがへり、私は良人の傍らに、ひっそりと枕を並べ乍ら、他人よりも遠い良人の心と体とを感じつゝ、反射的に武之のことを考える夜が、多くなつた。

もう此の世にはいないにちがいない——。理由もなくなぜかそう、ひとりで心の中にきめていた。

あの台北の、兄の家での、残り惜しい別れ以来、私は、もう再び武之を見ることはないのだろう——それが、身をもんで泣いても、おさまらない程の口惜しさであつた。なぜ、あの時、私は、あの人のつよい抱擁から、逃れ様と焦つたのであらう………思い迫つた青年の激情のあまりのあの場合、なぜあの時、私もすなおに応えてやらなかつたのだろう——たゞ一度の接吻ではないか

——それすら、拒みに拒んで、みずから彼をおしのけ、彼から離れてしまった………ばかな私！ そのくせ、そのあとで、私の心は、完全に盲目してしまつて、兄の忠告や諫止などは、上の空で、高雄の飛行場にまで、わざわざ行つてみたのであつたが——

武之はその時もすでに馬公の飛行隊にとび去つて居り、その後、南太平洋方面に出動中のことは、おぼろげながらどこからこともなく伝わる話の中で、知つてはいたのである。が、此の四年間すべての消息は、絶たれていた。武之どころか、父母や兄の消息すら皆無であつた。

……いま更、新らしく思い出してみれば、切なく、名残り惜しいことばかりであつた。良人との落莫とした日常が、私を、精

神的姦淫の罪に導いていると云つてもよかつた——私は想像の中で、武之を汚し、弄そんでいた、とも言える。

今は、慕情に耐えがたく、涙はいつも私の瞼や頬をぬらし胸の中は、夜ごとの切なさに苦しいほど塞がった。

あの瞳、あの声、あの肢体！ あの姿！ 手をさしのべれば、いまにも触れそうな……彼の面影！ 『武ちゃん！』日に幾度、苦しい時、悲しい時、思い余つては、私は呟いた。

台湾の、兄の一家も、鎌倉の父母の消息も、皆目判らず、そのどちらの生死の程も知れなかつた。

台湾は中国に帰属し、蒋介石がここに籠っている現在、まさか兄がいるとも思われず、しかしどこへ引き揚げたかも不明である。八方手をつくして消息を求めていた私に、じつに四年ぶり、その一切が判つたのであつた。私の方にも、生活上の変動が激しく居住も一再ならず転々としていたので赤十定經由の通信も、その後の通信も、すべて宙に迷つていたのである。

鎌倉の父母は 日米戦争が始まると間もなく、相ついで亡くなつていたし、台湾の娘も、姪も死亡し、兄独りが、最近まで中国政府の（蒋介石の）依頼をうけて、一技術者として、台湾の医大に残留していたのであつた。

その兄が、愈々日本に帰還してから、ブラジルの私に便りをよこしたのである。

何よりも、意外であつたことは、兄夫婦の鍾愛の的であつたひとり娘の千江子が、終戦の後、突然、フランチエスカ派の修道尼となり、次に病を得て亡くなつたことで、嫂が、それを悲しんでの余り、病死したことであつた。しかも、姪は、尼僧となつて沖

縄に渡り、現地で戦災孤児の救援に献身していたのであった。その、私のためにも、たったひとりの姪の千江子が、尼僧になった原因を知って、私は、さらにまた、大きなおどろきを新たにしたい—— というのは—— 原因は、『宗大尉の戦死！』

台北の兄の家に、私の消息を求めては、賜暇の度ごとにやってきた宗少尉——のちに昇進して大尉とまでなったのだが——を、哀れ十七才の姪はいつの間にか、ふかくふかく恋するようになってしまっていたのである。

宗武之は、一向にそれに気づかず、姪に対しては、ただ『なみ姉さん』の姪、としての、関心があっただけで、いつも、それ以上には進まず接近せず、礼儀正しく淡々と振舞っていたのである。

五年後——（終戦になる年の三月）その時武之は中尉になっていた——の戦死後、兄の家に、遺言によって戦友から届けられてきた日記の中に、武之の心をよみとれる文句があり、はじめて武之の本心を知ると共に、非常に複雑な哀しみにうちひしがれその時二十二となっていた姪の心は急に尼僧となる決心をしたものらしかった。その上、なおも可哀相なのは、恋しい人の散華した沖縄に赴いて、献身数年敬虔な聖い尼僧の明け暮れを戦禍に哭く孤児達のためにつくしてきた姪に、フランス留学が命ぜられその準備をしている内に、惜しくも病を得て、斃れたのであった。すべての人々は、どうして、こうも、苦悩のうちに、哀しみを味わい、なげきを、くり返さなければならぬのか……。あの純真無垢を、温順な深窓の処女、とも言える純潔な姪、コスモスのように楚々とした美しい姿、ばら色の輝やく頬と、すきとおる様な白い汚れない肌と、黒く輝やく瞳、濡れているように長いまつげ

など、見とれるばかりの十七の美少女にも、いつの間にか人恋うる時期が訪れていたのであろう……人々はすべて、哀しみと苦しみ、悩みと悶えのうちに、その個々の生涯を了えてゆくのだ……何か、そこに、人間の、眼に見えない輪廻のようなものがある心地がされた……………。

もしも―私があの時、神戸から台湾行きのさんとす丸に乗船しさえしなかったら、―と思う。氷遠に武之とも会わず、私もこんなに身を焦がしてもだえることもなく済んだかもしれない……。すべては『運命』であり、そしてこういうめぐり合せをまた、誰が、『運命』と名づけたのであろうか……………。

兄は、武之が、死の出撃の、その最後の前夜まで武之が私あてに書き、そして一通も出さずじきいで洞窟の中にかくしておいた手紙も、沖縄の民間人の好意で送って貰っていた。いかにも軍人らしい簡潔な中にも、武之の、燃ゆるような、あの瞳のつよさをよく知っている私には、一つ一つの文字のかげに、武之の無限の想いがこめられているのが、ひしひしと感じられるのである。

×

『なみ姉さん。』

僕は一昨日付で、かねての望み通り、隊長に、なりました。

ふるさと、沖縄の空の護りとして誇る僕らの隊は勇猛で鳴りその飛行隊長。

僕は子供のようにうれしいのです。

空母Aにいた時は分隊長で、一ぺん陸上で、隊長になってみた

いものだと考えていたのです。

×

ひと月ほど前から沖縄東岸の岩ばかりの一孤島に、僕は一小隊をひきいて、応援にきています。陸戦隊の兵員達と、共同で守備についているのですが、飛行隊とは名ばかり、もう僕らは翼をぜんぶうしなった鳥となりました。

敵の猛爆で、K飛行場もNも焼け、われわれの機は一機もなくなりしました。

戦友も、大部分大空に散りました。

ぼくの隊も、操従手は、僕ともう一人だけ、偵察兵と爆撃手が一人づつという少数に減りました。

全滅に近い員数。

沖縄の飛行隊長

翼をうしなつて、孤島の守り。

ぼくが新聞記者ならこう書くかもしれません。

『河童が、陸へ上った様だ』と、よく言いますが、僕たちは今、ねぐらを失った鳥のようなもので同時にまた陸に上った河童同然です。基地を失ない、機を失ない、滑走路もない岩礁の間で、ぼくらは、唯空をにらんで涙するばかり。

空母も最早、どこにもなく、ボロボロの練習機みたいなやつがたった一機、傍の最後の秘蔵品として、島蔭の洞窟の下に、かくしてあります。

これが、僕の最後の、最後の攻撃機！

ここ数日のうちにいよいよ、先に行った方の戦友たちの亡き海上に、弔合戦をひとくさして、僕もあとを追うつもりです。

近頃では、夜となく、昼となく、ひまさへあれば、ブラジルの野に埋まっている母の面影と、貴女の御姿とを憶い出しています。

僕の、二十五年の生涯を通じて、忘れられないたった二人のひとたち。一人は地下に、ひとりは地上に、ともにブラジルに在り——しかし、貴女は今、ブラジルのどこに居られるのか——。

十七年前、さんとす丸の船首甲板で、母と貴女と僕と、三人、同船の人の写真機で、撮ってもらったあの記念写兵は、今尚僕の眼前に在ります。

出撃の時も、出動の時も、この写真は僕から離れたことはありません。飛行服の胸のポケットにあったり、千人針の腹巻の中にしまったり、時には鉄カブトの下の日丸の鉢巻の中にまき込んだりで、大分いたしましたが。

いまでも、これを取り出して、しみじみと眺めているところ。会いたい人は、母と貴女と。

母に会いたい。子供のようにそう思い詰めて涙の出る夜もあります。

所詮、僕も、まだ『童子』なのでしよう。

母には、しかし、遠からず、『あの世』で会えるでしょうが、貴女には、もはや、『此の世』では会えない。

それが、残念。

×

僕ほど、悪運のつよい男は、ない相です。

珊瑚海、比島沖、レイテの空戦、台湾沖と、四ツもの大きな海空戦にいつも参加しながら、次々と散華してゆく戦友達の中から、いつも、僕だけが、しぶとくも、とり残されて、生き残ってきた

のですから 昭和十九年十二月二十四日レイテ沖の戦いの時など、僕はうちおとされて失神しかけたまゝ海上標流十時間という記録を持っています。

また、片翼で、いのちからがら、やっと帰還したこともあり、血迷った航空司令から、なぜ貴様生きて帰ったかと怒鳴られて、また、飛び出し、爆撃ののち、脚に負傷して、僚艦の空母に死を覚悟で不時着した、という経験もあります。

その僕でも ー もう『天命』を知りました……。今度こそは、生還を期してはおりません。

帰るべき巢もない、淋しい海の鷺、『沖縄の飛行隊長』を最後の栄誉に、ここらで、いさぎよく敵さんに仕止めて貰いましょう。
たゞ ー 出来れば ー 死ぬ前に、もう一度貴女にお目にかゝり度い、何か奇蹟でも起つて、貴女が、ひよっこりと、この戦火のまつ只中の孤島に、現われて来ないかなあ、 ー などと、馬鹿氣た、子供よりおろかなことを空想してみる僕です。

×

台湾のお兄様の宅には、賜暇の度にお訪ねしますが、千江子さんも、見ちがえる様に、成人され、僕らが見てすら、美しいなあ、 ー と見とれる位、上品で、しとやかな方です。

貴女に、どこか、似通つて居られるのも、僕には、うれしい、 ー 否、なつかしい氣がします。

台湾も爆撃の危険あり、僕も、心配しています。

×

昨日、ちよつとの間を、九州の基地から、台湾に飛びました時、東門町をお訪ねしました。貴女からの消息など、もちろんないことは判っていますが。

いよいよ沖縄が、あぶなくなってきました。

何とかして、護りぬかなくては！

×

パンヤンの『天路歷程』ならぬ僕の『空母歷程』も、相当なものでしたが、レイテ沖の海戦で終止符をうち、九州、台湾の飛行基地から、最後にこの沖縄となりました。沖縄こそ、僕の墳墓の地。赤城、加賀。鳳翔飛竜。蒼竜、瑞鶴。これはみな一度は僕の機の下りた艦でしたがもう影も形もありません。

×

台台湾沖の海戦の時でした。敵機と渡り合い乍ら、ふと、台湾海峡の、暁方の雲の色に、あなたと、さんとす丸で語り明かした朝のことを思い出し、同時に、あまりに戦ずれのした凶々しい僕自身に、自分乍ら、あとで呆れた位です。恐らく、墜落死の瞬間まで、僕の記憶は、亡き母とあなたの上から去らないかも知れません。

×

僕のいる小島から、昨夜、糸満の漁師から小舟を借り、闇に乗じて、或る海岸に漕ぎつけ、マブニを経て某地にゆき、命令を受領してきましたが、このスリルはなかなか面白く、敵の眼を眩まして、何かと敢行する快味は、全く素晴らしいものです。

敵さんの上陸も、必ず近いうちでしょう。

×

無数の舟艇、海を圧する大小の軍艦。雲霞の兵。――それが皆残念ながら、米兵なのです。あとからあとからと海岸に上陸を開始して来ました。

僕はまた、この海岸に帰って頑張ることになりました。

愈々、陸戦隊諸君と共に、僕の射撃の腕前を競う時が来た様です。空の機上から掃射する機銃と、地上に這伏して射つつそれとの比較をやるつもり。

沖縄の、常夏の朝。つゆ草に葡伏して機関銃座のつめたい感触を、たのしんでいます。

×

日付の前後するのにもかまわず、私は、次々と取りあげては、息

もつかずに、貧ぼる様に読んで行つた。激戦の様子が、歴々と、手にとるようであつた。

敵艦群の中に突入して行く時の気持は、近頃では、次第に快感をさへ、おぼえる様になりました。

各艦上の高射砲、高角砲、機関銃等が、一斉に、僕らの機をめがけて火を吹く時の壮観はお目にかけたい位です。

×

それがまた、近々と見下ろせる位の低空飛行をやり乍ら、僕は生命知らずの飛び廻り方をやつてのけます。まるで、駄々ツ子の馳けまわる様に、敵艦のまわりを、グルグルととびまわります。甲板上の兵の顔がハッキリ見わけられる程の低さで、曲芸そつくり、艦から艦を縫つてゆく時の敵の狼敗ぶりをお目にかけたい。そんな時は、むろん双方で機銃のうちくらべをします。痛快此上もありません。機も残り少ないので、そうそうやたらと体あたりも快行出来ません。毎日なるべく沢山の弾丸や爆弾を敵艦上におとしておいてから、最後にうんと大物を狙つて体あたりをやるつもりでいます。機は、今、僕にとっては最上の貴重品です。

いよいよ、僕の最後の時がきたようです。明朝四時、これが僕の此の沖縄の地上に生きて足を下ろしている最後の時です。

一昨日も、昨日も、出撃してみたのですが、ボロ飛行機の悲しさ、皆失敗でした。

ガソリンも、何もかも、もう、残り少なく他により機会があるとも思われないので、今度こそは、機もろとも、思い切つて一つ、大ものに体当りとゆくつもりです。これが最早、僕に残された最終

のチャンスです。

髓分大胆に、これまでも狙って見たのですが、敵さんもさるもの、電探も何もかも装備完ぺきで、なかなかうまく行きませんでした。『郷土沖縄をまもる者』としての誇りの下に、明日こそは！の気持です。

これで僕の二十六の生涯も終わります。が、靈魂が、もしあるものなら、地球の裏側の貴女の所に行ける筈。それを楽しみに。では。

×

最後に手に取った一通は、日本の兄からのものであった。兄は、帰還出来たのだ。

宗大尉（中尉で戦死、大尉に昇進さる）は、南太平洋の諸戦より運よく生還せられたる後も、本土、台湾、沖縄の各基地より度々出動され赫々の武功を樹てられしが最後に昭和二十一年一月、沖縄に海軍飛行隊長として征かれ、のち、時折は賜暇を得ては来台されしも、沖縄は予想の如く戦局

日々に思わしからず遂に四月一日、米軍に完全占領となりその惨状は眼を蔽うばかりなりしと。これもまた、運命ならん。

宗大尉は、その凄絶なる激戦の最中残少の爆撃機を以て、しばしば敵艦群を悩まし、最高軍司令官より感状を受けられしことも再々なりし。然るところ、同年三月十七日、最後の出撃を敢行、

此の度は実に大胆なる決死の特攻にて米軍の大艦一隻に爆雷もろとも突入、これを轟沈せしめ、ために米軍の一準将は戦死したり。大尉は生前既に死を決意、特にそこ許あての書面手帖等を麻文仁附近の洞窟近く秘匿し民間の数氏にもし生あらば後日かくかくの所に送附してよと依頼、その懇請を受けたる漁師の人々は、占領後三年を経たるのち、これをわざわざ小生あて幸便に托したり。これ実に奇蹟と云う可し。

これに依りて、大尉とそこ許との因縁浅からざりしこと、同航のよしみ、後に生じたる愛着の糾絶ちがたき次第等一切を承知致したり。されど兩人とも、あくまで清き精神上の愛着に終止したるは、これ余の大いに安心とする所也、実は、大尉とそこ許とは、果して如何なる事情に在りしやと　これ、余のひそかに心痛せし事なりき。曾てそこ許来台のおり、宗武之氏の訪問後、突然何の理由も告げず終日を泣き暮したる態度など、余の心中大いに憂うる所在りしが、これらの一切は今、判明したる次第也。

旧式一点張りの兄の心配顔が、眼に見えるようであつた。兄は岩雄にすまないことを私がしているものとカンぐり、心を痛めていたに相違無い。私はさらに読み進んで行つた。

×

ただ、意外なりし一事は、そこ許にも唯一人なる姪、わが愛娘千江のことにて、かねてより深く大尉を慕い居りしものと見え、大尉戦死の公報ありしのち、突然にカトリックの尼僧を志願して終戦後の沖縄に赴むき、同地の戦災孤児救援の団体に加わり、献

身しつつ在りしが、仏国留学の命をうけて間もなく、過労のために突然斃れ、遂に昇天したり。余等の恐愕と落胆とは非常なるものにて、これがため千江の母は心臓病を發して、また間もなくみまかりぬ。

そこ許も承知の如く、千江はすこぶる内氣の性質にて、胸中の思考は決して外に現わさず、万事控え目の娘なりしかど、今にして思えば、千江の宗大尉を慕うことなみなみならざりしことは此の無粹なる老骨にも察せらる。哀れその思いは、永劫に報われる時なく、遂に千江は此の世を終りぬ実に可哀相なる者なり。宗大尉はまた、心中ふかくふかくそこ許のことを思い詰められしものの如く、まことに世はまゝなこらずの感深し。これまた運命と申す可きか。

そこ許ら夫婦、現在、ブラジルの恵まれたる天地に在りて、今後も尚、益々活躍すべき大切な境遇ならずや。何ゆえに一心同体の実績をあげ、夫婦心を併せて、海外に在る日本人の真価を發揮すべく努力せられざるや。

小生今はただ、何の希求なし。唯おん身等二人の健康と、願わくばよき子宝に恵まれて早川家の栄ゆることを祈るのみ。残骸に等しき小生の老軀一体、千江の献身せるみ教えのもとに馳せ参じて後の一生を托するのみ。近く受洗の予定なり。希くばおん身等兩人も、共に同じき信仰に生きられんことを。

これ余の悲願なり。

古風な古風な、兄の手紙であつた。

その一生を、観念的に過重なまでに、ふるい道德感にすべてを委ね托してきた人の謹厳さには、頭が上がらなかった。

此の真情！

私は、手紙を膝に、さめざめと泣いた。

ほ う た い

はるは小柄な、かわいい瞳と唇をもった頬のあかい十五才の少女である。

彼女が現在お手つだいをしている家庭は、東邦棉花サンパウロ支店長榊原保輔という、名前は大変イカめしいが、それはそれはやさしい御主人と、丸々肥えていつもニコニコと、はるが少々へまをしても、決して叱らず、親切にナニカと教えて下さる、本当によく出来た、育ちのよい奥様とで構成され、坊ちやま二人は東京の、ケイオーとか言う学校の幼稚舎にいらつしやるとかで、他に子供はなく、運転手の夫婦者と、料理人夫婦と、合計七人の家族である。

はるは十一人同胞（きょうだい）の上から六番目、父母、祖母共に健在、長兄、次兄夫婦、その子供たち、姉達を入れると二十人近い大家族の農家で、ソロカーバで大きく馬鈴薯作りをやっている。

はるだけが、ほかの兄姉とちがつて百姓を嫌い、サンパウロ市へ出て、どうしても勉強をしたい、と言つてきかず、都会の怖ろしさを考えて、あぶながる両親や、祖父母や兄達を説き伏せ、出来れば自分で働らきながら勉強したい、と言う、サンパウロ奥地の娘達が皆一応は抱く感心な志望に燃えて、出聖してきた。大層、倖せであつたことは、両親と同航だった人々が、サンパウロ市内で、それぞれ商業などうまくやって居り、その一人の紹介で、此の榊原邸に住み込みの家事手伝い、衣服、靴、小遣い月謝

を支給されて、夜学校のマドレーザ学級、これは、一年間で中学の全課程を修了出来るという働らき乍ら苦学する人達のための学校で、ここに通うことになった。

掃除、洗濯、一切と家内の整頓の仕事は運転手の妻女が受持ち、台所の一切は、コックの妻君がやりはるは、小間使の様な役目なので、充分に勉強も出来、田舎で裸足で畑仕事に追ひ廻されていたはるの身には、時々忙しい、と言つても、まるで、遊んでいる様なものであつた。

ただ、時たまの祭日とか、ヂイアサント（お聖日）の日とかで、休日の前夜と、毎土曜日の晩だけは必らず、と言つてよい程、麻雀の卓が徹夜して囲まれ、そういう時は夜学を休んではるは客間と台所を往復して、おにぎりに焼海苔をまいた小さなおむすびや、コックさんの作るおいしい小海老のあげ物やパイや青豆を、ウイスキーやジンやウオッカと運んだりした。

しかし、まだ幼ないはるには眠くて堪え切れず、ツイ居眠つてしまうので、やさしい奥様は可哀相がり、料理人の妻君を、そういう夜は専ぱら起用することにして、はるの用事は一切免除され、九時から先は、『おやすみよ』という公然のお許しが出るので、はるは台所の次のアイロン部屋の一隅にある寢床にゆき、手足を伸ばしてぐっすりと眠るのが常だった。

裏のガレーヂの二階の二室は、運転手と、料理人の夫婦がいるので、はるだけがこちらで眠る様になって居た。

はるの希望は将来看護婦か助産婦か營養士となることで、医科大学のうしろのクリニカ病院のそばを通りかゝつた時など、そこ、ここにテラチラする白衣の日系娘達を見出す、はるの胸は高鳴り、

その白衣すがたに自分をあてはめて考えたりする時など、思わずうつとりしてしまふ程で、あまり空想にふけて歩いていて、広いクリニカ病院の前の道路で、あやうく自動車にハネられそうになったこともある位だった。

はるには、ひとつだけ、奇妙な癖があつた。

正直で、すなおで、人ずれがせず、しかも、無口でかげ日向なくよく働らく、という、まことに申しぶんのない子で、これはサンパウロ州内奥地の邦人農家の娘によくある型であるが、日本からきた主人側にとっては、この様な子は、得難い思いで、一層、はる、はる、はるや、と眼をかけられるのであつたが、この奇妙なはるのくせだけは、主人夫妻にも、理解ができなかつた。

それは、白いほうたいのすきなことで、小さなケガでも、すぐ、大げさなほうたいをして、喜んでいることで、これには、保輔氏夫妻も、不思議がつた。

「ねえ、あなた、あの子は、どうしてあんなに白いほうたいばかり、したがるのでしょうか。……ふしぎだわ、もしかしたら、アノ娘、異状性格ぢやないか知ら？」

「まさか、そんなこともあるまい。あの年頃には、よく、そんなことをする子があるものだよ。まあ、いいさ。正直で無口で、すなおで忠実だし、よく働らくし、いい子ぢやないか。好きなほうたい位、さしといてやれよ」

夫妻は、時折、そんな会話を、とり交した。

しかし、ある時、はるが左足のヒザから下を厚く繃帯で巻き、そのくせびつこもひかず、働いているのを見て、榊原夫人が心配して、

「どうしたの？はる、ケガでもしたの」

「いいえ！何でもないんです」

あわてて答えたはるは、見る見る首筋まで赤くなった。

「どれ、どうしたの、見せてごらんよ」

恥ずかしがって、嫌がるのを、ムリに包帯をとらせて見ると小さな掻き傷だけで何もない。

「おかしな子ねえ、はるは……繃帯が、そんなにすきなのか？」
夫人は眼を瞠った。

「……………」

はるは、ニヤリと笑うと長い長い繃帯を持ったまま、今度はびっこをひきひき、裏の方へ行ってしまった。

夫人はちよつと気味が悪くなり、その夜、保輔氏にこの事を話し、

「はる、って、ほんとにおかしな子よ」し
と結論した。

「人はよく、入れぼくろをしたり、髪を染めわけたり、腕輪や耳飾りや首飾りなどして、イキがったりシヤレたつもりで喜こんでいる。はるのも、つまりそういうアクセサリーの意味で、しているんじゃないかな。田舎のことだし、小さい時、誰かが怪我か何かして繃帯しているのが大層好ましく見えてその気持が今もあるのぢやないか。まあ、ジョンソン・エンド・ジョンソン会社の製品の繃帯なら、アクセサリーとして、一番金のかからないアクセサリーだよ。放っておけよし」

保輔氏の方がのんきであった。

そのうちに、ある晩、大変な事件が起きた。

十月の始めで、主人の榊原氏は東京本社から、空路来伯した重役を案内して奥地にゆき、従って、榊原邸は、主人と運転手が、くるまと共に、居なくなり、料理人夫婦はペンニヤの伯父が亡くなり、前日からその方へ出向いて帰らず、広い邸内は、それこそ針のおちる音も、きこえる位、森閑として、いつもは笑声に満ちる土曜日だと言うのに、その夜の静かさ淋し←というのは、何か、異様ですら、あつた邸内の灯は、殆んど全部消して、夫人は二階の寢室に引取り、はるは夫人の居間の衣裳棚の整理に枕元の、(余念がない。)スタンドだけつけて、松本清張の推理小説をよんでいた夫人は、しばらくすると、起き上って、トイレにゆくために廊下に出た。

白と黒の二人の男(その時である。)が、短銃を構えて階段の厚いじゅうたんを、音もなく踏んで、上ってきたのは。

アッ！と声をあげた夫人は、ネグリジェの裾をひるがえすと、傍らのトイレにとび込み、内側から、ガチャガチャと錠をかけた。

女主人が、みずから便所の中に虜囚となつたのを見ると二人の賊は、低い声で何か言いながら、はるの居る室に入ってきた。

はるが、どきつ、とした時はもう遅かった。

何と言う、手馴れた、早やわざか！少女の両手両足は、カーテンのひもで、背中のまん中で括られ、猿ぐつわまで、噛まされていた。

しかし、賊の一人は、はるの両手を背中で括る時、左手に痛々

しそうに捲いたある白い繃帯をぢつと眺め、そのせい、か、左手だけを少しゆるく括っておいた。そうしたはるを床にころがすと、二人の賊は忙がしそうに室中をかきまわし始めた。

その時、階下の方で、何か物音がした様で、二人の賊は、あわてて廊下にとび出して行つた。

はるは、奥様のことが、心配でならない。

もしや便所の中で殺されてしまったのではないかと思うと、怖ろしさに身が凍りつく様な気がしたが、その内に何としたことか。左手が、するりと紐からぬけた。その時、はるの眼に、半ば開いたまゝの衣裳戸棚が見えた。その中に、蔵つてある鹿皮の宝石函には奥様の生命から何番目という、大変高価なダイヤの指輪がある。……あれを……はるは、這いずり乍ら戸棚に近づく、と宝石函を出し、一番大切な指輪を出すと急いで左手の繃帯の中におし込み、宝石函のふたをしめたかしめない内、再び賊共の階段を上る足音をきいた。

絶対絶命の思いで、はるは奥様の寝台の下にもぐり込んだのである。

それからが大変であつた。

はるの居ないのに気付いた賊共は、大急ぎに急ぎ、あらしの様に室という室をかきまわして、目ぼしい貴金属や、紙入れや、宝石や、階下の食堂からは銀器の様なものまでも持ち出して、それらを根こそぎ革鞆に詰め始めた。

その時である！

床におちた金のネクタイピンを拾いあげようとして、屈み込んだ賊の眼に、寝台の下にもぐつて慄えているはるの、白い繃帯の

手が見えた。

二人の賊は、はるの足を持って引き摺り出したが、はるが、あまり子供っぽいので、憐れを催したのか、動くな、と言ったきり、そのまゝ、素早く階下に二人とも走り下りると、静かに表扉をあけて、又細め、悠々と表門から出てゆくのである。昼間でも人通りのすくない、樹々の深いジャールジン・アメリカの高級住宅街である。特別夜警やパトロール車の廻る時間でない限り、四辺はげきせき森沈として、人っ子ひとり通らず、二人の賊は木下闇の影ふかくその姿を没するのであった。

夜明けの六時、牛乳やパンの配達自動車の音を街路に聴いてから、やつと氣をとり直してこわごわ便所から出た夫人は、はるは、てつきり殺された、と思い、涙が出た。

はるは又、慄えている内、眠くなって眠ってしまったのである。やはりまだ子供である。賊に引きずり出されて、また縛られた様な錯覚におちて、ちつと、うずくまったまゝ、眠っていたのを起され、はるは、わっ、と泣き出した。

賊共は、邸内の、ありとあらゆる貴金属、宝石、紙幣等を掠めて行った。

それが判った時、夫人は、始めてガクン、となった。あの指輪だけは……時下二千ドルもする、亡き母親の遺品である……。……。

警察の人々も、沢山、やってきた。急報に依って、帰邸した保輔氏は、恐ろしさにまだ昂奮している夫人を慰さめ乍らも、「きみ達、でも何ともなかったか？」

と、何度も訊くのである。

二人の、かawaii女だけの邸に、警察の人達の推定によるとサンパウロでも名だたる怪盗に襲われて、でも、宝石や金目なものの被害で済めば、こんな偉せは、ない、とさえ思えた。

二人の女性の、最も大切な生きた宝石や、生命すら、奪われたって仕方がないのである。

良人の安堵は、しかし、夫人には判らない。

「…………でも、あなた、惜しいわ、あの指輪……………」

前夜の恐怖が、少しづつうすらぐにつれて、高価だったダイアの指輪のことばかりが思い出されるのである。

ひと晩中つめたい便所にうすいネグリジェでふるえ乍ら停っていたので風邪をひき熟を出した夫人は、下熱剤と鎮静剤とを飲まされて寝台にねかされていたが、まだ、時々シヨックのためか、体が震え昨夜の出来事が、本当とは思えない位であった。

ぼんやり天井を眺め乍ら、うつらうつらしている夫人の枕元で、

「アノ、おくさま……………」

という可愛らしい声がした。

「あゝはる？　よかったねえ、無事で」

顔の向きをかえた夫人の眼の先にはるのほうたいをした左手があり、そのほうたいの上に、今の今まで

あれだけは…………惜しがっていた指輪が、サン然と輝やいていた……………。

夫人は、もう一度、ガクンとなった。

カ ス テ ラ

サンパウロ市の東郊外イタケーラの奥で、とり飼ひ専門の日本人農家に、コロノ（日雇労働者）としての二年間の契約がきまり、馴れない鶏相手の仕事にも、ようやくなじんできた時は、もう、年の暮も押しつまり、すぐ眼の前に正月が、きていた。

渡伯以来、五度目に迎えようとする正月である。

アマゾンから、出てきて、サンパウロ市の近郊に、やつとおちつき、ブラジルの土の香も手や足にしみつき、希望の大きいような、また、あやういような百姓仕事も、イタについてきた英吉夫婦とは反対に年が経つにつれて、母おやのおみよは、（こんな位ならわたしや日本におればよかった）と言うようになった。

「英吉。何がよくて、こんな所へきたんだよ。わたしや、帰りたいよ」

「そんなこと。今更、言い出したって、困るじゃないか。無理な話だよ、到底……………」

「頼むから、帰しとくれよ。ねえ」

「だって、ブラジルで百姓してみたいっていう、僕の気持に、日本で、あんなに賛成してくれていた 母さんじゃないか。今頃になつて、何故、そんなこと、言い出すんだ。」

「百姓だって ― お前、あの時、何て言った？ 営農資金を持つてゆけば、土地も、すぐ手に入るし、カマ……………カマラダとかいう日傭取りを使えば、昔、お父さんが、小作人を使って、旦那で

遊んでいた時のように、らくにやってゆける、つて、お前言ったじゃないか。ダカラ、わなしは賛成したんだ

何だい、こんな、南洋の土人の小屋みたいな家に入つてサ。日本の小百姓だつて、今どき、もつと小ぎれいな生活しているよ。これじゃ、まるで、西洋乞食……」

と、言いかけたが、流石に気がとがめたか、そこで母おやは、ちよつと毒舌をおさめ、ゴソゴソと土間のフオゴン（かまど）の前にゆくと、せつかちに煙草を喫うのである。

めつきりとふえた白髪が、きたならしく額や首すぢにまつわり、その頸やあごのあたりの、何となく、すゝけてアカじみ、曾ては、宮城県屈指の豪農の妻女として、上品な姿であつたとは、とうてい想像もできない位みすばらしくなつてしまつた母おやの眼だけが、（息子）夫婦への怒りと恨みのためか妙にいきいきとしているのである。

「ねえ。何とか、出来ないものかねえ、日本へ、帰りたいよ」心の中で、わざと耳にふたをした息子は、返事はせず、鶏に与える青菜を、庭に出て、刻みはじめた。

大きなバケツに何杯も刻み込むと刻み機の刃を丁寧に拭つてから、バケツを百メートルほど前方にずらりと並んで建っている鶏舎の方へ、運び出した。

そのうしろ姿を見ていると、母おやは、そのみすばらしさに一層腹がたつてきて、何か思い切り憎い言葉を投げつけてやりたくなる。日頃可愛がつている孫のマリ子が、さつきから土間の日溜りの乳母車の中で、しきりにニコニコしながら、祖母を呼んでいるのすら、気がつかない。生後五ヶ月の嬰兒は、祖母が、すこしも

こちらを向いてくれないので、あきらめたのか、今度は乳母ぐるまの中で、しきりに自分の両足のおや指を引っぱろうとする方に、関心を、むけ始めた様子である。鶏舎の方から、鶏どものさわぐ声や、羽音がきこえてくる。

ひる近い太陽と、雨を含んだ様なしめっぽい風と、静かな大気にかこまれた平和な農家の一日の或る時間、鶏たちの、みち足りた様な声にかこまれている人間達の心は、しかし、おのおの、相容れざる違和と、悲しみに、何となく曇り日に居る様なうすらさむさをおぼえるのであった。

日本の、ささげ豆に似た豆を、水に漬け、やわらかくしてから塩味をつけ、汁気を多くし、それに豚肉や牛の干し肉や、腸詰を、大切りに切って入れ、にんにくを沢山入れて、煮たものは、フエジョンと称して、ブラジル農家では、不可欠の副食物であるが、おみよはこれも、油ご飯と云って、豚脂で生米をいためてから炊いた米飯も、一切受けつけず、自分だけ日本式に白米をたき、塩漬の茄子やきゅうりや大根をおかずに食事をした。味噌汁を作り、塩いわしを焼くのである。そのたんびに、東京の世田ヶ谷に居た時は……仙台の鉄砲町にいた時は……と、きまつて食物のぐちが出、日本の食事の、「おいしかったこと」をくり返した。じつさい、たとえ、どのような場末でも、都会でさへあれば、日本は、食べものの屋には不自由はしない。

そばや、てんぷらや、支那そばや、すしや、おでんや……長崎ちゃんぽんまで、売っている。百円札二枚でも、けっこう、安くたべられる食物は、ふんだんにあった。

ところが、此処では、そういうものは、サンパウロの町まで出

なければ手に入らないし、材料も田舎には、ない。自給自足というと、ていさいがよいが、何もかも、みずからの労力を以てしなくては、すし一つでさえも口には入らない不便さを想うと、おみよには、耐らないほど情けないのである。

言葉も、道すらも、まだ、よく判らないサンパウロに、どう行けばよいのか、も、見当はつかず、サンパウロにさへゆけば、日本人が、大ぜい歩いているから、心配なことはない、とは、よくきかされるものの、おみよは、まだ、一度も、ひとりでサンパウロに出たことはない。

心細くて、乗合い自動車に、乗る勇気がでないのである。

昔、俊寛という坊さんが、佐渡に鳥流しに会った時、こんなではなかったか知ら、――と時々、おふみよは考える時もある。

この淋しさつまらなさは前途への希望にはり切って仕事にうち込んでいる息子夫婦には、わからない。

「日本へ帰る、つたつて――そりや、金さへあれば、すぐにでも、船に乗せてあげるけどね。こんなにドルが高くつては、とても、とても……。また、上ったよ。」

「三等でも、だめかえ」

「だめだ……五百コント、片道で、いるんだ。そんな金が、いま、出来るものか」。

「三等以下の船客には、して呉れないかねえ」

「そんなことできないよ」

「総領事館に頼んで、何とか、助けて帰してもらおうわけには、ゆかないかねえ」

「あんたが氣狂いにでもならなきやだめだよ。いや、僕が氣狂いにならなきやだめだ、――母さんぢやだめだろう」。

「……………」

「ねえ。お母さん。何とかして、きつと、その内に、帰してあげるから、もうすこうし……………ほんの二、三年でいゝから、辛抱していて下さいよ。頼むからさ」。

「いやだねえ。ほんとに。…………お前たちは、まだ、まだ、若いから、それや、どんな辛抱でも、するがいゝさ。出来るだろうけれどね――わたしは、もう、先が短かいんだよう、英吉や」

「先が、短かい短かい、って、ふた言めには言うけど、そんな言い方、止しとくれよ。ぼくだって、いつ死ぬか、判りやしないよ。それより、もう少し、ぼくの氣持も、考えておくれよ。折角、この仕事にうち込んでみる張り合いの出たところなんだから、大体、様子がわかったところで、ぼく、独立して、やってみたいんだよ。アマゾンでは、先に金を使ってしまったって、失敗したからな」全く…………。

日本できいていた、「ブラジル天国」も、いゝ加減なものだった。と知った時は、失敗したあとで、ただ人間の数を送り出しさえすれば、一人あたりいくらと、人頭税みたいに手数料の儲かる旅行屋の、しごく安易な宣伝や、何十年ぶりで訪日する、いわゆる成「功者」たちの、どちらかと言えば誇大な「儲かります話を、そのままに受けると、まるで、ぬれ手で栗をつかむ様に、やすやすと大金持になれるような錯覚もおき、「天与の「大資源」にめぐまれた「楽土」も、いざ来てみると――実際は、現在、たしかに楽土

ではあるが、それは、永年額に汗し、涙を飲み、手の爪をいびつになるまで磨滅した苦斗の上に築かれた楽土で、そこに最初から労働者として移住する人々にとっては、初期開拓の時代の移住者達よりは、それはたしかにらくではあったが、けれど、さりとて、何も、ぬれ手で粟の幸運がそうそう誰にも平等に万人の上に入ることがっているわけではない。今日、隆盛を極めている地方に入ったからとて、最初から、何も彼も、誰でも彼れでもすぐ成功の好運をつかむものとは期し難い―ことを、英吉一家は、じつに身を以て体験したのである。

日本で、よく宣伝される、「大アマゾンの緑地帯も、うかうかすれば、マラリヤや飢餓の脅威に直面せねばならないこともあり、「眠れる天然の資源」も、アメリカのような富裕な国が、膨大な開発費用をかけて、戦時中、開拓したフォードランディアの如く、すべてを金力に任して、大がかりな機動力でも使つての開発なら、いざ知らず、ただ、人間が、すこしばかりの金と、なま身の労働力位をアテにして持ち込んだところで、その苦斗は想像にあまるだけで、大した成果は得られそうもない ― しかしそれに気がついたのは、山田英吉一家が、アマゾンに移住して、三年の時の経過のちであつた。

フォードランディアに近いところに、五十アルケレスの土地を購入し、ひと通りの農具、トラクター、給水用ポンプ等をも揃えた時は、可成り沢山携行してきたつもりで、営農資金の何万ドルも消え、さて、待望の農作物栽培にとりかかったものの、うちつづく旱魃、病虫害、それに、まず家長の英吉が、マラリヤとも何の熱

とも知れぬ熱病から、肝臓を、ひどくいたため、五才と三才の長男次男は、ハシカと大腸カタルとで、次々と亡くした。その上へ栄養失調から、おみよはとり目となり、美しかった妻の八千代も、マラリヤで黄色い枯れすすきのような姿となり、作物もそれに劣らず病気になった…………。

でもその頃は、まだ「初期移民のひと通りは歩む道ですよ」などと一家は、前途の希望を語り合い、おみよはおみよで、日本流のかぞえ方で言うのと、一千何百町歩の大地主になった、という、大ざっぱな概念から、何か嬉しい心地もして、初期のけなげな決心もくずさず、全然農家の嫁には不向きな八千代を可哀相がる親切ごころも持っていて、却って、此の苦難の時代の方が、一家は氣持よく団結していたようである。

○

三年の苦斗ののち、大学出の会社員が、日本で画いてきた「拓土」の夢はむざんに崩れ、いまはもう大アマゾンの夕立ちにうたれた病みニワトリのように、哀れにも、しょんぼりとやつれ果てた姿で、一家三人は、殆んど生命からがら、と言った切迫した氣持で、サンパウロ市の郊外に出てきた。売れもしない土地はそのまま、農具も何も二束三文に売り払い殆んど着のみ着のままと言った有様であった。そして、サント・アマーロ、「此処こそ楽土」と教えられて、野菜作りに入ったが、その年のひどい降霜で野菜は全滅、メイアにも失敗した（メイア、というのは借地をして収穫物を地主と半分けにする一種の小作）齒を喰いしぼる思いで、三転してとりついたのが、この養鶏の仕事。

ただ、感心なのは、妻の八千代で、こうした哀しい流転と窮迫の間でも、ひとこともぐちもこぼさず、却って気弱くなる良人の英吉を励まし、不馴れな農業にちつと堪えて努力をつづけてきたのには、堅忍不拔な性質もあつたが、戦災孤児で幼ない時から、他人の中で苦勞した経験が、ブラジルの国の農業の視野の広さ、前途の明るさ、また、まだ新らしい、躍進活動の時期に入つたばかりの、ブラジル、というものを、いちはやく心の中に見とおさせていたからでもある。

おみよだけが、困り者になつて行つた。

― 絶望の果て ― というのは、一千何百町歩の大地主の夢も、いまでは虹よりも、果敢なく消え、病身となつた上、トリ目はわずらい、孫は亡くし、一切が、この老女にとっては呪わしい幻滅となつたからだ。

すっかり心が歪んでしまい、英吉夫婦を恨み罵る毎日がつづいた。

英吉の実直な性質と、八千代の、初期開拓時代の移民妻にも劣らぬくらい、けなげによく働らく有り様とに、まず感動して、一家を引き受けてくれたのは、イタケーラに養鶏で成功している日本人、在伯四十年という農業のヴェテランであつた。

現在では、第一級の養鶏案になつている、その主人は、無口だが、親切な、人柄の良い人物であり、その妻女は賑やかで明るい、話し好きの人で、これまた世話ずきの温かい人であつた。

一家総勢、三十何人の大家族主義の人で、長男から五男まで、いづれも結婚して、父母の家を中心に、近所に家を持ち、養鶏の事業は一家眷族の共同運営の形式で、やつていた。

可成り好い条件で、養鶏のカマラーダ（日雇い）にしてくれた上、将来独立の時の援助や、保証も約束してくれる、という、英吉への氣の入れ方であったが、しかし作業上のことはなかなかきびしかった。

また、採卵用や食肉用のニワトリを扱かう養鶏家も、いざ、実際に入ってみると、なか左方、なみ大抵の苦勞でないことが英吉にも理解されてきた。卵や飼料の相場によつて、毎日一喜一憂される。卵の相場も、需要供給の原則以外に、時々、思惑外れや、いろいろの原因で、上ったり、下がったり一所不定である。

これは、馬鈴薯やトマトの場合も、相場の高低は毎日不定であることに変りはないが、たゞ、にわとりには、これらの野菜類とは違つて降霜の心配とか干魃の憂いとかはないし長雨や強風などの被害こそないが、その代り鶏には恐ろしい伝染病の被害がしばしば起きる。また餌料の高価とか、餌料の入手同性なども起こる。これらの現象が、養鶏家達をいつも不安定な氣持においた。

尤も、ブラジルの農業家は、何の種類に依らず、すべて、わきから見てみると、一喜一憂のメーリーゴーラウンド（回転木馬）に乗つて、上がったリ、下がったりしているのに似ている。そのスリルがまた、無上に楽しくて、農業が、やめられない、と、永年百姓をしている日本人から、英吉は、きいたことがある。

金婚式も、とうに過ぎた雇主の妻女は、おみよの限りないぐちを、かつては自分も、この通りのことを口走ったりしたものだったが、と、心のなかで同情するものがあり、しんみりとなぐさめるのである。

『山田のママイさんよう。ねえ、そのうちに英吉さんが、ひとも

うけしなさったら、日本に帰してもらえますよう。それまでの辛抱ですよねえ。』わたしもねえ、ウチと一人で日本から来たばかりの時は――と遠く昔のうすれた記憶をたぐりよせる。

ここで妻女は、四十年前、オンサ（ブラジル豹）の出る、マリヤ奥地開拓の時代、そのオンサに、

ある時、山道で追いかけられ進退きわまって道傍の大樹の上に登ってホッとしていたら、（オンサが木登り出来るとは知らず）自分の股の下に巨大なオンサの顔が出てきたので、びっくり仰天し、おそろしさのあまり、ツイ無意識のうちに小用を洩らしてしまつた……その小用がオンサの両眼にしみいり、豹は木からすべりおちた……。そこへ主人が猟銃を持ってかけつけ、まず威しの一発をうったので豹は逃げ、ほんとにあぶない所で……と、思い出ばなしに時を忘れ、おみよの郷愁も、いつとき、うすれるのである。

おみよはまた、戦争の末期、空襲のひどかった東京や横浜の話をきかせ、その当時、英吉が見てきたと言う、新宿、世田ヶ谷、品川、大森などの、道ばたに、持って逃げ切れなかったタンスや、机、本箱、ピアノ、陶器、置物などが、沢山捨ててあつても、拾う人も居なかった……などと話してきかせ、そのような会話のとりかわされているうちだけが、おみよにとって悲しみが忘れられているようであつた。

老女というものは、年をとって愚痴っぽくなると、何か惨忍な気持にもなるものか、息子の、何から何までが厭らしく、いぢめてみたいのだ。これが、曾つては大学までも出してやった男かと、おみよにすれば、息子の甲斐性なさが、齒ぎしりしたい程の情け

なさ口惜しさで運が悪かったのだ、などとは、到底思われず、もとは、宮城県でも屈指の富豪家として、代々、「殿様のようだ」といわれる生活をしてきて、英吉の父は政友会の県選出代議士として、東京でもハバを利かせていたのが、終戦をまたずに亡くなり、その後は、マックアーサーの土地改革令で、一反歩の田畑が米一升の値段で、持ち田は全部小作人達に分配され、不在地主であった英吉一家は、こうして、土地を失なったあげく、先祖代々の汁器、骨董類や、古道具類を売り喰いの状態で、でも、ともかくも、ひとり息子の英吉は、東京の帝大を卒業し、経済学士となった。そして、父の知人のおかげで、或る大会社に就職し、戦後十年の異常な躍進で旧態に劣らぬ美しい大都会となってゆく東京に、母子は家を持ち、学生時代から相思の仲であったタイピストの八千代と、晴れて結婚した。東京都庁につとめていた八千代は、家庭に入るとそれをやめた。

戦災孤児の一人としてある保護施設に收容され、そこで集団教育をうけたのち、そこからタイピストとして巣立った八千代は、幼ない時から、他人のつめたさ、世の中のつらさを充分経験させられているので、おみよにも、まめまめしく仕え、英吉の実直さ、律気さを、尊とい位に思い、多少の気の弱さは、仕方がないとあきらめていた。

それが結婚後間もなく、英吉が何と思ったのが、急にブラジルへ移住したい、と言い出し、その熱望は日を追うて高まり、決して一時的のブラジルブームに煽られたのでない証拠は、ブラジル研究の、凡ゆる書物や、ブラジルがえりの人々を訪ねたり、外務省や移住関係の会社などえ日参し出し、会社もやめ一時は憑かれた

人のようであつた。

おみよも八千代も一時はおどろいたが、あまりの真剣さにうたれ、その後は、ただ、何となくおみよも同調してしまつたようである。ブラジルで、大地主になる、ということが、おみよの心に虹の橋を架け、おみよの希望は、甘くふくらんで、ブラジルにやつてきたのだつた――が、今のうすぎたない格好は……と見る度に息子の背中に憎たれ口のひとも云わずにはいられない。

息子は息子で、それをきくと、折角希望を少しづつ盛り返してきた際なのに、その氣力を削がれること甚だしく、「仕様がないなあ、おふくろにも」と、吐息をすることも度々である。

「八千代だつて、東京で育つた人間だよ、それでも、だまつて、蹤いてきて、働らいてくれるぢやないか」

たまりかねて、言つてみた。

「八千代はお前のヨメさんだよ。ふん。亭主の好きな赤烏帽子、つてね。日本人ならあたり前だよ」

「母おやなら、なおさら息子のために、がまんしてくれてもいいぢやないか」

「厭だよ。モウモウお前さんたちの犠牲になるのはまっぴら」。

○

そう言う母おやを、時には、本当に、可哀相にも氣の毒にもなり、「連れてくるんぢやなかったなあ、おふくろなんて――」。

その頃、何かの買物包みの古新聞をおみよが、丹念にしわをのばして見ると、偶然にもその年の勅題歌として選に入り、ブラジルからの詠進歌で初の入選であり、歌の作者は、サンパウロ州バ

ストスの小松修水という、もうブラジルには相当ふるい人であった。

帰られぬ故郷恋しく

倚る窓に

アバカテ、わか葉

夕しげりして

とか言うので、これは、望郷の想い切々たる、ふるい移民のいつわらざる感懷であった。たとえ船の三等にせよ、訪日の出来る人は、在伯五十万をかぞえるうち、殆んど年々、百万の一に充たず、あとは、「まぶたのふるさと」を、哀しくも、なつかしく、画きつつ、ブラジルの土となつてゆく人々ばかりではないか。

日本など、見たくもない、という、負け惜しみの言葉の底にひそむ、叶えられぬ望みへのあきらめと、いきどおりとが、こめられているのを、本人は、気がつかないのだ

おみよには、しかし、そのような、旧い移民の感傷を、思いやるゆとりはなく、ただその時の、あまりにもピッタリときた、「日本へかえりたい」一念と、この歌との親和感に、胸がときどきするほどうれしくなり、その新聞を、ていねいに切りぬいて、土間の壁の暦の上に貼りつけた。

それを、ある日、隣りの農場の主人が見て、「わしも、おやじに日本ゆきをねだられているんで困ってますよ。親孝行はしたいんだが、こう、ドルが高くてはねえ」

しばらく、その切りぬきを眺めていたが、

「なあ、ママイさん。この歌を見ているうちに、わしもひとつ、

歌が出来たよ。これはどうかね。」

彼は大きな声で、暗諦するように、言った。

— いいかね。

「かえられぬ故郷うらめしく

のむピング。

おやじの顔は

赤びかりして」

つてのはどうかね。

おみよも、仕方なしに笑ったが、そのあとで、涙がすこし出た。そんな時、そばで、嫁の八千代は、ほんとうに気の毒なお母さんと思う。何かむねの中をかきむしられる様な気特になり、ほんとうに、何とかして、早くお金を儲けなければ、— と思う。

倅いなことに、苦勞しぬいてきたためと、良人をふかく愛しているためと、先住の旧移民達の苦勞話も耳にタコの出るほど聴かされてきていたおかげで八千代は将来の成功を疑わない。もともと伶俐な上に非常にしつかりした心を持った八千代には、美しい自分の顔や肢体を利用して、近頃とくに諸方に出来ているボアテ、飲み屋料亭などに「金を得るためには手段をえらばず」と走る氣持は出ないのである。

そういう方法を、しらないではなかったがそれよりも、努力の果て富というものを、蓄積してみたいものだ、という氣持のほうはずっとつよかった。これは八千代の本来の性質によるものだった。

暮も、もうあと半月、というある日、サンパウロ市中へ用達しに出たかえり、英吉は、パラフィン紙に包装された長方形のボ―ロ（カステラの一種）を買ってきた。

日頃、母おやが、カステラがたべたい、と言い、時には、東京の長崎屋のカステラなどと、いやがらせをも口に出し、八千代の焼く、丸い型のボーロなどは、カステラの気がしない、とばかり、よこ目でにらんで口に入れようとせぜず、いつも「四角なカステラ」と言うのを思い出して買ってきたものであった。

「四角くないけどね、ホラ、色も形も、切ったところも、カステラに似てるだろ

そう言われると、さすがに、おみよもうれしく、そのひと切れを口に、はこぶのである。

「おいしいよ、英吉」。

「もうひとつ、あんたに、あげるものがあるんだ――ほら」。出したのは一枚のロテリア（富くじ）の札であった。ナタル（クリスマス）の大賞金のつくものではなく、ふつうの土曜日のもので、これは、大した金額でなくとも、一枚買えるのである。

そして、一等に、うまく当れば――十枚一組のうちの一枚で、十分の一しか貰えなくとも、日本へは、行かれる。

「何、これ、宝くじみたいだね」

「まあ、そんなものさ。それがうまく一等にあたったら、あんたが、日本へらくらく行かれるよ」。

「へえ、だけど……当るもんかね、わたしや、ネの小白で、くじ弱いんだから」

「まあ、希望だけは、もてるよ。その日のくるまで、あんたのグチを封じておきたいんだよ。大みそか前の土曜日まで、何も云わんどいてほしいな」

「わたしの、グチ封じに買ってきてくれたのかえ」

「そうさ。全く、やり切れねえものな」

母と息子とは、隔意なく、顔を見合わせて、笑い合うのであった。が、お互いに、心の中では、何か、祈りたいような切迫した気持ちだった。

その夜、ねしなに、亡夫の写真の前に、掌を合わせながら、おみよは、ふと、何か、息子が、心から、可哀相になった。

ー もう、英吉をいぢめるのは止そう ー よごれた白髪あたまを、しずかにうつむけながら、おみよは、心から、そう思った。

（終）

ネ ブ リーナ

かつ子の不幸な「幸福」は、サンパウロの八月の、ある朝のふかいネブリーナ（もや）の中で始まった、と言ってよい。

そしてこの「不幸な」幸福は、二年後の、同じ八月の朝もやの中に終った。

彼女が生れた時、彼女のふたおやは、そのみどり児のゆくすえ、わずか三十年後に待っていた、くろい運命の手を、果して予感していたか、どうか？

三十才までを、ともかくも、「洋裁」という、派手な職業の中に過ぎ、リベルダーデ街の、あるビルの二十階から、跳び下りて生命を終わるまで、彼女は、ともかくも、独身であつた。

独身を守った、ということは、結婚式をしなかった、ということ、だからと言って、必らずしも、彼女が男を知らなかった、という事にはならない。

結婚式という式典を、しなかつただけで、ひそかな情事による、いく人もの男の肌は、すでに彼女には恋人、愛人、情人、経験済みであつた。此の三ツの型にあてはめられる男友達は、三十年の生涯の半分過ぎ以後、かつ子の前に、いくたりとなく、現われては、また去って行つた。

人種の（るつぽ）と、言われるサンパウロである。かつ子の情事も、ルツボの中の様に、人種混成で行われている。だが、それは、かつ子だけが知る秘密であり、たのしみであつて、父親や、母

親の関知する限りではない。こう言う点では、ブラジルのコロニアにも、結構、戦後の風は吹き、その風にあふられ、よろめきすぎて茎を折った草の様にかつ子も枯れてしまったのだが。

酒と勝負ごとに眼のない、好人物ではあるが、生活力と、働らく意力を、中年以後、まるで喪失して了っている父親は、内戚張りで、いつも老妻をドナリ散らすことで、家長としての威厳を保てると考えている様であり、母親はまた、三十何年を、同じことをくり返しては父親に罵られるために、つれ添っている様であった。このふたおやは、ともに長く生き過ぎた様である。もっと早く死んでいたら、一人娘を非業に死なせるなげきには、遭わずにすんだかもしれない。

五人もあつた子供は、幼ない内に次々と死に、母おやはかげでそれを「パパイの酒毒のせいだ」などと愚痴めかして言つたこともあるが、元来が非常にうでのよい大工職であり乍ら金が少しあると、仕事のえりごのみばかりしていて、一向に働らきに出ようとはせず、たまたま友人と共同でやつた商売にも失敗し、昔は花札、今は、もっぱら麻雀に凝り、近頃では、競馬にも行っている。

母おやは、仕方なく、坂の下の、スダンの煙草工場に紙巻きの仕事に通い、それで、十年この方、生計を立ててきた。

かつ子は幼ない時から、手が非常に器用で、殊に布地をいぢることにがすきであつた。器用な点は、「おれに似たのだ」と父おやはよろこんで自慢したが、父親が賭け事に熱中する性格が、そのままそっくり娘につたわり、その情熱が娘の場合恋愛一途に向つてしまった責任については父親は考えたことはない。

十五の年に洋裁所に見習いに入り、二年後には、早や、人前の裁

断師となった。

バロン・デ・イタペチニング街の一流百貨店の婦人洋服部に十年をつとめあげ、退職金を、充分貰ってやめると、独立して、もっぱら、上流の婦人服専門の裁断と裁縫を始めた。

小さな店を、上流人の集まるアウグスタ街に持ち、今では縫子も七、八人使っている。

かつ子は独立するまでは大層親思いで、月給も全部母親に渡し、余分な錢も使わず、ただ、一心不乱に生活のために働らいてきた。それが、そうすればする程、父親から働らく意欲を失わせ、母親にもまた、その気配が見えてきた時、彼女の性格は、ガラリと一変した。もう一つの原因は、上流の婦人を顧客とするので、応接する客のぜいたくさと、「金持ち」と言っても、中には、ルア・サئلイスやコンソラソン街、アウローラ街、レプブリカ広場附近の高級アパートに住む、いわゆる豪商や紳士連の「愛人」もあり、そういう種類の女達の眼もさめるばかりの豪奪さに、いつしか眼も心も馴れて、かつ子自身も、それにならう欲望に駆られ、儲けた金は近頃では殆んど自分自身のぜいたくに消えていたせいもある。

エスツダンテ街の坂の上の、きたない安アパートの父母との生活など、今ではとうにふりすて、リベルダーデ大通りの新築アパートに、美事な位、ぜいたくな居室を持っていた。

わずかな、ほんの学生ひとりの下宿代位の金は、それでも、毎月両親の許へ運ぶのであるが、娘の凝ったみなりや、高価な装身具を見る度、父親は怒った。

『此の親不孝』と父親は怒鳴るのである。

「てめえのぜいたくばかりしやがって、――何だ。親によこす金、これっぽっちか」

「それでいいでしょ。我慢してよ」

「お前はなア、自分でばっぱと使う金はあるても、育ててやった親によこす金は、ねえというのか」

「ないわ。それでたくさんでしょ。不足だったら、パパイも、すこし、働くといいんだ」

「このガキ。何だその口は？手前ばかり、貴婦人ぶりやがって――何だその口は？おれに、この年寄りのおれに、この年になつてまで、まだ、働らけ、っていうのか？てめえは』

「この年でも、あの年でも――第一パパイ、あんた、この二十年、まじめに、働らいたことある？みんな、ママイと私とで、働らいてきたんぢやないの」

「うるせえ……この恩知らず……よくもそんなことが言えるもんだなア。一体、誰のおかげで、お前、大きくなつたんだ？ええ、言ってみろ――」

「ふん。ママイのおかげさ」

せまい台所の汚ない食卓の上に小鏡を立てかけ、かがみ込んでマックス・ファクターの口紅を濃いめに塗りながら、かつ子も負けずに大声を出すのである。

珍らしく昂奮したので、手が震え、口紅がうまくつかない。金色の模様入りのコンパクトが、床におちたのも、気がつかない。

「ねえ。パパイ。わたし、あんたに生んでくれ、つて頼んだんぢやないのよ。何よ、勝手に私をこしらえておいて――トリだって、

生めば、ヒヨツ子を育ててるぢやないの、育てるぐらい、あたり前よ。恩に着せることないわ。それとも、パイは、トリ以下の人間だったの？)

「えっ！このガキ！」

立ちあがる父親を、おろおろと母おやがおさえた。「まあ　パイ………かつ子、お前さんも、やめなよ。口が過ぎるよ」

「お父さん。じゃ、言うけどね。今迄、あんたたち、何して来たのよ？よその親はね、みんな働らいて自働車もあれば、お金もうんとある。立派な家に住んで、家族はぜいたく三昧よ……。うちは一体どうしたのよ！　こんなざまで……。みんな、はじめは、あんた達と同じ、腕一本のコロノ（農園労働者）から仕上げた人達よ！　ね？　はずかしくないの、子供に対してさ」

「バカ！　おれわな、あんなドロボーとは、ちがうんだ、正直一途で世を渡ってきたんだぞ。暴利商人や密輸入業者ぢやねえんだ」
「それはパイのへらずぐちというもよ。みんな甲斐性のある人は今までにもう金持になってるわ。

パイはバカなのよ、なまけ者なのよ。人が好い、ってことは、人生に何のたしにもなりやしないわ」理の当然に、父親は怒りにふるえたが、だまって娘をにらむと、ふっと外へ出て行った。

「バカおやじ……大方、今夜も、また麻雀よ」。そのバカおやじの後を追う様に、かつ子も外へ出た。アパートの前に小型の国産車が玉虫色に光っている。かつ子はそれに乗り込むと、待っていた男にあいさつも忘れ、乱暴にくるまの扉をしめるのである。その夜のパーティは、寒かったせいか、いつも程は人も集まらず、しかし、踊りは明け方までつづき、踊り好きのかつ子は、疲れも忘

れて、幾度も、違った相手と組むのである。

霧のふかい夜で、夜霧につつまれた中心街は、まるで、夢の国に眠っている様な感じで、鎮まり返っている。

ホールで踊る人々から離れて、窓辺に立ち、夜あけの街々を眺めているかつ子の胸に、感傷と、自棄の入りまじった感情が渦まいた。

金は儲かっている、恋の遍歴に事は欠かなくても所詮は、しない街の一裁縫師……そんな感慨が、かつ子の心を、ふと暗く翳らせる。

一流のデザイナーとして知られているマダム連の行状が、次々と思いかぶ。フランス人、ドイツ人、アメリカ人、イギリス人、イス人、スエーデン人、そして、ブラジル人……。コロニアでは、まだ、裁断師や、デザイナーなどは、大したことではない。一がい、「コスツレイラ」（洋裁師）で片づけられてしまう。私の前途に、一体、何があるというのだろう……

しよせんは自分も貧乏人の子。まちがっても、玉の輿に乗れるとは思えない。殊に、この年では……金のある男達ばかりをえらび、その情人となつて、表向きは豪奪な生活をしている、洋裁店、美容院などのマダムの内幕も、知りつくしてみれば、かつ子には、何か情ない、はかないことばかりであった。日本民族に三千年の伝統を流れている、道徳、婦徳、というようなものが、やはりかつ子の放縦な血の中にも流れていたのであろうか。

ああ、やつぱり、まじめに結婚することだ……。人種の見本市みたいなサンパウロで、あらゆる種類の男の肌を、知りつくした果てに、たどり着いた女の希望が、やつぱりそれであったとは！

急にパーティに居るのがばからしくなり、かつ子は、だまって身をひるがえすと、クラブの階段をかけ下りた。

あとから蹤いてきた若い男に声をかけられ、我れに返ると、お茶の水の橋上であつた。「――あぶないから、送りましょう」八月の半ばの夜あけ方、ふかい霧の灰白い中で、影絵の様に停つ男は、以外に若く、法科大学生だと言つた。

どうしてそうなつたのか判らない。

思わぬ青年の親切がうれしくて、ツイ、そうなつてしまつたのか、それとも三十女の独り身の感傷が彼を彼に結びつけてしまつたのか、それは誰にも判らない。霧の中で、

『ありがとう、貴方、ほんとに親切な方ね、うれしいわ、ほんとに。』思わず両手を男の肩にかけると、習慣的な、馴れた動作で、かつ子は男の唇に、われから唇を重ねて了つていた……

青年は、さすがに、おどろいたらしく、すんでしまつてから、はつとあと退つた…………。

二人は、それを契機として、たびたび会つた。食事もし、映画も見つた。三十の女の、世間や情痴を知りつくした心と、肉体とが、まだうぶな学生を捕えることは、殆んど一瞬で足りた。

しかし男には許婚の人があり愛情はずつとその方に深かつた。罪なことだとかつ子は考えたことはない愛している男を、自由にえらび取るのは、当然だ、と思つていた。

しかし、男は、やはり、真面目に考え、ある日、無断で彼女の前から消えた。

パラナの大耕主の一人息子であつた。

八才も年上の、しかも、男ずれした女など、両親が許す筈もなく、将来にも影響する、――と、彼が考えたとしても、いちがいに男を打算的と責めるわけにはゆかない。

夜あけ方、女ひとりが、タクシーもない街をさまよい歩いてゆくあぶなさに、ほんの親切どころで送つてやつただけで、もともと、何の意図もなかったのだ。

かつ子の執拗な、あらゆる誘いの手段も、後には復讐的ないやがらせにも、男は無関心になることができた。

もともと女が誘つたのではないか。賢いかつ子には、去つて行つた男との距離がも早どうにもならないと判り、また、なぜ自分が捨てられたか、の理由も反省出来た。しかし一度味わつた新鮮な果実に以た若い男の肌の味は、その澄んだ美しい瞳と共に、かつ子の心と身を灼くのである。

が、どうしても、ダメ、と悟つた時、かつ子の、すべては色褪せて見えた。

物質への、激しい執着も、より高い生活、への幻影も、すべてが、色褪せたものに変つた。

彼女は、怠け者となり、怪しげな賭場や、麻雀に夢中になるのである。

一年後の同じ八月、ある土曜日。プラサ・ダ・セの大寺院の鐘の音が、殷々として広場の上を鳴り渡る夕べである。

かつ子は、全く偶然に、その大伽藍の石段を、多くの人々に囲まれながら、静かに下りてくる一組の新婚を見、その花むこの顔を、ひと目見た途端、あつ、と息をのんで棒立ちになった。……まご

う方なきあの男――。

鐘の音は、なお、ごおん、ごおん、と、ひびき渡り、それは、聴く人の環境に応じて、新婚への祝福とも、悲恋への弔鐘とも、とれるのであった。……何か、せつないものが、胸一ぱいに詰まり、そのくせその胸の中は、がらんどうになった様な、放心した様な呆然とした有様で、蹣跚と、かつ子はリベルダーデ街を、歩くのである。

その夜明け、かつ子は、サンパウロの街を眼下に一望に見渡す、二十階の居室の窓をあけ、ぢっと暁の空と、朝もやに埋まる街々を眺めた。

眼下の、白い深淵の中に、何か知らない大きな幸福が待っている様な気が、かつ子の心を、しきりに誘うのである。

上半身を、思いきって窓がまちにかけると、何となく、かつ子はもう一度空を仰いだ。

《終》

金髪に気をつけろ

賞金 一万コントス（二千ドル）のサンパウロ大競馬に、アルゼンチンの馬が優勝して、クルゼイロ貨がゴツソリと、ブエノスアイレスの馬主にさらって行かれた興奮の、まださめ切らぬ一九六一年五月一日の夜更けのことである。

五月二日の夜あけ方、と言った方が、正しいかも、知れない。

サンパウロ市の盛り場、アヴェエニータ・サンジヨンからちよつと横に外れた所、サンタ・エフヂエニア区のジュリオ・メスキッタ広場もさすがに深更、秋に移り変わる季節の夜風は冷え冷えと舗道を流れ、人影も、ほんの時折、広場を横切るだけ夜あかしの酒場に、わずかの人間がうごめいて、ネオンの届かない建物のかげなどは、気味のわるい位、暗いのである。

その、ジュリオ・メスキッタ広場に面した、とある高級アパートの、もう消燈してしまった玄関の扉を乱暴に内側から押し開けて、舗道に跳び出してきた二人の男。

何か大声に喚く一人を、ほかの一人がなだめる様な格好で、しきりにもつれ合っている。

わめいている男は四十位の、小柄で色の浅黒い、しかし服装や靴など、なかなか凝った高価なものをつけ、少しばかりよろめいているのは、多少の酒気でもあるせいであろうか。

なだめている様なふうの、他の一人は、やせ形の、おとなしそうな、ふつうの安背広だが、何か、ここの腰、態度、言葉つき、な

ど、ガルソン（給仕）風な所に見える男。顔と頭髮では、若いのか、中年なのかわからない。みなりの良い中年紳士は、矢庭にガルソン風の背広服をつき放すと、乱暴に両腕をふりあげて怒号した。

「泥棒女！どろぼうおんなああ！オンデ・エスタ！（どこにいる。）！」

折柄、払曉の市中巡回中の警官が二人、これをききつけて、駆けよってきた。

「どうしたんだ、きみ、一体……」

この、オ・ケ・フオイという警官の言葉をきくと、一瞬、紳士の顔には、しまった、という、羞恥のかげが、掠めたが、もう、こうなつては仕方がない、もの凄い金髪美人のくせに、枕探しの名人に出会つたてんまつ、一ぶしじゆうを、警官に語らなければならないハメになつてしまった……。

それが、二日の朝刊ウルチマ・オーラ紙に出て、さらにひらく世間の人々は、金髪に油断するな、金髪に気をつけろ、と語り合う仕末になつた。……殊に、盛り場を、いくぶん猟奇的な気分であらつく外国や地方から来た旅行者や、地元の遊び好きの紳士達の間にも、一種の恐怖をまき起したことは否めたかつた。

二日の葡字新聞の朝刊の社会面に載つた中年の紳士は、そのすぐ前日サンパウロのダービー国際大競馬に、二着の勝を占め、賞金約二万クルゼイロスを得て、馬主の伯人富豪から、たんまりと「御祝儀」の出たという、リオで有名な騎手ブリドン・シレノ（軽勤の智利人）の綽名で馬ずきの間に親しまれている、フリオ・フランシスコ・イリゴーエンで、リオのグワナバラ湾に面した風光明

媚な高級住宅地に豪華な住居を持つ、騎手のうちでの「富豪」であつた。

一体、男というものは、――男ばかりぢやない、近頃は、女までも、バアやキャバレエに、イギリスやフランスやイタリーやポルトガルやスペインの高価な酒を飲み、それらの混合になるカクテルを傾むけ、アメリカのジャズをきき、ギターやバンジョーやヴァイオリンや手風琴や笛やドラムやピアノやシンバルや、

――えゝ面倒臭い――、兎に角ヂヤンヂヤン音を出す鳴りものと、煙草の煙りと人いきれの中で若い女の裸踊りなどを卓に座つて眺めていれば、貴重な人生のうちの、夜のいく時かが、紙幣とともに、自然と消えてゆく……という、まことに調法で楽しい消化時間の方法が流行。男、男、男、或いは女、女、女、或いは男、女、男、もしくは女、男、女、または、男男、女、女最も普通的なのが男の女の一对で、まれに、孤独の老人や老嬢しょんぼりとした失恋のひと男などが、ぼんやりと、この雰囲気の中で、心の憂さを、ためいきと一緒に吐き出している……と言つた夜ごとの風景が、現在、世界中のどこでもがそうであるように、このサンパウロでも、繰り返されている……。

レプブリカ広場の「アアシス」、マヂョール・セルトリオ街の「ラ・ビアン・ロス」フランクリン・ルーズベルト広場の「ボン・ソア」、新らしいのでは、モルンバイ大競技場下の「ボン・ボエイジ」など、みな、それぞれに金をいくら費つても費い切れない連中の、それこそ「心のオアシス」、日本人のなじみのところではセシー街の「ブラック・ジャック」ドクトル・ピント・フェーラス街の「キシマ」おどり踊れて、酒飲めて、そしてアワよくば（アウグスタ

街の「ジュリアン・ソレル」……」女の子をも手に入れることができ……モチロンお金があれば、だが、いまのサンパウロの金儲け族の、やっぱり心の憂さと紙幣の捨てどころ。うれしいことがあっても行き、悲しいことがあっても行く、男ごろの終着駅。

その一つの「ラ・ビアン・ロス」に、アルゼンチンの名馬、アルツーロ・Aと覇を争そい、レタ・グワルダの栄位を得たうれしまぎれ、智利生れの名騎手、一九歳の分別盛りも、ツイふらふらと、常連の避で、足が向き、給仕の某から紹介されたのが、全く目の覚める様な金髪の美形、此の世のものとも

思われぬ楚々たつ姿に恍惚となり、この美女を擁して程よく踊り、程よく飲み、さらに程よく楽しむために、ボアテの閉ったあと、女の誘うまゝにアパートに導かれて行つた。ところが、この美女が、こともあろうにスワドウロ（枕探し）。歓楽終れば忽然と紙入れの中の拾ミルクルゼイロス（百ドル）と、高価な腕時計とは、美女と共に掻き消す如く、無くなつてしまつていた……。

この早業！

そこで一緒に縦いてきた給仕男を掴まえて、わめいているところを、警官に見つかり、さて翌朝の新聞記事となつたワケであるが、警察では、多分に「共謀」の疑い濃厚なり、として、給仕も留置するとともに、一方姿をくらました金。パツを搜索中……と新聞は、騎手の写真入りで報じていた。

ー ははあ、イリーゴーエン氏も、やられたか……昨日の競馬場で、大群集が、左方の一般観覧席にくろぐろと犇めくのを、馬主席を距てて、遙かに眺めやり乍ら、ふだんは、騎手や調教師達の

家族しか入れない、いわゆるパドック、馬の下見席を、大競馬の日に限り、一人三百クルゼイロス（三ドル）で、一般人にも公開する、その「特別席」におさまって、多少の優越感と共に、一般席の立錫の余地もない混雑ぶりを悠然と眺めやり乍ら、最終回まで見物し、気持がゆつたりとなれていたせいか、思惑も、予想も面白い程よく適中し、単勝、連勝、どれもこれもみな当り、何十倍かになって返ってきた……という、近頃でない、ツキようで、上々機嫌となり、さて、帰路にじぶんのくるまを運転しながら、「青柳」へ行こうか、「赤坂」にしようか、いつそ気の張らない「錦水」にしようかと料亭の女どもの顔など思い浮べ乍ら、ちよつと思案したが、いつも損ばかりしていて、奥方に皮肉ばかり言われている手前、今日は大威張りで帰館をしてやろうと、ハンドルを握る手も軽やかに、自宅にかえり、その夜は如何に自分のカンが良かったか、と、日頃の仇討のつもりで、勝ち金も五倍位におまけをつけて、それどうだ、とばかり、奥方をへこませ、いつかも、皮肉屋の奥方が子供相手に、「五ミルクルゼイロスのお金は多いの、すくないの?」とワザと子供に問わせ、「それア太郎ちゃん、ママがフエイラに行けば自動車に一ぱいお野菜積んで帰れる位、たくさんのお金だけれど、うちのパパなら――そうね、多分ケイバの三回目位でなくなっちゃうわ」などと、わざとイヤみたっぷりの問答をしていた、アノ皮肉に対しても、充分に、つらあてが出来た、と、うれしまぎれにぐっすりと眠って起きた今朝の新聞に、このスワードーロのはなし……。

「――はは、アノ男も、やられたか………」

「なあに、父さん。誰が、やられたのですって?」

「――（ああ、危うし、危うし、船中にては、左様なことは申さぬものにて候……か。）」「イヤ、ナニ、こつちのことさ」あわてて新聞を卓におき、熱い珈琲を啜っていると、まだパジャマのままの長男が二階から下りてきた。

「――何だ、お前まだ寝てたのか、学校はどうしたんだ？」

「――ん。今日はお昼過ぎからだよ。これ、今朝の新聞？」

父の横手にすわってウルチマ・オーラ紙を見ていた長男が突然笑い出した。

「――あはは。あはは。これ見てごらんよ。スワドローの話がでてるよ」

「――何だ、学生のくせにそんな所ばかり見るんじゃない。下らんことだ」

ぼくの友だちのね。パパ。……伊太利人なんだけど、そいつのおやじが、やつぱりこの間、られたんだってさ。みつともないから届けなかったんだって……同じ女かも知れないよきつと。

「――お前……お前たち、そんな話ばかり、学校へ行ってるのか？ 呆れた奴等だな」

「――しますよ。ぼくたちもう来年は大学ですよ……ロイラ（金髪）だってねこの女、やつぱりそうだよ」

「――何がどうしたのよ。ジョージ？」

奥方が、わり込んできた。

「――あのね、まぬけな人が居てね、ボアテで知り合った女の人についてそのアパートに行って、お金と腕時計奪られちゃったんだって……だから、金髪に気をつけろ、つてことさ、ねえ「お父さん」わざと「お父さん」などと日本語を使ったりして、厭な

奴だナ、とギクリとした。

「――日本だつてあるさ。枕探しという奴さ。ナニも珍らしい。

「――ぢや、パイパイ、日本にいる時、やられたことある？」

「――バカ言え。お前のいまの年におれは日本からきたのぢやないか」

「――ああ、そうだったな。ぢや、去年日本に行った時は？」

「――そんな目に遭うようなヒマなんかなかったよ。とても忙しくて」

「――ふうん、ぢや、ここでは？サンパウロでは？」

「――へんなことばかり、気にするんだな、お前も……まだ、ないねえ！有りがたいことに」

さりげなく、答えたものの、じつは、その「金髪」には、心あたりが、大ありであつたのだ、あの時の金額は、倅いなことに、大したことではなかったが。――

――ぢや、これからあるよ、きつと。」長男がいちのわるい調子で、生意気なことばを吐いた。

「……………」

良人が、長男の、意識してか、しないでか、こんな質問に遭つて窮地におちていることには、つゆ気付かない奥方が、なにげなく、忘れていた用事を思い出したおかげで、家長の窮地は、救われることになった。

「――あつ！そうそう、忘れていた……お父さん、大阪商船から、ツイさつき、おでんわで、今日午後三時に会社の方へきて頂

き度いつて」

「――おや、そうか、よし、さあ、もう仕事だ。ジョージ、くるまを出しといてくれ」

助かった、とばかり、急いで着換えに立ち上がる父親に、長男が顔をあげて言った。

「――オーケー。だけどね、お父さんも気をつけてくれよ。金髪にはね。」

「――うん。ありがとう、だいじょうぶだ、もう、だいじょうぶだよ。」

思わず、弱々しい声音で、そう答えてしまった……………。

《終》

人生のあや模様

「ひとを思いつめるということが、こんなにも、せつなく、くるしいことは、先生、わたし、こんな商売しているくせに、そして、此の年になるまで、知りませんでしたの……ほんとうに、つらいわ」

松山みどりは、ちっと私を見乍ら、低い、殆んどきき取れない位の声で、とぎれ、とぎれに言い終ると、瞳を伏せてうなだれ、ひざの上のハンドバッグを弄んだ。

「……………」

私は、だまつて、窓の外に眼をやり、近くの大きなビルディングに、朝陽が美しく照っているのを眺めた。

……この、無数と言っていゝほどの街の家々の中に、ああ、どれだけ沢山の人々の悩みや、哀しみや、苦しみや悦びが、かくされていることだろう。

「でも、先生、いくら私の様な者が想ったって、到底、だめでしょ？あの方には、あんな、美しい、立派な奥様があるし、子供さんもあるし……それに、社会的にだって、あれだけ有名な方なんですもの……片想いだってことも、また、片想いなんかしている自分の馬鹿がよく判るんですけれどねえ……あきら……め……られないのよ」

指示代名詞をよく使っているのは、その人の名を言うことが、更にこの人の苦しみを増すのかも知れないからか――私は心の中

で、そんなことを考えていた。

感情に堪え切れなくなったのか、みどりは、ハンドバックから、「ホリウツド」の箱を出し、器用な手つきで一本をぬき、私にすゝめ、私が首を振ると、自分の口にくわえ、銀台に金の竜の彫刻のある、小形のライターで火をつけ、フット一服するのである。

その身振りや、こなしの一つ一つに、踊りの素養の充分な優雅さとしなやかさ、上品さがちらちらと見え、私はこの人は、東京の柳橋あたりで芸者に出て居たら、今頃は、「名妓」と言われていたかも知れない、そんなことを考えた。が、見ているうちに、彼女の煙草を持つ白い繊細な指先が震え、白と黒の細いたて縞の夏のスーツのひざの上に、きれいな涙の玉が一滴、ぽつり、とおちた……………。

……………ひとが、哀しみに溢れて涙を出すのを見ているのは、職業柄、毎日の私だったが、此の時のこの涙には、私は、にわかに関心も何となくせつない感情に迫られ、へんに胸の上を圧迫される様な心地になった。

「みどりちゃん……………でもね、ひとの家庭をこわすことはいけない、何とかして、あきらめられないの?」「えゝ……………えゝ……………それは……………何度も、何度も考えましたの……………でも……………でも、どうしても、だ……………め……………なんです」吃り乍ら、しかし終りの方は早口に言い、みどりは煙草を灰皿に静かに捨て、まだ震えている指先で、もみ消した。

そのしぐさに、私は伊藤深水の美人画をおもい出し、また、かつて、東京のカブキ座で見た、新派、花柳扮するところの美女が、こ

の人そっくりの顔立ちだったことに気がついた。

サンパウロの名物になっている、純日本料亭「あをまつ」の、百数十人いる女のひとの中でも、特に目立っていたこの人とは、中年になるに従って、その静かな性格からくるのか、しつとりとした優雅さを増し、料亭に働らくひと、というよりも、上品な中年の奥様と云った趣を備えてきた。

踊りの素養のふかいこと、読書の好きなことなどが、しらずしらずにこうした味の深さを、身につける様になったのかも知れない。

それが――この人の迷ったのが、最近、東京からきた、ある会社の中年の機械技師で、妻子を日本へ残して、サンパウロのあるささやかなアパートに居る男で、同じアパートに隣り合っているみどりとは、朝晩顔を合わせる内、どちらからともなく、口をきき合う様になり、また、その男の、つとめている会社の宴席にも、度々酌に出て、いつか顔なじみの様になってしまったのだ、と言う。

日常その様な上に、客としての彼を知るにつれ、その人柄の良さに、すっかり惹きつけられてしまったという。そのうちに、その人のおくさんと、小学生一年ぐらいの坊ちゃんと小さい嬢ちゃんも、日本から、やってきて、賑やかになり、はた目には、本当に円満な、楽し相な家庭に見えた。

その中年の技師は、ある機械の有益な発明で急に伯国中に名を知られる様になった程の人だが、中肉中背というか、肥っても痩せても何ず、色の浅黒い、見たところ一向に美男でも何でもない平凡な様相の四十年配の男だそうで街路を歩いていても、誰の注意

もひかぬごくふつうのサラリーマン型、至つても静かな人物だというが、帝大工科を一番で出た恩賜の銀時計組で、戦争中は工兵隊の将校として、北支や南方を転戦したそうで頭が良いので、後には、策戦司令部付きに廻されたりしたという。これはその人の同僚から、みどりがきき出したことで――。

――私の死んだお父さんに似ているからかも知れませんわ。みどりは、そんなことも言った。

「あなた、そのアパート、かわったら？ほかへ行ったほうが、いゝと思うけど……なまじ、そばに居たら、ますます想いが増すんじゃない？」

「……とも思うんですけど……」

「越すのが惜しいのねえ……離れるのが厭なんでしょう……その気持よく判るけど……で、その方の奥さんという人は、貴女を、知ってる？」

「えゝ――そりや、隣りですもの、ただ、奥さんはまだ、何も知らないらしいの……私があの人をすきだつてこと……」

「知ったら、苦しむでしょう、そんなこと、氣ぶりにも出しちゃいけません、罪もない人を、苦しめるだけよ」

「奥さんは単純な人らしいの、結婚前、進駐軍のアメリカ将校に恋をされて、ずいぶん方々で踊った、なんて、平気で旦那様の前で言ってるんですもの、でも、体格もいゝし、きれいだし、背も高いし、堂々とした人よ、お嬢ちゃんが、また、とっても可愛いの！」「まあまあ、そんな平和な家庭をみだしてまで、あなた……いくら恋愛は自由だつて――それはいけませんよ、絶対にいけない。」「人を想わせるには、いもりの黒焼がいゝ、とかつて――ほら、

日本ぢや昔から言うぢやありませんか、わたし誰かからきいたわ……それと反対に、人を思い切らせる何かの薬かまじないか、ないものでしょうか？先生……」

「そうねえ。……残念ながら、そんな薬も、まじないも、知りませんねえ、だけど、まあ、おやめなさい。その恋は」

「止める、ったって――この思い、とれやしないわ。何しろ、こんな気持ちになったこと、生れて始めてですもの、自分でも、ふしぎだと、思う位ですわ」

「困った人ですねえ」

「だから、御相談に上ったのです……何とか、ならないか、と思つて。自分ひとりでは、全くどうにもならないんですもの。」

「先方はそして、一体どうなんです？貴女を、やっぱり、好きになつてる？」

「さあ――それが、判らないんです。金使いも、きれいな方だし、親切だし、やさしいけど……実を――いうと、まだ何もしたことないんです。接吻も。それでいて、どんどん好きになっちゃう、だから、先生、おかしいでしょう？」

「どこの人で、何ていう名の人？」

「真名子、明、つていう……」

「ああ。あの人」

その技師の名は、私も、とうにきいては居た。

「みどりさん。今、貴女に、どんなお説教をしたってだめだし、何も言わないけど、二日経ったら、

いらつしやい」

「私に思い切らせるために、先生、ネコの黒焼でも下さる、って

んですか？」

彼女は、やつと笑った。

「どうしたら、一番よいか、考えてみましょう。あなたの思いが叶えば、ほかに一人の女の人が不幸になります。人を不幸に陥し入れてまで、幸福になったとて、そのお返しで今度はもつと悲惨な結末が待っているのです。私の勉強した本では、そう説いています。……みどりさん、とにかく、二日後にきて下さい」 その時、誰かが、ホコホコと入口の扉を叩く音がした。

「あ、誰か、いらした様ですよ。先生」

みどりを室に残して、扉口に出てみると、ちよつと原節子に似た顔立ちの、大柄の三十前後の奥様風の人が停っていた。

「アノ、…お伺い致しますが…北山先生のおたくはこちらで……。」

低い声で、ささやく様にたづねる。

「はあ ― 私が、北山ですが」

「アノ、ちよつとお願い致し度いことがございまして……きいて頂けましょうか？」

「何卒まあ、お入り下さい。そして、今、来客中ですからその、部屋でお待ち下さい」

別の室に入れて、私は戸を閉めた。

みどりの居る室に行くと、彼女は帰る身仕度をしていた。

「では ― 先生、二日経ったら参りますから」

「あゝどうぞ、よく考えてみましょうね。」

此の人のくせで、音もなく、すべる様に廊下を歩んで、ひらりと外に出た。

腰を屈めて一ゆうすると、折から上ってきたエレベーターの中に消えるみどりを見送って、私は先刻の女の人の待つ室の戸を開けた。

「さあ、どうぞ、こちらへ。お待ちせ致しましたね」

心の中の脳みを、一切合切、吐きつくした時の、人間というものは、男でも、女でも、老いも若きもこんなにも、晴れ晴れとした表情に変わるものか、という、毎度の感慨を、その時も、私の心に起させて、夫人も、みどりの出た扉口から、いそいそと出て、足取りも軽ろやかに、エレベーターに乗るのであった。

真名子氏の夫人が、みどりを疑っていないのが、せめてものことだ、私は心ひそかに安堵したことである。

人妻が、自分の隣りに住む女と、自分の夫との情事などに想到するとしたら、それは、地獄におちたよりもっと悲惨である。

毎日、夜もひるも、妄想して悲しんだり恨んだりしていなければならぬ。

人の恨みのおそろしさは、眼にこそ見えぬ。さまざまの、惨事や、黒い杵を生む。

私はみどりの人柄が、根は気のいい女だけに、こんな恋は早く枯らしてもらいたかった。

それで、二日後、やってきたみどりに、私はむごい程の忠告を試してみた。又、空とぼけ白っばくれて片想いだ、などと、隠していないで、なぜ真実のことを言わないのか、とも、責めてみた。みどりは、半ば、アツケにとられた形で、絶対に、まだ片想いで、関係はおろか、ほんとうに、接吻ひとつさえも、まだ、していな

いのだ、ーと、頑強に、言い張るのである。

あまり、その表情も、真実を表わしているので、私は、みどりの言葉は本当だ、と信じる様になった。

すると、真名子明氏の放心状態、毎夜の如く、夜明け方の帰宅は、一体、何なのか？

一九五八年の七月半ばで、街は、不景気の底をつき、パラナの大霜害の余波を受けてか、日系の各銀行は、東山、南米の両銀行だけを残して、相次いでバタバタと閉まり、伯人の銀行も、閉鎖するものが続出していた。

寒さはひとしおきびしく、身の凍る様なある夜明け、真名子工学士は、キャバレエ・カロツサルの扉口から、あおい顔をして、出てきた。……が、こんなことは、夫人は勿論、みどりも、私も、知る筈がない。

半としを、通いつめたあげくの、この仕末……。真名子氏は、あきらかに、その時、男泣きに泣いていた……。と云う。

タクシーの中で、運転手が怪しんで、何遍も、何遍も、ふり返った程、泣けて泣けて、仕方がなかったのだ、と言う。

真名子工学士は、半年程前のある夜、偶然に、顧客先の伯人や米人に誘われて、このキャバレエ・（サンパウロではボアテ、と言っている）カロツサルに足を踏み入れた。

そして、何げなく、そこで歌っていた金髪の、オランダ婦人を、ひと目みた時、おどろきのあまり、あやうくうしろに倒れそうになった。

十四年前、日本軍が、南方を続々と攻略し、破竹の勢いで蘭領東印度諸島を占領していた時、そのうちの一つの島の首都に進駐し

ていた真名子氏は、その住民のオランダ人の一家族と親しくなり、英語の達者な氏は、何かとその家族を護り、救けてやっていた。

のち、戦い敗れて、真名子氏達が捕虜収容所に入れられた時、この一家が、つねに真名子氏に同情をよせ、いつも菓子や食物などを持参して収容所にきてなぐさめてくれた。それを、「親敵」と見做されて父と母とは街の暴民に殺されその時、辛くも命を助かったのがこのハンナで、当時十六才位であった、という。

収容所に人目をしのんで、たづねてきたハンナと悲しい別れをした後、真名子氏は戦犯をまぬがれて帰還したが、或いは、真名子氏は、此の少女に、恋をしていたのかも知れない。

二人はそのまま、相見ることもなく、十四年後、再会の処はサンパウロ、キヤバレエ・カロッサルルの舞台と、客席とであった！夢遊病者のようになって、真名子工学士は、そのキヤバレエに通いつめたが、遂にハンナは居所も明かさず、ただ、卓のそばにきて、わずかにひとことふたことを交すだけ、その上、ハンナのヒモとも見える男が、始終、つき切りの有り様で、真名子氏は、ただ、徒らに焦せるばかりであった、と言う。

そして、ある寒い七月の半ばの夜、相かわらず憑かれた様にカロッサルに足を運んだ真名子氏の眼に、ハンナの姿はなく、給仕の告げるには、けさ、彼女は、自動車事故で亡くなりました……………。

給仕に、いくら金を握らせても、遂にその居所は、判らなかったのである……………。

それから、まだ、何ヶ月か、真名子明氏は、放心のまま、た

だ、ハンナの思い出に生きるため、ただそれだけに、カロツサルに夜毎を通い、明け方まで、その面影を偲んでは、ひとり哀しく帰宅していたのだという……………。

……じつさい、あの時は、どうしてあんな気持になっていたのか、自分でも判りません。……男のくせに、しかも、いい年をして、昔の初恋を想い出して迷うなんて……いや、おはずかしい次第で、面目ありません……。

真名子明工学士は、そう私に答えて、淋しく淋しく、笑うのであった。

みどりの片恋は、遂に「片恋」に終り、彼女は現在では、ほがらかなものである。

真名子工学士は、それから一年程して、本社に重役の一人となつて帰り、原節子に似た奥さんも、可愛い子供達も、今頃は、東京で、たのしく、たのしく暮していることであろう。

《終》

銭

「きれいな空だな」

露店用の戸板、台、木箱の上に、山と積んだ野菜を背に、カミニヨン（貨物自動車）の後部に、うしろ向きに木箱に腰かけた老年の日本人夫婦の夫の方が、ポツリと言った。

並んで腰かけていた老妻は、おどろいて夫の顔を、早朝のうすあかりの中にすかしてみた。

夫の良治が、そんな言葉を口にするのを聴くのは、始めてだった。「人間も……人間も……あんな空の様に、きれいだったらな……戦争も、裁判も起るまい。」

つぶやくような、夫のひとりごとだった……。

― 何か、はっと胸をつかれ、妻の千代はカミニヨンの後枠の上に、冷めたく湿った夫の手を探った。

「―― あんたは……また！ 思い出すんぢや、ないよ！」

「判ってる……判ってるよ」

夫は、やさしく答え、妻の手を静かになでた。二人は、そのまま、しばらくの間、互いの心をいたわり合う様に、黙っていた。

まだ、半ば眠りから、醒め切らない街の家々が、うすれかけたネオンの灯と共に、二人の左右を、後方に流れてゆき、時折まだ、まばらに客をのせた電車が、物凄い響きと共に、びっくりする程近く、すれちがってゆく。

暗い物蔭や、ガードの下などでは、強い光線を、ぱっぱと閃め

かせるが、あとはスーと暗く前燈を消して、車は注意深くゆつくりと、馴れた方向に走る。

ゆさゆさと野菜が時折揺れ、二人の首筋に露滴がおちた。

新車を六ヶ月程、使い馴らしたので、乗り心地は悪くない。野菜自動車には、二十年の経験を持つ伯人の運転手は、片手で軽くハンドルを抑えたまま、片手探りにシャツの胸ポケットから、「コンチネンタル」の袋とマッチをとり出すと、器用に一本を袋の角からふり出して口にくわえ、頭で風を防ぎ乍ら、上手に火をつけ、ひと息ふかく吸い込んで、濃い煙を吐き出した。

夜は、野菜自動車の後方から次第に明け始めてきた。

夜気に湿った野菜や戸板や、なお、それよりも重く、うち湿った日本人の老夫婦の心とを乗せて、野菜自動車は静かに街を、すべる様に行く。

運転台の伯人は、昨夜、妻が、六番目の男の子を安産したのに気をよくしているのかねてから考えていた名前のうち、どれをつけようか、と思案し乍ら、ハンドルを動かしている。

ジュセリーノか、ジャニオか、アデマールか。

後方の空は、益々明るく赤味を増し、老夫婦の顔も体も、朝陽をまともに浴びて真赤にみえる様になる。

街は、次第に朝の活気に満ち始める。

牛乳車、パン車、パトロール車、客を乗せて停車場に急ぐタクシー、朝帰りの自家用車、リオから、パラナから、或いは北のバリアあたりから、サンパウロを目指して、夜通しやってくる泥だらけ埃だらけの車体一様に荷物を満載した大型貨物自動車は巨大

なタイヤを疲れに軋ませ乍ら街に入ってくる。

まるで、地の底からでも、湧き出す様に、際限もなく、あとから、あとからと、続いてくる車、車、車

それが、まるで、追い駆けっこでもしている様な気忙しさで、同じ方向に流れる。

巾の広い大通りに出ると、前夜、市の撒水車に洗われた舗道は黒い皮帯の様に艶々と光り、無数の車がその上をすべってゆく所は、まるで、大きなベルト・コンペーアが、車を載せて動いている様な、鎖覚をさえ、起こさせる。

しかし、毎朝見馴れている人々は、格別それを心に留めたことはない。

同じように街の景色も、どんなに空が美しくしかろうと、雲が美事であろうと、それを鑑賞するゆとりは心がない。

みんな、生活に忙しいのだ。

ただ、今日一日の『儲け』のことと、『明日もまた』の一念が、あるばかりである。

だが、今朝の良治はちがっていた。

「―― やつぱりお父さんは、良明のことが、忘れられないんだよ」

千代は、そう思うと、急に夫がいとおしくなり、並んでいる夫の横顔を、近頃急に白髪としわの多くなったのを、しみじみと眺めるのである。

フエイラ（朝市）は、サンパウロ市の名物でもある。この大サンパウロの、膨大な人口を賄なう一切を朝の間の五時間で商なう、

最も市民生活に密着している人々は此の五時間を、生命として働らく。朝市の最も白熱する時間は、午前八時から十時までで、この時間は、群集に沸騰し、喧騒をきわめる。

そこに入り込んだ人々は、例外なく、みづみづしい野菜や果物の魅力にひかされ、食慾と味覚のとりこになり、ツイ、知らず識らず買ってしまう。買物かごは重くなり、財布は軽くなる。

ラランヂヤ（オレンジ）、桃、杏、梨、れもん、栗、柿、ぶどう、水瓜、アバカシ（パイナップル）、など、その季節々々の果物は、それぞれの屋台の上に新鮮さを競い誇るかのようにうづ高く積まれ、さまざまの呼び声や叫声、子供の泣き声、犬の啼き声などもまじる一切の雑音が、人々の頭上に渦を巻きあらゆる階級の人間が、犇めき合う。

果物、野菜の山は、こうして、三時間程の間に、みるみる崩れ、物を買う慾望を充たした人々は、一種の安堵を顔に表わして朝市を出る。

良治も千代も、汚ない紙幣の舞う中で、ぐったりする程両手を動かしつつけていたが、十一時になると流石に雑音も、薄れ、気の早い者は店仕舞にとりかかる。

大方は、売れつくした戸板の上には、屑野菜が、ほんの少し片よせられてあるだけ、一体、いくら売りがったのか、あまりの混雑に見当も着かないが、このぶんでは、今日の儲けはまず充分と、目算した途端、急に咽喉が乾き、空腹を感じて来た。便所にも、行きたい。両手の指は、まっくろに汚れているが、洗う所とてない。しかし、馴れば平気で、汚なさも覺えず、立ち売りのパステスやコロッケをむさぼり食べる。

節約家の良治夫婦は、いつも家から、熱い珈琲とサンドイッチも用意してきているので、魔法瓶から、濃く香ばしい珈琲を、アルミのコップに注いで、ゴクゴクと飲み乍ら、良治は言った。

「よかったなあ、今日も降らなくて」

「だけど、明日は怪しいよ」

「　　こう暑くちゃね、と云い乍ら、まっくろに汚れたタオルで、首筋から顔を拭いたついでに、千代は埃の溜った頭髮に指を突込んで、ごしごしと搔いた。

もう一と月でお正月だ、　　そう考えると同時に、今日が十一月の二十五日なのに気付き、千代の心は急にスツとかげった……。

独り息子の良明を、『勉強のため』に日本へわざわざ帰したばかりに、『大東亜戦争』に兵にとられ、南方の海域で、輸送船もろとも戦歿させ、戦後、その公報をうけると間もなく、今度は七年越しの裁判沙汰になっていた土地問題に敗訴となり、折角、骨を折って開拓した植民地を、他の十数家族の日本人達とともに、泣く泣く捨て去らなければならなかった……。

故郷、熊本県、球磨川のほとり、猪鼻の山里を出て以来、良治夫婦の念願は、伯国で、『大地主』になることであつた。

二十八才の血気旺んな夢を、移民船まにら丸に托して、妻と、五才の長男良明とを伴なつて、渡伯以来奥モディアナの石塊多い耕地を振り出しに、良治夫婦の人生双六は、いつの時でも激しい労働と苦難のうちに、転々三転した。

マリリア奥の大森林を開拓して、同志十数家族と共に、新らしい

植民地を造り、入植して、やっと落ち着いたと思うと、地券の不備で舊い地主との争いが始まり、結局七年の裁判の末、敗訴になった。

日本人植民者らは、みすみす大金と莫大な労力とをかけてわがものとした土地をすてて出なければならなかった。

愚直な日本人に開拓させ、うまうまと一たん売りつけた土地をタダで取り戻した地主は、

「おれは君達の土地ならば欲しいとは思わんが何しろ裁判所がおれのものと決めてくれたのでな」と言った。

がっかりして、慣満やる方もなく、悲憤のうちに泣く泣く土地を捨ててサンパウロに出てきた良治夫婦を待っていたものは、戦後、再開されたばかりの『日本総領事館』に来ていた、『良明戦歿』の公報であつた……………。

一九四四年十一月二十五日、南方××の海域に於て、輸送船と共に戦歿……………そして、その、『輸送船』の名は、『まにら丸』であつた！……………噫……………。

五才の良明を伯国に運び、十八才の良明を一九三八年七月末サントス港から日本へと運んだ商船まにら丸は、ああこんどは、南洋のくらい海に良明を次元の違う世界へと運んでいってしまったのだ！

それからの良治夫婦は、すっかり気持が、以前とは変った。

もう、百姓は見るも厭、大地主の夢も希望もマリリア奥に捨て去った二百アルケール（五千町歩）の土地と共に消えた。

土地は勿論、法律にも人間にも絶望し、不信を持つ良治夫婦の心が、一途に『錢』に傾倒してゆくのも無理ではない。

奥地の百姓が、大都会に出て、まず出来るもの、と言えばフエイラ商人より、無い。良治夫婦は必死にもそれにしがみついた。

商売は面白く、またよく儲かった。

『錢』は、日に日に貯蓄出来、集積された。

サンパウロ市内の大きな朝市に、毎朝早くから出ては、午後の上時頃、家に帰ると、昼食をとるよりもまづ『錢』を算えるのが夫婦の最大の楽しみとなった。

どんなにきたない、悪臭のしみた小額紙幣でも、その手ざわりはうれしかった。有り難かった。『錢』を算えている間だけに、すべての生き甲斐があるようであつた。まったく！算え終った紙幣を、大小の額に区わけして束ね、仏壇のうしろの秘密の木箱にしまい、それから手を洗って千代は昼飯を作り、良治は翌日のための仕入れの計算をする、これが、日課であつた。

八年間の、フエイラ商人の利潤は五トン積みの貨物自動車三台を購ない、フエイラの屋台も、使用人をつかつて三ヶ所に持つまでに発展したが、夫婦の質素な生活は変らず町のはずれのボロ家を借りて住み貨物自動車は庭一杯に屋根を造つて、そこに入れた。

『人間』を信用しなくなった良治夫婦が、銀行を信用する筈もなく巨額の金は、みな高額な紙幣にそれとなく換えて、皆、自宅に蔵つ

ていた。

「五コントの紙幣が出来るというか。早く出来ると、蔵うのに、ラクになるなあー」

「もうぢき二万コントだね」

「百万にしたいな」(百万コントスは百万ドル相当)

この会話を交す時の、二人の表情は、喜悅そのものであった。

或る日、マリリアの裁判所から、紙が来た。見ると、敗訴したので、七年間の裁判費用何十コントスを払え、という紙であった。「盗人に追銭とは此の事だ。おれは絶対に払わんよ。二年でも三年でも、牢屋に行った方が、ましだ」それなり、放つてある。

かつて、開拓の同志であつた人々とも、会つこともない。

サンパウロという、四百四十万の人間の詰まっている大都会に、良治夫婦は、唯二人だけであつた。

知人も友達も、わざと作らず、フエイラ商人の仲間とも、近所の誰彼れとも交際せず、いつまでも、どこまでも、まったくの、唯二人きりだった。

錢だけが、五十を越した二人の、此の世での唯一の知己であり、友であり、據り所であり、支柱であり神であつた。

錢勘定をしている時、或いは貯った金のことを考えている時の、二人の心には、ゆく末のことも、お互いのことも、何のことも浮ばない。ただ、この金がもつと増えればよい、と思うだけでその思いはまた切ない恋ごころの様に、強く二人の胸をしめつけるのである。

この執着！

「お正月までには、二万コントになるね。そうしたら……」

「そうしたら、何だ？」

「ごちそう位、作ろうよ」

「バカ！　したら、金がかかるぢやないか！」

そんな問答も、くり返された。

粒々辛苦の果てに、やっと念願の叶った「大地主」の現実はあとかたもなくなり、ひとり息子は幻のみとなり、いまこの老夫婦に現実にしつかりと抱いていられるのは、「銭」だけである。

「出来れば二万コントにして、正月をしたいものだ」

いつも、そればかり言う良治が、その日は帰宅すると、良明の写真の前に腰かけ、黙然と、いつもの様に銭勘定も始めずに座っていた。訝かった千代が、そつとその傍にゆくと、良治は、涙の一杯溜った眼で、妻をかえりみて言った。

「おれは、銭も、欲しくなくなった」

千代は、しばらく茫然と、夫の顔をみつめていた。（この人は、気が狂ったのか……。）

《終》

おいちよゆるせ

七月の、かなり寒い日であつた。

暖国ブラジル、と言つても、サンパウロでは一年中温かいわけではない。

やはり冬は、此処にもあつた。

殊に、標高七百米、と云われているサンパウロ市近郊では、年によつては降霜を見ることさえ、稀ではない。

秒間ごとに、膨張してゆく大都市を消費市場に持つこれら近郊の良地は、あらゆる種類の野菜栽培に、美事な位、活用され、汽車、バスの沿線、必らず、「日本人此処に在り」と声なく、勤勉な人種
の存在を叫んでいるのは整然とした畑地で、淡青、濃青、淡緑、濃
緑、或いは黄緑のじゅうたんを伸べ、点景の人物は、きまつてまっ
白いシャツ、麦わら帽、或いは頬被りの日系人達が、色のくろい
人間達を指図したり、共にシシとして働らいている。

指図され使傭されている人々には、伯国の、北の方の素朴で鈍重
な黒人や半黒人が多かつた。

これら点景の人物達は大ブラジルの発展のためには重要欠く可か
らざる要員、発展の基底となる高価値を持っているのであるが、
軽薄な町の人間達は、いちがいにカイピーラ（田舎者）と呼び、「百
姓」と軽視するのは、どういうわけか。

トラクターが、ノロノロと動き、大地を眠りからゆすぶり起し、そ
の肌に大きな爪痕をつけ、種蒔機が浅く深く、やがてみどりに息

づく作物の一粒、或いは数十粒を、地の肌にしし入れて行く……。

ある時期には、此のひろい畑地に、沢山の人間達が、汗にまみれつゝ、収穫に忙殺される。トラックは、乾いた土を蹴って何台も唸りをあげ、美事な畑の産物は、何百万、何千万という金額に替り、翌年には、さらに何倍かの面積となつて種を蒔かれるのであつた

上等な生産品は、作る人は喰えず、喰べる人は作らない。これが原則の様であつた。

或る時期には、畑は休養の期間を与えられる。体にメスを入れられた患者が、じつと回復を待つ様に、肌に鋤を入れられた大地は、悠久の空の下に、活動の時機を待ちつゝじつと身を横たえ、と言つた感じに、鎮まり返っている。

整地された畑が、数十日の安息を与えられている時でも、しかし人間達は、やはり忙しい。他に、眠りから覚めて、生産に入ろうとしている大地があるからだ。

畑の涯の、丘陵地帯には、白壁、赤煉瓦の何か傲然とした家が、一群の樹木を背景に遠望され、夜は、自家発電のモーターが闇をふるわせ、朝は井戸ポンプの金具が朝陽をうけて、時折、キラツと光る。

畜産品評会で、一等をとつた美しい白黒ぶちの乳牛が、横腹を立ち樹の幹にこすりつけ乍ら、モウー、と、やさしく主人たちを呼ぶ時であつた。

その一軒を中心に、赤煉瓦の壁の小さな家々が、数戸、或いは十数戸、小さな群落を形成していた。白壁と、赤煉瓦を露呈した壁

の差が、主人と雇傭者との差のようであった。

白壁の家の前に、その日は週日であるにもかかわらず、黒っぽい服装の老若男女が集まり、何か、肅然とした様子で、静かに停ずんでいた。

私語は交わされるが、誰もあまり笑わない。時々、その人群れは、動き、家の内に、出たり、入ったりした。

やがて、朝陽が、次第にその光度を強め、午前十一時の光りとなった。白壁の家の屋根からは、炊煙が

しきりと上り、庭前に群立する人々の面上に、ある倦怠が、あらわれた時、突然、遠くの方から鋭どい自動車の警笛がきこえ、人々は、ハッ、として一斎に、うしろの州道の方を向いた。

家の内部からは、眼を泣き腫らした若い男女が数人走り出て、その後から、笑ったり、はしゃいだりしながら、五人程の幼童が、ころげるようにかけて出た。

州道を、いま、こっちに向って驀進してくる大型乗用車の新らしい金具や車輪が眩しく光り、しかし、泥道に難渋した痕跡をとどめて、そのすばらしい新車は、長い車体を、庭前にすべり込ませた。

ホッとした、という形容が、この時ほど、揃って皆の顔に、深刻にあらわれたことはない。

「やあ！ 遅かったぞう！」

「どこに、居たんぢやあ？」

「すげえ車を、買ったのう」

「おいちさんが、だめだったぞよ」

さまざまのことばが、いっぺんに、一九六二年型、アメリカ製の

新車に向って叫ばれるうち、車の扉が内側から、乱暴につきあけられ、みなりと靴のすぐく上等な、体格のよい、初老の男が、足から先に、よろめき乍ら出てきた。

五十五才の、精力的な、典型的な、近郊農業家の型の男。眼が、血走っていた。町で遊んで、何も知らずに帰ってきたところ、家の前の人だかりに、予感が、にわかには騒ぎ出したという表情である。

なぜか、その時、読経の声が、一段と高くなつたのは、その男を早く早くと呼んでいる様にも思えた。

集まった人々には、ろくにあいさつも返さず、家の奥に駆け込んだ男の鼻をうったものは濃い線香の匂いであつた。

読経の声は、僧は唯一人きりなのに、まるで数人がいるかの様に、大きな音で、男の耳を貫ぬいた。

正面に安置された棺前には、花や供物があり、香典の封筒が、うず高かつた。

市中の派手な葬式に見られる贈花は、まだ此の辺の人々は気付かないのか、何事も、実利一点張りで生きてきた人々は、心が、土地を購入することにのみ向いているので、その様な虚飾は、ムダなこととして、思い付かないのか。

また、田舎では、花屋も、なかつた。

チーン、チーンと読経の間に鳴る錘の音は、今更に、人々の心を、「諸行無情」……と言つた感傷に誘い、人々は、あらためて、死者生前の、他人から見れば、「何の楽しみ」もない、たゞ、粗衣粗食と労働と、子供を生んで育てた生涯と、その日々を思い出すのであつた。

さすがに、実子達は、母の死に、憔悴し、涙に濡れて、唇はふる

えた。タオルを顔にあてて嗚咽する嫁もある。
ふしぎな矛盾がひとつあった。

本来は、此の一家はカトリック信者の筈であつた。息子達夫婦や、大勢の孫達は、みな、受洗者である筈……。が、考えてみると、親達だけは、まだ、そうでなかった。

これは日本人コロニアの都ひを通じて共通に見られる奇妙な錯誤であるが五十六十年配の「親達」は、みなまだ、依然として「日本の」神仏に倚りたがつた。郷愁のさせるわざか、慰し難く、せつない望郷の、潜在意識が、それを、敢て、させるのか。

仏式による葬式は、哀れな母おやのいまわの願いであつた。息子達は、父は町に遊んで帰らず、困却の末、その願いを果たしてやりたい一心で、ジープを駆ってサンパウロ市にゆき宗派も何も考えず、途中で会つた日本人に、「なみあみだぶつのお寺は、どこでしょう?」と、きいて廻り、その、「どこかのお寺」に、いきなりとび込み、驚ろいている坊さんを、やみくもに頼んで、ジープに乗せて運び込んだので僧侶は死者生前の俗名も知らぬので、何度も訊ねた末、用意してきた位牌に戒名をしるした。

死人の年令をきき違え、享年五十才と書き、五十七と判つて、あわてて七の字を小さく横に入れるのである。

戦後、日本から渡来した、大学生の若い僧は、読経が、上手であつた。よく透るバリトン調で、緩急も高低も法に叶い聴く人の心を、莊重な悲哀と感傷に誘う。

しかし、聴聞(ちようもん)している人々には、経文の意味は判らず、頭をたれてきいている最中不意自分の畑のことが気になったり、自宅にねている病人のことや、組合に返すべき借金の事、蔬

菜の売り上げを計算すべきことなどを考えたりした。

読経は長く、また、初めての壇家とも思われるので、僧侶はエ向（えこう）も特別丁寧にした。この憎は、は、あまり急いで駆け込まされたので、此の家の土間の正面にまつられてある聖像や聖母像に気のつくひまがなかったのである。通されたところは、親達の室であり、そこには簞笥の上に日本の神仏が飾ってあった。あとで、聖像を見たら、少しばかり途惑うに相違ない。

読経が、愈々佳境に入り、憎も会衆も無心にこれに酔っていると、突然、われ鐘のような大声が、一同をおどろかせた。

「おいち！ ああ。おいち！ 許してくれーい！」

おどろいたことに、棺前に読経している僧を、つきのけると、あるじの巨体が躍りあがる様に棺の上にかぶさり、怒号に似た号泣が起った……。

おいち、おいち、と取り乱した如く、棺に両掌をかけてゆさぶる、あるじの泣喚は、真実に人々の心に迫り、まず、息子達が一層激しく涙を流し、女達は嗚咽した。

今更になって、などと考えるものは、最早居なかった。

こんなに悲しんで貰ったら、おいちさんも、さぞ、成仏出来るだろう。―― さつきまで、妻の病死をみとりもせず、町で遊んで帰らぬあるじを、きつく非難していた人達も、そう思った。三十五年前、家族構成で渡伯の都合上、渋るのを、無理にねだって結婚したおいちは、良人より二ツ年上であった。彼女が、それ以来、五十七年の生涯を閉じるまで、終始、働らきづめできたのは、しかし、此のひけめからでない。

畑に出て働らくだけに生き甲斐と、無上の悦びを感じる、典型的

な日本の農婦に生まれついたおいちには、畑で働らくことが何よりの楽しみであつたから、どんな時でも、不平を洩らしたことはない。

「奴隸のような」と何も知らぬはた目の者が思うおいちの生活も、本人にとっては批判のほかで、彼女は癌で病逝するまで、大勢の雇人達と畑に出て、裸足で鋤を取り、草を除つた。働らいて居さえしたら、そこには何の苦悶もなく、むしろ、無限の愉悦があつた。

たゞの日雇労働者から、借地農となり、さらに地主となり、農産物の収入も、十、百、千、万クルゼイロスと上昇し、雇傭人も常備五十の人数となり、トラクター、貨物自動車、ジープ等は、合せて十台に近く、豪壮な居宅には、自家発電の灯が煌々ともり、ラジオ、ヴィクトロラ、テレビ、洗濯機、と、近代文化農家の範を示す生活となつても、彼女について変つたことと言えば、メリケン粉の袋で作つた衣類が、トルコの店で購う丈夫な木綿地に變つた位で、殆んど町に出ることもなく、夫や息子達からの贈り物の金計時や手提げは、箆笥の底に藏われたままである。

粗食と労働にのみ明け暮れたおいちの腹から、どうして此のような優良な息子達が生れたかと思うほど、屈強で、温順で、天性農業の好きな息子達に、仕事は一切任せ切り、あるじは近頃、殆んど家に帰つたことはない。最近では、また、すばらしい乗用の新車を買ひ、そのくるまは、町の紅燈の家々を訪ずれ美酒佳肴、俗世の歡樂は、勤勉な農業家を有頂天にするのである。

一切の金の出入りを、家長がまだ握つているという都合の良い立場が一層それを容易にしていた。

青、壮、中年時代までをあまりに勤勉に、まじめに過してきた男の、晩年に必らず一度は陥る陥せいであり、おちることは、何かの宿命のようであつた。

おいちは、夫の行動は全然知らず、金の消費高も、知らない。日々、集積される莫大な生産物、年ごとに増加する地積、大勢の家族と雇人、その女あるじとして多忙であり、益々おいちは働らいた。

あるじは、ジェット機で、日本へ、何度も飛んだ。戦後の日本の遊びも、あます所なく、知り尽して帰伯すると、その度に彼は脱皮したように瀟洒な、垢ぬけた「紳士」となつて行つた。

癌。それも進行性の早い癌で、おいちは遂に倒れたが、臥床すると、急に、彼女は故郷を思い出すのであつた。

「ねえ、おとっさん。お願いだから、わたしも、一度、日本へ、つれて行つて下さいよ」

その身がいま、夜を日に次いで死の街道を急いでいるとも知らぬ、妻の言葉は、哀れであつた。

「うん。今度こそは、つれて行く」

良人の答えも、きまつていた。

が、相かわらず、大型高級車は、料亭、ボアツテ（キャバレ）海岸、温泉境、と動きまわり、金は惜しげもなく、そうしたところの女達をうるおすのであつた。この金の撒き方は、一種の、社会奉仕のようであつた。三十五年間、たゞ、働らきつづけ、いまは、死の床から、ちつと彼を見あげている妻の姿は、そういう時、忘れられていたようである。彼も、三十何年間を、妻に劣らず精励

刻苦してきたのである。金を使う権利は大ありだ。いわば、成功者！

長い間の、あの、みじめな労働！

あの、貧しい、情ない生活！

――いまになって、少し位、おれがぜいたくをしたからとて、それが、何だと言うのだ！

誰にともなく、そう力んで、今日まで、公然と家をあけていた。ブラジルにも、富裕な人間の享ける歓楽の世界のあったことを、はじめで、知ると、そう言う身分に、とつくになりながら、それを知らずに来た日々が惜しまれ、いちづにそれを遂うたのであるが――妻は終えん……………。

いまこそ、妻の、在りし日の姿が、彼を、一本の巨木の如く、彼の一家を磐石の如く、育て、築きあげるために、ただ、それだけにただそのみに生涯を、肥料となり、捨て石となって、甘んじて終ったおいちの姿が、何か、神々しい像となって、泣き乍ら棺につかまっている、あるじの心に映り、それは実に際限もなく、巨きな像となって、あるじの心に、いつまでも、いつまでもゆれつづけていた……………。

《終》

マニラ丸異聞

ツイ先日(の)二月十一日に、「マニラ丸同航会」が御座いました様ですが、早いもので、もう渡伯致しましてから三十年になります。……ほんとうに、夢の様で……。

横浜港を出帆致しましたのが、左様でございます。昭和△年、つまり、一九××年の十×月×十日、神戸出帆が×十×日、とおぼえて居ります。

それから、まる五十幾日、長い長い般旅で南支那海、馬來半島、印度洋、南阿弗利加を経由致しましてサントスに入りましたのは、たしか、二月十一日、ブラジルは丁度雨期に入って居り霜雨の煙る朝で、折柄ブラジル名物のカーニバルのどんちゃんさわぎが、街中に、溢れている時で御座いました。

不安な様な、楽しい様な、悲しい様な、嬉しい様な……思えば、かずかずの思い出を、はじめての船旅に残す人の多かったこと、でございます。

三十五年後の一九六四年二月十一日がちょうど、時と同じカーニバルの祭日で、しかし、インフレのせいか、此の年の街の何と淋しかったことでしょう。三十五年前のあの無茶苦茶な路上での、どんちゃんさわぎは、とうとう此の年になって、火の消えた様にはなくなり、しかし、各クラブでの舞踏会は、反対に年毎に益々盛んになっている様でございますが。

ふしぎなことに、最近の出来事はツイ忘れ勝ちなのに三十五年前のあの上陸の日のことは、何もかも、ほんとうに昨日の様に思い出されます……………。

途中の景色も、ホンコンの夜景。サイゴン河の朝もやの中に、にじむジャンクの灯のいろもー。

シンガポールの、椰子の葉をなびかせてあらあらしく、そそぐ、あの夕立の雨のいろ。スマトラ沖の海豚の群遊。ゆくゆくはあの、どろーりとした印度洋の油の中を浮いている様な――、そして大きくゆるい波のうねり、まっ赤な夕雲。ひねもす入道雲の白い大きな塊ばかり見てくらす十幾日。たゞ暑いばかりで、船脚ののろいことー。

もう、この頃から、全船千名にあまる移住者。あの当時「植民」という雑誌の内藤先生が御命名になりました。「パイオニア（開拓者）」達は、珍らしかった船旅にも、もう、飽き飽きし始めまして、福岡県浮羽郡何々村出身の誰某と、宮城県伊達郡何々町出身の誰女さんとが、いつしらず船尾の宵涼みに、話が長びくとて、福島県磐城郡の独身青年が、船内発行の騰写版日報に、「風紀衛生係」は何をしているか」などと投書しましたのも、このじぶんで――

。三度々々の麦の御飯も、馴れてみればまことにお美味く、食べては寝ね、寝ね飽きては煙草ばかり喫う朝、昼、晩。古雑誌にもひるねにも、雑談にも飽きて、たゞぼんやりと海を眺めている人。花札、麻雀、トランプ、碁、将棋に時を消すよりほかに用のない、あまりの無為、退窟さに、モツタイナイ、と腕をさすってかこつのは、お百姓出の津気な人々。

消えてゆく鍬ダコを眺めては、今更捨てて来たふる里の田畑を恋

しがり、大阪で商業をなさっていた人々は、北区南区のあの雑沓の街々を乗り廻したあの古自転車のペダルの踏み心地の重かったことなどをも、なつかしく思い出したり致します。つとめ人だった家長さん達は、朝々葱の味噌汁のげつぷと共に、沢庵の汗を口中に噛みしめ乍ら、つかまっていた電車の吊革の脂肪染みた感触を、潮風にくろずんでくるわが掌の中におしみ、教師出身の人々は、横柄な学務委員や、村長や、郡視学達の、憎たらしいなまづひげなどをさへ、今はなつかしく瞼に浮べたり致します。

まだ見ぬブラジルに、ただただ撞がれごろの一途から、単純に希望に張り切っている独身青年には、忘れ勝ちな故郷へのつながりも中年の人々となりますと、人生の六、七、八分を過ぎてきた土地だけに一層、忘れ難く日本に残してきた子や親の顔などを灼けつく様に回想して見たりするので御ざいます。

こうして、千にあまる人々の、様々な思いや夢や希望やかなしみなどを、その生命と共に積み載せて、一万噸の黒い巨船まにら丸は、ブラジルへ、ブラジルへとひたすらに針路を取って居りました。

セイロン島の椰子の大樹の蔭くらきあたり、ビンロウの赤い実をかむコロンボ娘の褐色の露骨な裸の魅力に、つい旅情をそそられて、上陸するや否や、言葉も判らないのに街々を彷徨い色硝子の簾まった扉のある怪しげな家を探しあててソツと内部に入り、やるせない欲情を充たして帰船する幾人の若者もございます。ふるさとの八重山列島に、いとしい恋男を残して、心ならずも父母に連れられて渡伯する琉球のおとめは、月なき熱帯の海上遙か、忘れ難い彼の人の面影を心に描いては、船尾の欄干に、冷めたい涙

をおとす幾夜さ　―。……………小さな社会の縮図のような、さまざまを、上下の甲板に載せた船は、こうして昼夜をわかつたえず機関の音を船底から響かせながら、いつしか入るアフリカの領海……………。

その海のいろのまた！何という、深い碧さなのでございましょう……………。おちれば肌も染まりそうな……………そして、檣上高く、ブラジルでも仰げるといふ、あの南十字星が、…何故か、白々と冴えわたって……………三ヶ月のいろも仄々と、この時分から、涼気は肌に感じられてまいります……………と、間もなく、南阿のダーバン港で……………。暁闇のマダガスカル沖を、船がよぎります時、右舷前方に長く淡く横たわって見えますのが、淡路島に似て、全島丁字の花香る仏領マダガスカル島の陸影。これを指呼のうちに過ぎつつ次の日は、いよいよダーバンでございました。

ダーバン港。南阿、英領植民地。人々はずいぶん久しい以前小学校の地理の時間に習ったきり、忘れていた地名を、今更、改ためて、思い出したり致しますが　―。さて、これからが本筋に入ります。

○

赤と黄と、クリーム色。青とうす緑と、白と黒と褐色の町。ダーバン。赤は、屋根瓦、黄とクリームとは壁。青とうす緑とは草木。特に濃みどりは街路樹のいろ。それがまた、ちょうど、英国女皇が戴冠式のみぎり、バッキンガム宮殿前の広場に整列するあの、緑と赤の槍騎兵の軍帽そっくりの形で、円筒形に、刈りあげられて居ります。樹々の並木の、美しいこと。白と黒と褐色とは人間

の皮膚の色。空はあくまでも澄明に、大気もさわやかに街の騒音を包んでおります。船と船。マストとマストの間を、巧みに縫いつつ、大きな翼を、はためかせて飛ぶ鷗。背はくろく、腹毛は白く人の世の何かの象徴のようでした。

○

「ねえ。貴方。それでは、あんまり子供達が、可哀相でございすよ。もう、二十日あまりも、陸の土を踏んでいないのですもの……毒ですわ。ちよっと位なら、また、私たちなら、かまわないでしょう？」 寛やかな部屋着の袖口から、まっ白な、なめらかな手を差し伸べて、夫領事の珈琲茶碗に、コーヒーを注ぎ入れながら、美しい微笑を眼もとに湛えて、みね子夫人は、甘えた声を出しました。

「……………うむ。……」重々しく、呟やく様に口のうちに応えたまま領事山北清蔵氏は、むつかしい顔を、一層厳粛にして、折角の珈琲も、飲もうともなかりません。このまに丸でブラジル、サンパウロ総事館に、新任の晴れの船旅に在るお二人でございました。福岡裁判所の、雇書記を振り出しに、刻苦勉励、漸やくにして領事試験に及第した人で、此の、栄達のかげには、むろん、みね子夫人の実家の金が、内助の功をおさめていますために、夫人は、つねに家庭に在っては、夫、清蔵氏よりも優位に在り、そとでは非常にかめしい山北氏も、夫人の前では一言半句もなく、「まあ、ママのいいように、やるがいいサ」いつも、最後は、此の捨てぜりふで沈黙、退却する山北氏でしたが、

「だけど、ねえ、ママ。」と、はじめて山北氏は、当惑の表情と共に、口を開きました。

「それあ、子供達が、上陸したがるのも、無理は、ないがね。……しかし、……困るんだ……何しろ 此の町にいま、天然痘が、流行しているのです、入港の諸外国船からの子供のの上陸は一切禁止、つてことになってるんだ相だからね。ダメだよ、それア……」
「……でも……それは、三等の人達だけぢや、ございませんか？」
夫人は、やはり、香港でも、何かの事情から、一等船客だけ上陸許可だったことを、思い出しました。

「いや。今度はソノ、一等も三等もないのだ。外国船からの客は全部子供だけ上陸禁止。殊に七才以下のこどもは厳禁だ相だよ」
「まあ。バカにしていますわねえ。こんな、アフリカの黒ん坊たち、—— 生意気なこと」夫人は、痛く御立腹の御様子で、砂糖を入れ忘れた珈琲をひとくち、グツと呑んで、おお、とその苦さに顔をしかめました。

「黒ん坊が、そうするのぢやないよ。英国の出先官憲が、そうするんだ……此処は、英領南アフリカ植民地だからね」
幼ない子にでも訓す様な口調で、やさしく、領事は地理の先生みたいなことを申されました。

「ね。パパ。私、上陸しますわ。イギリスの役人が、何か申しましたら、私が、立派に応侍して、やりますわ……こんな植民地の、木っ葉役人のくせにして、私達を、まるで三等船客並みに扱かうなんて、—— ずいぶん失敬ですわ」のみさしの珈琲茶碗を、傍わらの小卓の上に置くと、夫人は、もう、起ち上っております。

「私達は、いやしくも、日本帝国を代表して、外交官、として旅

行しているのぢやありませんか、」

丁度今の日本の東京の婦人代議士そっくりの権幕で、夫人は、傲然となさいました。二十いくつも年上の、気の弱い山北領事の眼と両掌とが、あわててそれを抑えて、

「ま、待て、待ちなさいよ、ママ……。困るんだよ…あんたはいいが…もし、後で問題になったりしたら、儂ばかりではない、船の連中にも、迷惑が行くからね…。それに、天然痘も、あぶないし…。止した方が、よからう…。」

「あなた！」突然、みね子夫人の美しい丸顔が、鬼女のように凄みました。いつも良人を威嚇する時のあの表情に変わって、

「あなたは！こんなアフリカの、…。植民地の役人ぐらいが、そんなにコワくていらっしやるの？！」（だから、あなたは、五十いくつになって、やつと今、領事なのよ） 致命的な、毒矢にも似たこの毒舌を、言葉にはせず、わざと表情に出す夫人でございました。

「でも……。だからサ！天然痘が」

「天然痘？ですって！貧乏人の子供達の、罹る病気ですわそんなもの！」

この一言で、完全に夫の反対を封鎖した夫人は、ベルを押して、室付のボーイを呼び、

「あの、ボーイさん。うちの子供達に、外出の用意をさせなさい、って、ばあやと藤田と、みきやにそう言ってちょうだい。これからすぐ、上陸しますから、って」

「へ？」と給仕は驚ろいて、

「奥様、ここは、おこどもさんは誰方も上陸できませんそうでござ

ざいまっせ。先刻事務長が、何やら紙に書いたモンを、食堂の入口に貼つていやりましたで……。」

「そうよ！普通の人達でしたらね！でも、ボーイさん、私達、外交官の家族ですわ。大丈夫よ。」

夫人は、ひどく自信ありげに元気におっしゃいました。

「は？ さよでつか……。ほんなら、よろしおま。あちらへ左様、申しまほ」

給仕は手早く卓上のものを銀盆にかきあつめると、あたふたと、それを捧げて出て行きました。

夕陽が、ダーバン港の海の彼方に、まっ赤なままで、沈むころ、一日の行楽を、心ゆくまで尽くして、充ち足り切った悠揚さで、夫人が二人の幼童とお伴のばあや、書生、小間使いなどをひきつれ、意気揚揚と船上のタラップを昇り切った途端、上の昇降口で待ち焦れていた事務長の、白い海象の様な白麻服の巨軀に、遮ぎられました。

「奥さん。ああ……。困りますなあ。えらい無茶して貰って：ナゼ、わしに断わりもなしに、何で、上陸しはったん？」葉巻と一緒に、太い腹を突き出して、夫人の前に立ち塞がる大男の事務長を仰いで、夫人はちよつとたじろんだ様でしたが、しかし、ちつともさわがず、「ただいま。パーサー。……。あら、だって、いいぢやございませんの？私達だけですもの……。誰 も、どこでも何も申しませんでしたわ。いけま せんでしたの？」

「いけませんとも！規則破りです哩。無茶なさつ ては困りますわ。現に今、港の役人ぢや、という男が一人、コワ談判に、来よりましてな。あ んたの御主人がいま、サロンでとつちめら

れて あいですわ」

忌々しそうにそう言いすてると、折柄船橋の用事を伝えにきたボーイと共に、大股に船尾の方へと行つてしまいました。

三等船客達は、周囲に群れてこの間答をきいておりましたが、事務長のあたり憚からぬ大声に、やつと事情がのみこめると、自分達の子供の上陸出来なかつたいまいませが、一ぺんに晴れた様な顔付をいたしました。

夫人は、瞬間、さつと蒼白んだ様子でしたが、周囲の嘲笑的な空気を敏感に感じとると、持ち前のまけずぎらい、何を、と反撥するものが心の中に在り、一層、悠々と自室へ帰るのでございました。

「おいママ。駄目ぢやないか。だから儂があれ程 貴女をとめたのに！強情を張るから、とうとうこんなことになるのだ。来たよ……やつぱり……」

「何が、ですの？」

「港の、役人がさ！今ね、たつた今なんだが……船に、ここの港務部の監視役ぢやと言う英国人が一人、来てね、君達が禁を破つて上陸したのを確かに見た、厳禁の小児を二人までも携行して、一言の届け出もなく、上陸したのは港務部と英国官憲を侮辱した事になるって言うんだ全く一言もない。大体、あんたがいけないからだ……」

困惑を露骨に出して、領事は、珍らしく夫人を叱りました。

「……」突然、夫人は、さつと身を、良人の胸に投げかけると、その首に両腕をまきつけ、冷めたい夫の唇に、強い接吻を致しました。そして、小さな声で、

「パパ、ごめんなさいね。“パパ”と、いつものでんで、何か失敗した時に用いる最後の手を以て、懷柔策に出ました、が、この時は、よほど立腹していたと見え、領事はただ、うるさそうに顔をしかめただけでございました。

そこへ、ノックの音がして、また、さっきの白い海象事務長が、扉口から顔を出し手した。「山北さん……奴は、まだ、サロンにガンばってまつせ……しよむないサムライぢや。……」そこでちよつと言葉の調子を変えると、「あんたに会わせろつてきかんですわ。ま、とにかく、お出でを願いますわ」

南米航路をはじめての事務長は、この、我がまま奥さんの仕出かしたあと仕末に困っているらしい善良な山北氏の蒼ざめた顔をチラと見ると、「ぢや、どうぞ、ナニ、大したことあござんせんよ」と言つて立ち去りました。

○

「本官ハ、タダ此ノだあばん港ノ秩序ト規律トヲ 守ルノミガソノ職務デアリマシテ本官ニトツテハ、上司ノ指令ハ、スナワチ、大英帝国其 ノモノノ指令ト、オナジナノデアリマス。

貴官ハ、左様ニ、陳弁サレマスガ、本官ハ、マダ、上司カラ、一切ノ、外国船々客ノ嚴重ナル上 陸禁止ノ指令以外、何ノ着シ図モ受ケテ居ラヌノデアリマス。

貴官ハ、日本帝国ノ外交官云々トシキリニ言ワレマスガ、タトエ羅馬ノ執政官デアロウトモ規則ヲ 破ラセルコトハ不可能デアリマシテ、本官ハ、今日マデ貴官ガ日本帝国ノ領事ナルガ故ニ上陸ヲ許可スベシトノ指令ハ特別ニハマダ受ケテ居ラヌノデアリマス。我ガ大英帝国ハスベテノ人ニ禁ジタル事柄ヲ一個人ニダケ許

可スルガ如キハ絶対ニ至サヌノデアリマシテ、貴国ヤ支那国ハ或イハ左様ノコトモアルカモ知レマセヌガ……」何と云う、憎らしい、不礼な、皮肉をこめた、厭な言いまわしでしょう……山北領事は、こめかみが、ピクピクする程、内心憤ほりました。しかし、非は当然こちら側に在り、これに対して何が応えられましょう。長身赫顔、痩せて、キチンとした白麻服に、白のヘルメット帽を小脇に抱え、亜麻色の頭髪を美事なオールバックにした、ゲエリイ・クーパーそっくりの好男子でしたが、眼が何とも云えず鋭どいのと、絶えず四辺に眼を配る様子が大英帝国を代表する植民地の監察官としてはチョット腑におちかねるふしもありましたけれど、兎に角、堂々と官名姓氏を名乗って来たのですから、だあばん港の港務官と思うより外、仕方ありません。山北氏が、やつと何か一ト言、云おうと口を開きかけると、その男の低く、おもしろい英語が、たちまちそれをさえぎりました。何か、凄味のある口調です。

「本官ハ、日本帝国ノ領事山北清蔵氏ノミ、特ニ小児同伴ノ上陸ヲ許可スベシト云ウ指令ヲ受ケテオラヌ限り当然貴官ヲバコノだあばん港ノ港規ヲ破リ、惹イテハ英本国ノ法規ヲモ無視サレタ行爲トシテ、当然、相当ノ手續キヲ取ルコトヲ考エテオリマス。ソノ場合ハ貴国外務省ニ通達シテ併セテ　ソノ責任ヲモ問ウ考エデ居リマス。日本帝国外務省ハ英帝国植民地ノ法規ヲ故意ニソノ職員ヲシテ破ラシムルノガ通例ナノデアルカドウカー」後になって考えると、こっけいな位、バカバカしい話なのですが、しかし「外交官」とは申しまでも、外務本省詰めで、長いこと日本にばかり居り、海外へ出たのはとにかく、今度が初めて生れてはじめて

の外国旅行、外務省詰めと申しまして何もいつも英語を使って外国使臣と交歓する役目ではなくて、会計課とか、人事課とか、用度課とかばかりを歩いていて、日本語よりほかは、話したくない山北領事にとっては、この流暢な英国人の英語は、半分以上判らぬままでしたが、外務省に通達とか、規則破りとかの、重大な数語だけは、それでも耳にとまりました。小心な領事はこまかくひざがしらのふるえるのを自分でも意識した程でございました。この倨傲な尊大きわる英国の役人を、一体、どうしたら良いのでしょうか？事務長は、ナニ、いくらか掴ませれば、と言ったけれど、こないきおいで「大英帝国」を笠に着て、法規を楯にガンばっている様子を眼のあたり見ると、うかつに「袖の下」など、出したら、また、とんでもないことになりそうです。外務ずれがして居らずこのような折衝やかけ引きに馴れていないウブな山北氏は、困惑に、当惑を重ねるばかりでございました。

そこえ、給仕が、ジョニウオーカーのウイスキーとソーダ水とを銀盆に載せて持ってきました。そのうしろから、たった今、入浴をすませ着換えして濃化粧した眼のさめるばかりの美しいみね子夫人が、小柄ながら艶麗したたるばかりの笑顔でエンゼンとあらわれたのです。

「ウイリアムスン君。私のワイフです」

山北氏は、何か、ホツとして、妻を英人に紹介しました。

「オオ左様で、—— お目にかかるのを大変喜び、且つ光栄に存じます。」

彼は椅子から飛び立って丁寧握手致しましたが、大男の身の半分位の背丈しかない夫人には、英人の手の先きと、腹の辺りが見

えたきり、ふり仰がないと顔が判りません。それでも、さすが英人で、彼はやさしく傍らの椅子を夫人にすすめました。みね子夫人は、英人が、思ったより好男子で、丁寧なもの腰なのに少し安心致しました。夫人は、媚態百端で、しきりにウイスキーを注ぎました。そのうちに、何としたことでしよう。あれほど猛々しかった英人の眼が、次第に夫人の美しい顔と姿態とに惹きつけられ、彼は、チラ、チラ、と最初は臆病そうに、後では次第に大胆な視線を、夫人の上に走らせる様になりました。見ているうちに濡れてくるような、大胆至極な「男の眼つき」です。夫人は、しめた、と心で思いました。此処でひとつ私が宋美齡のように（マサカ、その時、そんなことも考えなかったでしょうが）外交手腕を、うんとふるってこの憎らしいけど好男子の英人官吏を魅了して事をおんびんにおさめてしましましょう……これこそ、外交官の、妻の仕事だわ……そう決心した夫人は、郷里長崎の或る町の実科女学校を出て、十七才で山北氏に嫁づいて以来、ずうっと東京に住み、英語も習わなかったので、夫がブラジルに赴任と決まってから、少しばかり速成の英会話を教わったりしただけで、まだ、会話の片言もあやしい位で日本の女性の例に洩れず、絶えず微笑をしかけるのと身全体でモノを言う――あのしなやかな身ぶりとを以て、一生懸命、英国をほめ、ダーバンをほめ、相手の好男子をことまでほめ……たつもり、でした。案の如く、英人は蕩けてしまい、マダム、マダム、と大さわぎです。いつか、「大英帝国の法規」を、山北夫人が、故意に「無視した」ことも、「本官の責務」も、「だあばん港の秩序と規律」も忘れてしまい、その夜、初更の頃には、良人山北氏はそっちのけに、そこは露骨なヨーロッパ人のこと、

夫人の手を、モウ取らないばかり、遊歩甲板の布椅子をピッタリとくつつけて、長身を屈めては、夫人の頬に赫ら顔をすり寄せ、何かしきりと話しております。無論、夫人には、半分どころか九分九厘まで、その会話は判らないのですが、判ったような顔をしては、しきりに、合点々々をしていらつしやいます。

○

夫人は、かねがね御自分の美貌と、小柄ながら、そのハリ切った肉体の美しさに就いては、充分すぎる位、自信がありました。

二十も年上のせいばかりでなく、領事が妻に、ぞつこんと言った傾倒の仕方もまた、むべなる哉と言いたい位で、やわらかく温かい雪白のモチ肌、首筋、腰、などの曲線の美しき、それが、紺の洋装にピッタリで、まつ毛は良く濡れたように瞳はくろぐろとちんまりと高い鼻その唇がまた、何とも言えぬ魅惑を湛え、現在世界の美女と言われる聖林の女優達の唇も、到底この唇の魅力には叶いますまい。

よく、上甲板で、食後の雑談の時など、眼前をよぎる夫人の姿態を、あかず眼で追いながら、ヨハネスブルグの大宝石商だという、ユダヤ系のロシヤ人、ボボノロフ氏が、「まだむ、やまきいたあは、昔、フランスのルイ十六世の寵妃だったまりあ、あんとわねつと、そっくりですな……あの唇はまた、まるでまつ紅に熟した苺を見るようで、……まったく！いいですなあ、日本のご婦人は……」肌のきめのあらい、ソバカスだらけの白人婦人や、黒ちゃんばっかり見ている眼には、三保の松原の天人の如き楚々たる夫人が、何とも好もしく映るらしく、何度も何度も、太い両股を甲板椅子が鳴り軋む程、大きく動かしなら、讃嘆の辞を惜しまず、大野船長

を苦笑させたことも、夫人は、ちゃんと横眼で見て知っていました。

もともと一等客は、日本人は領事家族を除けばブラジルに医師として行く市田ドクトルと移民監督の大倉氏だけ、あとは外国人ばかり八名、それも、商用の船旅に在る中年の男達なので、唯一人の女性であり肥の乗った艶冶な山北夫人の姿はこれら諸外国人の憧れと注視の的でしたがそれがひとたび夫領事のいかにも田舎親爺然とした、背も鼻も低い、白髪さへまじる姿にうつると彼らは、一種言い様のない憤おりの表情を見せ、夫人に対しては一層の憐憫の情をおぼえるのか、争って彼らは、朝から晩まで夫人のご機嫌をとり結ぶのでございます。奥様が一層、我が儘となったのも、無理がございません。人ずれのした船の給仕達は、夫山北氏の言いつけは忘れても、夫人のツルの一声は即座に実行され例えば「今日はお室で和食よ」と命令一下、まにら丸きつての和食の名料理人松下さんが、腕によりをかけての膳部は、白服の給仕さんによつてうやうやしく捧げ運ばれ、佳肴に飽いた夫人は、うっとりとした食後の仮睡に、夫の愛撫を待ちうけるのでございました……。ある時、うつかりした奥様が、浴室に鍵をかけ忘れてお入浴の最中湯番の給仕が、これもウツカリと扉を開けた途端、美女の裸像に心乱れてか、足許を踏みすべらし、転倒して頭部にひどい裂傷を作りました……。

一見非常に礼儀正しい様でいて、その実、これは、と思うと、たちまち、電光石火に出るのが西欧人のつね。また、女性の内面や心理を洞察するにも特殊の感得力を備えているのも白人でござい

ます。この英人も、みね子夫人の妖艶さに迷い、また、彼女の心中の企らみも、領事の内心の心配も、いち早く感知してしまったものと見えまして、だんだん態度が大胆になってまいりました。彼は酔に紛らしてとうとう、失礼にも、夫人のあとを迫って、船室まで、無作法な足取りぐ蹤いてきました。流石に山北氏はちよつと不愉快になりましたが夫人の方は、良人の心を知るや知らずや、ごじぶんも無理にのまされたウイスキイの酔もあり、日頃の淑女のたしなみも、かなぐりすてたはしやぎようで、嬌笑と媚態百%で、アルバムなど出して見せております。一等客ともなりますと、われわれヤクタイもない三等とはちがつて、子供達などは決して同居しておりませんから、そこにまた危険もあるわけなのですが山北氏が便所へ立った隙に、ウイリアムスは、突然夫人を抱きこみました……。アッ！という間もありません。ウイスキイの匂いの強い唇が、むっくりと温かい、紅ばらの蕾のような夫人の唇に押しかぶさり、夫人は声も出ぬ程驚いて、両掌でピシヤピシヤ大男の頬や顎を夢中で叩きましたけれど、好男子英国人の唇は、とうとう夫人の唇に完全に吸いつき齒と齒が、カナ、と鳴りました。「ばあどんみい・まだあむ」何とも人を喰った男でございまして、失礼なことを仕上げてしまっただけ、あとで、たたひとこと、あやまつております。まったく失礼な話で、そこへ山北氏は戻ってまいりました。夫人は、流石に心のさわぎを抑え切れず、さればと言つて事態今更、良人にこんなことを言うわけにもゆきません。まあ、接吻ぐらいでよかったわと、しかし、良人の前には、何としても居たたまれず、逃げる様に、今度は夫人がトイレットへ立ちました……。この間に、山北氏は、思い切つ

て、事を穩便にしてくれ、と、おぼつかない英語で頼んでみました。「イエース・オーライ」英人は、案外、けろりとして、今は大きな掌で背の低い山北氏の肩を上から抱く様にして、大いに親愛の情を示しました。……その筈です。まかりまちがえば、もう少しで二人は、「同穴の誓い」義兄弟にさへ、なりかねない場合だったのですから……。

ほっとした山北氏は、今度は向うむきになって、手早く紙入れから十磅紙幣、当時で百円ばかりでございましたが――を抜き出すと、ウイスキーをのんでくれと小声で言いながら、その男の左ポケットにソツとしのばせました。

と口では言いつつも、そのまま返却も致しません。と、そこへ、扉の外から、「山北さん、山北さん」と大声で連呼し乍ら、乱暴に扉をうち叩く者がありました。「え？誰かね」言う間に扉が開いて、もう大分酔った様子の太田老船医が、はげた頭を先に、船室内に顔をつき出しました……と思つたその瞬間「オ、ー・ユウは！」という太田ドクターの叫びより早く、件の英人は脱兎の如く船医をつきのけると、室外へとび出しました。……：ヒタヒタと足音が船室の通路から消えるまで、二人は一時、アツケにとられた形で、ぼんやりと出口の方を眺めていました。ーが、やがて我れに返つた船医が先に、「一体、これア、どうしたことなんです？」と、やゝ、まじめな顔でききました。

「……実は……ちよつと……家内が失敗しましてね……小児をつれて上陸したもんで……あの港務官に、とつちめられていた所です」

領事は、いくぶん、きまりわるげに答えました。

「港務官？ 誰が、港務官？」

太田船医は非常に驚愕した顔つきになりました。

「今の、あの男です。此処に、名刺があります」

ポケットを探つて、山北氏はそれを出してみせました。だあばん港監視官 L・B・ウイリアムスン……電話番号……役所の所在地、自宅及電話……………」

「やあ、やあ、やあ！」

船底は大きなげあたまに両手をあてて、爆発するように笑い出しました。

「こゝこれア……全く……とんだ、お茶番だわい！こゝこの港務官はね、たしかに前々航までは、居ましたよ……がね、今はたしかー ケープタウンに転任していますよ……日本船のおまけに新任途中のあなたを狙うなんて、ー きやつも、すこぶる頭が、えゝわい！」 「ぢや、今のは、一体、何者です？」 山北氏も流石に蒼白んで、こわい顔を、しました。

「あいつはね……まあ、話せば長くなるが………わしとはもう、香港、シンガポール、以来、七、八年のなじみでね。……ジョージ、って奴で、簡単に言えば、まあ、英領植民地の港々を渡り歩くゴロツキで……ばくち打ちで……女ずきの、ゆすり常習者ですわい」

「えッ！」

「山北さん、貴方、金をやりましたか？ああ、それで、その、奥方の失敗って何でした？」

「おはずかしい話ですがね。」と前置きして、山北氏は、今朝からの一ぶ始終を細かに語りました。ふん。ふん。と無雑作にうなずき乍ら、聴いていた船医は、終ると再び大噴笑をしました。

「やあ。これあ、まさに傑作。……大傑作ぢや。……山北さん。あんたも人が好い……なぜわしを呼ばなんだ……。わしは今まで、室で、麻雀をやっては飲み、飲んでは麻雀やつとったんだが一人、つぶれちまったんで、人数が足らなくなり、あんたを呼びにきましてんぢや。……あははははあ。

とまた大声で笑いました。器量の悪いこと、此の上もない話になりました。

「太田さん……お願いが、あるんですが」

山北氏は幾分、きまりわるげに申しました。

「家内には、どうか、このことは、内緒にしておいて下さい。あれは近頃、どうも、すこし我がまゝで困るのです。……やはり港務官がきたことにしてして下さい。少し、こらしめてやりますから」うなづき乍らきいていた船医は、さも、おかしそうに、眼では笑いましたが、

「いや……ふむ。よろしい。承知致しました。……お互いに女という動物には……おっと。これは失言……あゝ。大いに。ご同情致しますすわい。よろし、よろし……。しかし山北さん、条件、をつけますぞ、条件を。此の航海中はいつ、いかなる時と場合でもですな。わしの麻雀の相手と、飲む相手……。お願い出来ますなあ。はあ、いや、有り難うごわした。それで結構いでは早速これから」そこへ夫人が戻ってきました。

「あら、パパ、あの方は？」

「奥さん。あの方は、もう、おかえりになりましたよ。もう二度と此の船には、ききますまい」

「まあ。なぜ、ですか？」

「本船は明朝早く出港致しますでな……奥さん、上陸禁止はやぶらんほうがよろしいですよ。ご主人、大分、トッチメられましたぜ。あの役人殿に……あはあ、はあは……はっ、はっ」

「ママ。罰金だって、とうとう、五十ポンド、とられたよ」

山北氏は、いともニガニガしげにこう申されました。まじめくさって……。

「まあパパ……すみません……」

「やッ！それ。本当ですか？やあやあ。そいつは惜しいことをしちゃったなあ……。五十ポンドあれアケープタウンでいゝ勝負が出来たのに。……畜生……あのゴロ……あ、そうそう、そうだっけ……アノ港務官　めーふーん。うめえ事、しやがったナ」

老船医までが、本当にして口惜しがりしました。山北氏は（これで当分の間、妻の我が俣も封鎖出来ると内心十ポンドは安いものだ、と胸算用致しました。

翌日、まにら丸は、だあばん港を出航致しました。夫人は、埠頭の、白人や黒ん坊たちの間に、モシヤ彼の、ウイリアムスンが……と、上甲板から、しきりに眼で探しましたが、その姿はなく、巨船は、船側に、日本民族の顔、々、々、々、を鈴なりにつけたまゝ静かに別れの汽笛を長々と吹きつゝその巨体を、少しつつ、少しつつ、ゆるぎ出していました。

赤と黄と、縁と、青と、白と黒と褐色の街、ダーバン……下甲板に群れる子持ちの婦人連は、憂鬱でした。こんなあかるい美しい、熱帯の、しかも、アフリカ、という、はじめての大陸に　歩も足跡をしろすことができなかったのですから……

「此の次のケープタウンでは、きつと、降りられますよ、皆さん」
一人々々の肩を、やさしく叩いては、慰さめながら、豪放な太田船医はそのケープタウンでは、ぜひ何十ポンドかを賭けて、うんと儲けてやらなくては、…と、もう、ルーレット台の前に立っている様な錯覚をさへ感じ、同時に美味しい南阿の名物 C・T・O・C　ー　カイロから、ケープタウンまでという、英国支配権の誇りを頭文字にしたシガレットの味をも、思い出していました、その時、老船医は、埠止場のゴロツキ、女ずきで、美男のジョージが、あの美しい山北夫人に対して、何らかの野心を持ちはしなかったか、ということに、ふと想い到って、ああ、と小さく呟やきました。

「あ、危ない処だったよ…わしが、知らずにいたら、あのきれいなおくさんのことだ。き奴め、きつと、接吻ぐらいは、盗んだに相違ないが。　ー　何しろ、まあ、早く見つけて、よかったよ。

《終》

運命のダグラス機

一九四六年九月二十七日、金曜日。

午後四時に、ほんの数秒前のことであつた。

ミナス・ヂェライス州の首都、ベロ・オリゾンテ市外、ラゴア・サントの飛行場の赤土を踏みつゝ、いま、これから自分達をリオまで運んで行くナショナル・エア・ブラジル――のちに国策航空会社ヴァリグの中に合併された――会社が、ベロオリゾンテ市の人々に当時その威容を誇っていた最新優秀機Bモーターの二十六人乗の機の入口をめざして、静かに歩を運んでいた。

知らず、この機は二十六人の運命を冥府の暗闇に一時間後、運んで行くのであるが、この時、誰一人として、この不吉を予感した者はいなかった――と思いきや、ただひとりだけあつた。

会社の切符売場にいた、若いトーマス・ゴルドンという英国血統のブラジル人であつた。

ここでも、船と同様、航空士達には一つのジンクス（迷信）があり、黒衣の尼僧の一人旅はタブーであつた。だのに、二十二人の乗客中（機の塔乗員は機長副操縦士、通信士、事務長の四名である。近距離の航空路だから塔乗員はすくない）たった一人、中年の尼僧が客となつたので、ゴルドン君の十九歳の胸は、その時切符を手渡しながら、ちよつとさわいだ。

セメテ、尼さんが二人いるといふんだが。――ただ、何となく、そう思った。スルト、その気持がその時既に切符を買ってしまつて

いるミナス州人の宝石商でガブリエル・プッチーニという伊太利系の中年男にうつり、突然、何とも知れぬイヤな予感に体を縛られた様になり、彼はリオでオランダのアムステルダムからわざわざきている取引先の宝石商人と大切な商談があつたにもかゝらず、どうしても、出発を明日にしたいくなった。理由なんか何もない。ただ、何となく、どうしても、そのD・D・P C・28号機に乗りたくなくなってきたのだ。そこで彼は突差に嘘を考え出して切符を戻し乍ら言い訳した。

「すまんが、この座席、誰かに譲つてくれませんか？ わしは急用が出来てどうしてもこれには乗れんのでね。」

黒い小さな手提鞆を下げて、青い切符の帳面を手にもっている中年の黒衣の尼をソツと横目でみながら、ひどく哀れっぽい声でプッチーニは事務員に視線をすがりつかせて頼んだ。

「さあ――誰かあるか知ら？」ゴルドン青年も、顔見知りのプッチーニの急の変更にちよつとの間当惑の表情を出した。と、そこへ、あわただしく駆け込んできた体格のいいカリオカ（リオ州人のこと）が性急な口調で喚くように言った。

「おい、ゴルドン、是非一枚つごうして呉れ、何でも彼でも今日中にリオに行かなくてはならないのだ……家内が難産でね、死に相なんだ。いま、電報をうけとったばかりだ」

「あッ！ ちようどいゝ、ぢやプッチーニさん、その切符をこちらへ――名前を書き換えますから」ゴルドンは、日頃懇意なプッチーニのために、心から悦こんだ。文字通りホツとした宝石商は、いま、とび込んできた自分の身代りの男に心からの親愛を感じて、思わずその肩に手をまわし、「いや、ありがとうございます。こ

れで私も助かった」とツイ云ってしまつてからハツとしたが相手は氣もつかぬ様子で、「助かったのは私の方です。これで夜までにはあちらの産院にかけつけられますからね」と心からうれしそう。彼も宝石商を抱擁しないばかりの歓喜を示し、そこでブラジル人の習慣通り二人は肩を組み合つたまゝ、附近のカフェー店に一杯のカフェーを飲み合うために仲よく話ながら出てゆくのである。難産で瀕死の妻の枕元にかけつけた一心で、何も知らずに死の切符を手に入れてしまった運命のセールスマンは、その座席番号が、7で、これは幸福の7だから、或いは妻は助かるかも知れないなどと老えていた。隣り合わせの席に黒衣の尼僧がすわつたが信仰心の厚いこの男は、却つて心の中でよろこんだ位である。あとで調べて判つたことだが、この男が遭難した時刻と、妻がリオの病院で息を引き取つた時刻が同じであつた……。よほど、仲の良いい夫婦であつたに相違ない。

ミナスヂエラエス州ベロオリゾンテ市外、ラゴア・サンタの飛行場を飛び立つた時は、機は完全に飛行の出来る状態に在り、何らの危供はなかつた。ただ、ばかに霧の深い午後であたりはうすい白妙の幕の中にいるようであつた。

風はなかったが、風のない日は霧がふかいので飛行には絶好のコンディションとは言えないが、しかし太陽は出ていたし、ある程度上昇してしまえばあとは何でもないゝとあまりふだんの通りなので、機患副操縦士も、いささかの危供も感じなかつたから、元氣に見送りの場員達と談笑を交わし、笑顔で窓から手をあげた位である。

こうして機は　―　飛び去つた。

それから約一時間空を飛んだのち機は、山岳重畳たるミナス州深山の峡谷の中腹に無惨な焼けただれた二十六の屍体を撒き散らしながら、まっくろぐろの碎片金属となって散りおちた。

この大惨劇を静かにみつめ乍ら、しかし、夕闇の中に、山は黙々として語らず、溪流は、平常通り、不断のせせらぎの音を奏でていた。

その時機は、大雷鳴のはためく黒雲の中に突入していたのである。アッと思う間に、雲の中で大爆発を起した機は、一団の火の大塊となつて燃え乍ら落下した。

無電技士がキイを叩く間もなかった。

南米ブラジルでは春九月。下界にはその時、暴風雨が襲っていた。ブラジルでは、最初の大きな飛行事故で、この遭難の記事は、連日、約一週間、ブラジル中の新聞に詳報された。惨死した一人々々の写真と履歴が大きく掲載され、家族の悲歎のさまもことごとく報じられた位である。

夜の九時がすぎても飛行機はリオに着かない。リオ・デ・ジャネイロ市とベロ・オリゾンテ市は距離としたら比較的近く、二時間たらずで着く筈である。それが五時間経つても着かない。

恐らく、悪気流か荒天になやまされて、山岳地帯をうろついているか、どこかえ不時着でもしているのではないか――と、はじめて人々に不安の想いが萌したが、それでも、まだ墜落のことは誰もが予想しなかった。

のんきで、いつも神さまをふかく信じているブラジル人達は、楽天的な考えの人が多く、ことにあの機は最優秀のものだし、パイ

ロットは伯国航空界の至宝と云われている第二次大戦で欧州の山岳戦に歴戦の勲功を重ねた勇士、世界でも指折りと言われる名パイロット、オクタヴィオ大尉である。副操縦士がこれまたブラジルの空を何百回ととんでその該博で深い空の知識は他に右に出る者のないと云われたヴェテランである。この二人に委してあるのだから絶対におちる　なんてことはある筈がない、というのが会社側、乗客達の家族の信念であつたが、機は、依然として、リオの夜の飛行場にはあらわれないのである。

どうしたのだ？　まさか、とは思うが、……しかし、もし、ということもある……：いちおう諸方へ電話連絡してみよう……：ターミナルに待つ出迎えの人々の焦燥も、やがて恐怖に変わりつゝあつた。モシヤ？　みんなの神経は、次第におそれのために、ふるえはじめてきた

「午後十時三十分、唯今までN・A・B・航空会社のリオ行旅客機D・P・C・28号の行方は不明何らの応答もありません。州交通局は搜索機を出そうとしましたが、山岳地帯の天候が非常に陰悪になりましたので、明朝を待つことになりました」ラジオは、ひっきりなしにD・P・C機応答ナシをくり返し心配して待つ家族達の耳の神経をいやが上にもいらだたせるのである。

山岳の町、バルバセーナ、これはミナス州でも小さい町である。ここから八十二軒の地点、奥リオ・ドーモというごく小さい集落から十二軒の森林中魔の峡谷と云われる深山中に、その時、機は黒焦げの残骸を横たえていた。と云うより取り散らかしていた。

大密林をとぎす夜の幕の中に、明日の囀りを夢見つゝ眠る小鳥らを驚かせて、なお、ぶすぶすと焰は燃え白煙は空にたちのぼる。

機の残骸を中心にあたり一軒四方にバラ撒かれた、やけたぐれ片々と碎けた人々の遺体は、まるでまつくろな泥の塊に似ていた。人口わずか四百、五十戸ほどのリオ・ドーセの町の人々は、夕方の大雷雨の最中、南方の空にももの凄い閃光と爆音とが同時に起つたのを、しかし、誰も知らなかった、というのは、あまりにひどい雷鳴と篠つく強雨だったからであるし、夕食どきで各戸はラジオをかけていたせいもある。

その町外れの百姓の一人が、二十七日の夕方、折柄の大雷雨の最中、ぼんやりと、台所の窓ガラス越しに、凄まじい電光が雲の間をひき裂くのを眺めていると、突然町の南方の空に何ともすさまじい大爆音が起り、黒い雲間をつんざいて電光ともちがう、真紅な火の塊が見えた――と思った。「あつ」途端に彼は、毎夕刻、きまつて此の町の上空を通過する、ベロオリゾンテ市、リオデジャネイロ市連絡の定期航空便のあることに想到し、もしかするとその飛行機に事故が起きたのではないか、と考えた。彼はすぐさま大雨を衝いて戸外へかけ出し町の中央の警察署長の家にかけた。

「お聴きなせえましたか、アノでつけえ音。どうもハア。えれえ音でがしたぞ。きつと飛行機が破裂したちにげえねえと思うんですが。ドーセ河の上の方でがした。もの凄え火の玉で」金曜日はブラジルのカトリックは戒律をよく守るので肉食はしない。魚を喰うのが習慣であるから、警察署長もこのしきたりに従って河で漁った小魚をフライにして、これを肴に甘薦焼酎の味の良いのをゆつくりとのんでいた

が、この警察署長は暢気この上もない好人物なので、いささかも

動ぜず、

「うーん。そうかあ。珍らしいこったのう。まあいゝやな。おれたちが墜ちたわけではねえて……………」

それよりまあ、一杯どうだ。このランバリはとてもうまいぞよ。ゆんべの夜釣は、だが、あんまり成績はよくなかったがな」それからドーセ河支流に於ける夜釣。朝釣りの自慢話が始まってしまい、農夫の頭からも先刻の凄まじい閃光も爆裂音も消え、酒すきの二人はいつかピングの酔に他愛のない世間話などを交していた。

同じ頃、リオ・ドーセの上流十二軒のところで、巢鳥を捕えに歩いていた二人の山男が、自分達のあばら家へ帰ろうとしてゴソゴソと叢林中を、裸足で歩いている時、魔のけい谷近くで突然暮れかかる夕空をつんざいて一条の大閃光の走るのを前方にみとめ、同時に、もの凄い大爆音と共に大きな火の塊が魔の谷に墜落してゆくのを見た。コレハ、テツキリ、魔物ノシワザ、と二人はぶるぶるふるえ出して口も利けず草むら深くつつ伏して神様、神様と十字を切っていたが、しばらくしてソツと頭をもちあげ、コワゴワ空を仰いたが、たゞまつくらで何も見えない。ふだんは近寄ることさえ恐れていた谷であるが、この時は好奇心の方が勝ってこわさも忘れ二人はソロソロと谷の近くまで丈なす草をかきわけかきわけ行ってみた…………と、ああ、燃えている燃えている大きな飛行機のかたまりが！その火光で四辺は明るくなっている。ガソリンやゴムの燃える強い臭氣が二人のいる所迄も漂よってきた。そして人の体の焼け瞠目したまゝ唇を白くして眺めていた土地者二人は数分後、われに返ると互いに無言で顔を見合せ脱兎の如く走り出した。人口四百の「町」に向って。

それからが大変だった。

何百年も前から、静かに眠っていた様な「町」は、折柄の豪雨も雷鳴も歇んではいたけれど、今度は飛行機がおちたことで人間のさわぎが大きくなった。

町にたった一つの長距離電話にとびつくと町長は、どもりどもりバルバセナの町長を呼び出す。それ迄のんでいた警察署長も、もう釣りの話どころではなくなり、先刻の農夫に馬の用意をさせて現場に急行する。その時になってあわて出した署長はどうしても長靴に足が入ってこないのによく見たらひざがしらに長靴をはかせていた……。

夜中というのに町の人々は男は殆んど全部カンテラや懐中電燈を持ってジープ、馬、自転車などで魔の谷さして集まるのである。翌二十八日の正午にはもう、ラヂオや新聞の速報でベロオリゾンテ全市の人口は遭難の惨事を知り警察車、遺体拾収の消防署の車、各新聞社の車、乗客の家族親類縁者知人などの車が陸続として密林をわけ入るのである。

先発のジープ隊は何回も下車しては大斧や鉞、大鋸などで大木・巨木を切り倒し雑木を伐って道をつけないといけないので大へんなさわぎと苦労であった。

ふだんはまるで人煙稀れな人外境幽寂たる原始林のただ中に、たちまちにして百人以上の男達が集まり市中の様な有様となった。あちこちに散っているモーター、翼、部品の残骸、それらはまっくろにいぶり焦げ、まだふすふすと煙を出しているシートの破片、それらに混ってまっくろな土塊のような肉片、白い骨の出た片脚、

まるい頭部などが岩かげ石ころの間にころがり、まっくらこげになった肉塊の一つを、消防夫がもち上げるたびに、周囲に群がる人々はうめき、遺族の者は泣きさわぐので、遺体を取り片付けている消防夫、州警兵、警察の人々などは、次第に頭痛や吐き気に襲われ、誰かが町まで焼酎を取りにゆきその十本までがその場で、みんなの口うつしにのまれてたちまち空となった。あまりに遺体がバラバラなのでバルセロナの病院で組立てる時、十数人の医者達は全く途方に暮れたのである。異体同士を組み立てぬ様注意に注意を重ねなければならなかったから、その困難な作業が終ったのは二十八日の夜であった。遺体のうち、完全に人形（ひとがた）を保っていたのは、一歳と六歳の幼ない姉妹でこれはふしぎと焼けもせず出血もしていなかった。蠟人形のようにだ、と人々は眺めて泣くのであった。

墜落の原因は、今日なお不明である。

大雷雲の中に突入したために感電してそのショックで爆発したのだろう、と云われた。

○

遭難した乗客二十二人のうちには、まことに「奇しき運命の」と言える人々が数人居た。アルヂエリア・ポッチー二という四十五才位の尼僧がその一人でこの人はいかなる前世の因縁か宿業か、三十年前タイタニック号沈没の時、木片に縋りついて大西洋を漂流中、奇蹟的に救われた一人でボストンかどこかの富裕な金物商の愛娘であつたのが船と共に沈んだ両親は伊太利人で熱心な加徒力教徒であつたため、親戚一同相談の上、この少女をローマの宗教学校に入れ尼僧にした。彼女は学識教養、品格ともに兼備の尼

さんとなり、ヨーロッパ各地、アメリカ、南米各国の布教に献身していたのであるが、偶然にもミナス州のベロオリゾンテに宗用を帯びてフランスから飛来し再び帰仏するべくリオに向けてこのダグラス機に客となった。不吉な黒衣の尼僧とゴルドン青年の胸をさわがせたのはこの人である。海で命終らなかった人は三十年後に空で果てた。この尼僧は肥満体の上、脂が多かったので自身の脂でよく焼けてしまい殆んどくすぶった白骨のみになっていたという。

エドワード・エル・キンメル博士はアフリカの英領ウガンダ地方、ベルギー領コンゴ地方に於ける珈琲害虫予防の権威で殊にウガンダ蜂の研究については、世界的な人である。ブラジルでもサンパウロ州の日系農家トーザン・モンテデステ農場の山本博士がその蜂についての研究がふかく、戦争中ひたすらこの研究に心をかたむけていられたがアフリカのキンメル博士は、その遭難の時すでに年齢七十才に近く、アフリカの珈琲害虫については五十年の研究を積んだ斯界の碩学で、土人達からはまた、神様のように敬まわれていた慈悲深い人格者。キンメル博士は、英本国の政府に要請して一年間の公の休暇をとり、ブラジルの珈琲地帯、山岳地帯の珈琲栽培状況などをゆつくりと視察するため（というおもてむきの理由で）来伯、ミナス州内各地に長いこと滞在したが、じつは、博士は二年前、音楽教師のグンテルと共に家を出て以来、どうしても消息の知れなかった妻のヒルデが、いつの間にかブラジルにきていてミナス州内の山岳地帯の小さな鉱山町に赤毛のドイツ人グンテル、ヴァイオリンの上手な、体格の良い男、――と愛の巢を構えて幸福に暮していることを、ふとしたことからきき出

し、妻に会いたいためか或いはこれを罰したいためか、とにかく、おゝやけの休暇をとって、ミナスにやってきた。

ヒルデとグンテルは、ともにアフリカ生れのドイツ系で、ヒルデは博士にとっては二度目の妻であつた最初の妻は銀婚式後いくばくもなく眼り病に罹つてウガンダで死んだ。糟糠の愛妻をツエツエ蠅の媒介による眼り病で喪つた博士の悲しみは、しかし間もなくアフリカ生れのドイツ美人、ヒルデ・ウンデンベルグの妖美な舞台姿に一切の過去を忘れ、熱心に求婚して遂にこれをキンバリ市のキャバレからひきぬいて自分の家につれ帰り、正式の後妻としたのであるが年齢差は四十に近く、博士を知る悉くの人がおどろき呆れた仕末であつた。

ヒルデはしかし、三年程は忠実に博士の妻として仕え、良妻として完璧の状態であつたが、昔の恋人、ヴァイオリン弾きのグンテルが流浪の果てウガンダにきた時、偶然路上で邂逅したのが運命と云うか何というか。やけぼつ杭に火がついて二人は博士の貯金を全部銀行から出すとウガンダから姿を消してしまつた……。悲歎と憤怒と懊悩とは、此の老いた学者の心を異常なまでに昂ぶらせたと見え、博士はあらゆる手を尽して二人の行方、消息を求めた。そのためには祖父からの遺産の広大なウガンダの珈琲園も手放し英国から下りる年金も抵当にして金を作る仕末。この遍執狂に似た執念を神も哀れと思われたのか、一九四七年四月になって、漸やく二人の居所が判明したのである。そこで子供というものの一人もなかった身軽さを倖い、博士は鞆一個を提げて空路来伯しきいてきた町はもとよりミナスの隅々までも探したが、ヒルデとグンテルは博士をおそれるあまり間一髪のところミナスを逃げ出

しリオに飛んで行った：それを追って此のダグラス機に身を委ねたキンメル博士は何という不幸な老人であつたことか

○

マリヤ・マダレーナ・カルヴァーリオ・シルバ・アゼベード・ノゲイラ・アンドラーデ・モウラ、……長い姓名はブラジル人には珍らしくないが、この三十二歳の寡婦は三度結婚して三度夫に先立たれたために、なおのこと一層長つたらしい名前になつてしまつたのである。

先づ生れた時親につけてもらつたのがマダレーナ、洗礼名がマリヤ、カルヴァリオが自分の生家の名、

シルヴァ・アゼベードとノゲイラとアンドラーデとは、各々亡くなつた良人の姓である。此の寡婦は四回目に結婚した夫が健康で遅ましくてその上やさしく、金儲けの才腕も人並以上で、その上情熱家で申し分方ない、とシンから幸福に酔つていたのが三年経つた今年の正月あたりから夫は急に冷めなくなり、商用にかこつけてはの外出外泊の頻繁となつた上、金銭の浪費もどうやら激しいようである。おかしいと思つた時は、しかしもう手おくれで、果たして夫には愛人が出来ていた。市内のある外科病院に、自動車事故で入院した友人を再々見舞う内、その看護婦のひとりといつの間にか愛の言葉を交すようになり、妻にかくれて散歩、シネマ、食事、遂にはゆきつくところに行つてしまつた。こういう事は傍で兎や角と忠告したとて盲目になつてしまつてゐる四十男にはききめのあるものではない。ついにはおきまりの「別居」デスキットということになり、夫は所有の住宅、経営する薬局、其の他一切の財産を妻と二分して彼は愛人とリオに行つてしまつた。

四人も夫を正式に持ちながら子供というものを一人も恵まれていなかったモウラ夫人は、別居料として受けた財産の半分を金に換えるとタモヨ街にささやかな洋品店を開きそれが繁昌してくれたので夫に捨てられた心の悲しみは毎日の忙しさと売上利益の増加を数えることで漸やくにまぎらすことが出来たのであった。トコロが数ヶ月するとリオに居る筈の夫が尾羽うち枯らした姿で、愛人を判なつて突然ベロオリゾンテ市のタモヨ街の洋品店に現われ、モウラ夫人に「頒けてやった財産のそのまた半分をぜひ返してくれ、おれたちは今、非常に困っているのだ」という。虫のいゝ、要求におどろいたが三人の前夫はどれも安月給取りで、葬式を済ませたらアトに一文も残らなかったことを考え、好人物でのんきなモウラ夫人はあまり思案もせずになんかそれまでにせつせと貯めた洋品店の利益金五百コント、当時の米貨にして一万ドル近い金を、惜しげもなく呉れてやった上みすばらしい服装の夫とその愛人にも新調の服を贈り、自分の店の棚から男物と女物の絹の下着類までも出して与え、おまけに飛行機の切符まで買って二人をリオに出立させた――その飛行機が墜ちたのである。

警察から呼び出されて現場にゆき、寸断された上、炭の塊りみたいになった二人が、なお白骨の指と指とを絡ませ合っている遺体の前に立ち合わされた時、遭難現場にいるすべての遺族が泣いているのをぼんやりと見廻した上、天を仰いで呵々大笑したのである。

○

ポロニア（波蘭）から、曾ての昔、赤魔の恐ろしい弾丸と刃とから生命から逃れてきたワルシャワ生れのヴイルセンの上にも、

いつしか南米の春秋は、もろ手の指の数よりも多くめぐって、六十近い最近では、ブラジル中部の山の都、ベロオリゾンテに老妻とたゞ一人、静かに故国ポロニアの山河や四季を偲ぶ身であった。幸福、と云えば――此の上もない幸福な現在。富はあまり、わが身は至極壮健、妻は貞実でやさしい。三人の息子も、それぞれ成人して、リオ、サンパウロに結婚して或いは有能な技術家として、或いは実業家として、裕福な生活をしている。

此の上、何の望むことがあるう。

さは言え、ふり返り見る彼の背後に、長々と続いている過去の、何と危険の多かつたことか！火と鐵のあらし、回顧すればぞつとする思い出ばかりである。

今次の大戦は、ポロニアを地獄の業火の中にまき込んだ。はじめはナチスの手で、殺りくをほしいまゝにされ、次には赤魔の肅清の名のもとに、惨殺され、処刑された彼の知友の誰彼……。おれもあの時、

ワルシャワにいたら――ゾツとする危機感に、何度彼は身を震わしたが知れない。

戦禍の町に飢えになく市民の充満する故国の消息は、しかし、彼を却って非愛国精神に変わらせた。

（それが、いまの、おれにとって、どうなるのだ？どうしろ、というのだ？）反抗的に、わざと冷淡にかまえる様になった。だから、せい一杯自分の商売に心をうち込むことにした。それが一番心が安まった。

リオに経営する大きな絨毯の工場　カーテンの工場　マッチの工場のほかに、木材の輸出、もやった。

牛皮、珈琲、棉花の輸出。好運は彼に、どの商売も、沢山の利益をもたらしてくれた。ポーランド渡来

の貧しい一難民は、十年後の今や財閥の元祖にすらなろうとしているのだ。

こういう時、すべての男の定跡どおり、彼も、また、「短い人生」を「悔いなく享樂する」ことを考えついたとしても、非難は出来ない。

一九五八年以来、世界蹴球選手権は、ブラジルのサンのウロ州の選抜軍が独占した。(ああ、ペレ!!! エヂソン・アランデス と呼ぶはたちばかりの黒い少年の天才的妙技に依って、ブラジルは沸騰した!) が一九四六年当時は、ミナス州軍が強かった。リオを敗りサンパウロなどはものの数でもなかったそのオール・ブラジル選手権争奪戦がリオで行われるので、その見物を思い立ったヴイルセン氏は或る日、そう思うと矢も楯もたまらずまっすぐにスール・アメリカホテルまで、彼の自慢のスツッドベエカアを走らせるのである。二階の鍵番号No.7、これが、最近まる一年間、彼の心の大部分を占め、また、世の中にたった一つのオアシスでもあり代えるものなき宝石でもある最愛のアイダの室である。ヤール錠がカチリとひそかに鳴るとモウ、老波蘭土人の心は、波立ち、手は震えた。肉体の慾望の飽和する直前のあの、快感がすでによみがえってきて堪えられなくなる。豪華な客間を通り勝手知った彼女の居室に殆んどかけ込む様にして入った。

「あら。シッキンニョ。何よ。あわてて」

毎週きまつて月、水の二日だけ、午后一時から四時まで女とねるおきまりが、今日は、その日でもない木曜日なのに、突然とび込

んできたのだから、女はおどろいた。

「……………」それには無言で、もう老人の息は激しく喘ぎ始めている。逞ましい腕の中に矢庭に抱え込まれ痛い程の接吻に息のつまってきた女は、「く、くるしいわよ！ちよ、ちよつと放してよ」とバタバタともがくのである。

一切の分別も見栄も忘れた六十二歳の白髪の少年と化したポーランド人は、長身を反らせるとヒョイと女を両うでに抱えあげ、軽々と奥の寝室に運び込むのである。真紅とばら色の絹ぶとんが美しく重なっている上に女の身を乱暴に投げ、おとすとガツキとかぶりつくように抱き込んでその上に自分を投げかけ両腕に力をこめて締めつけ乍ら、むさぼり吸うように女の唇を求めた。

殆んど年とった人とは思われない程の、あらあらしく逞ましい情熱の奔騰に身を任せていると女の中内にも何か、それに応えるものが沸きあがってきた……………。

しばらく二人は、何もかも忘れた。

ああ、この恍惚！

○

「それで、わし一人でフットボールを見たって面白くないし、あんたも、ぜひ一緒に、と思ってもう、この通り、切符も二人ぶん買ってきた」

「リオも、こうあんまり度々ぢや、ありがたくもないけれど」やゝ疲れた様子でベットから半身を起こし枕元の小卓からアメリカ煙草の一本をぬくと、手入れのよく行き届いた細い指の先に狭み、あわててライターで彼が火をつけてやるのを待って、一口フーとふかく吸った。唇がまるで苺の実のようである。気の遠く

なるような愛情のこもったまなざしで、この唇を眺め入っている老人の体には、又もや新らしい情熱がこんこんとわき起ったようすで、彼は再び、はげしく女の身を抱きよせようとする。

「あ。もう少し静かにしててよ！うるさい人ね」

「もうちよつとさわらせてくれ、もうちよつとだ」

ああ、ああと老人は低く呻いた。

「ねえ。どうしても行かなきゃならないの」

「うん。」

「いやだなあ。蹴球なんて　――　ツマラナイ」

「ぢや、わしひとりで行かせようとか？」

「いゝ、わ。一緒に行つてあげるわよ」

その代り、と女は、すかさず、咬え煙草のまゝ老人をながし眼で見ながら大切な用件を切り出すのである。

「ねえ。タモ―ヨ街のいつものお店」

「うん。何が欲しい」

「いつかの、豹の外套。虎はもう飽きたわ。あれ、こんどこそ、買つてね、ね。」

その頃の値段で、豹の皮の外套一枚は、ベロオリゾンテで中流の住宅が一軒買えた。

「ぢや、仕度をしなさい。すぐ行こう」

「あら、うれしいオゝ、私のいとしい貴郎。」

若い女鹿の活発さでベットを跳び下りた女の裸のうしろ姿が、躍りながら浴室に消えると、戸はあけ放したまゝ湯のふき出る音にまじつて気持良さそうに鼻で唄う声がきこえた。

豪荘な大邸宅の奥ふかい食堂では、妻が調度汁器に似つかわしく

ないひどく質素なわびしい中食の皿の前に、ひっそりと座って、女中の給仕でポソポソとひるめしを食べているその時刻だが、そんな老妻の姿など、このアパートにいる間は、思い出したことさえないヴイルセン氏であつた。

市中目貫の商業街とは云えぜいたくな高層建築の内部は却ってひっそりとして、街の騒音からは完全に遮断され、森林の中にも棲んでいるような静寂さでそれを素すものは、浴室の湯の音と女の鼻唄の低い声だけであつた。

殆んど呼び出したい幸福感にすっぽりと包まれた心地で、ヴイルセン氏は、しばらく身動きもしなかつた。

ああ、この幸福！

老妻は、近頃では、すっかり出不精になり、せいぜい時折市内に買物に出る位で、大抵は終日ひろい庭園の片隅の涼しい木陰に揺れ椅子を持ち出してそれにかけて乍らあみ物などに余念がない。孫達への贈物である。

富裕で働らき者の良人を持つ夫人達に共通の典型的な有閑の老夫である。

アイダの無茶苦茶な程の浪費ぶりと比べると天地の相異があつた。アイダのぜいたくは天井も底も知れないもので、フランスの香水、アメリカのクリーム、伊大利のレコオド、チエッコの皿小鉢、オランダの茶碗、トルコの壁掛やじうたん、イギリスの服地、日本や支那絹の服、豪州直輸入の毛皮類などおよそ外国品ばかりを使っているし、毎日の花瓶には一番高価なバラを絶やしたことがない。……それらの一切を購なう者はヴイルセン氏のほかにはない。会社や工場ではカミナリ爺で通っている謹厳無比のヴイルセ

ン氏は、すくなくとも三ツの顔、三ツの生活断面を持っているわけである。事務所での顔と生活、家庭での顔と生活、そして、アイダのアパートに於ける顔と生活……。

前二者は社会に明示して憚らない公生活、あとの一ツは全くの「彼だけの」知る「私生活」。

事務所、工場に於ては彼は嚴格無比、冷徹酷薄な社長、主人であり、家庭にあつては吝嗇比の上なき暴君であつた。

「みなさん無駄を省きましょう」

「ものを大切にしましょう」

東洋の一隅で、資源のとぼしい日本が、国力を回復するために一億一心に働らいてそしてこの標語を実行するためにP・Rしたのを何かの雑誌でよんで、早速これを会社、工場、事務所、家庭に実行したのである。すなわち、従業員全部にムダを省き、ケンヤクせよ。ものを大切にと毎日訓話し眼を光らせ、妻と食事する時は極端の粗食で我慢し、老朽や無能の従業員はどしどし 無駄を省く標語に従つてクビにしたが、流石に四十年さうこの老妻だけは「無駄」同然の役に立たない女となつてはいるがこれは掃き捨てるわけにもゆかない。老妻がある時、ダイヤの指輪を欲しいとねだつたところ、「年寄のお前にはダイヤは派手過ぎるから」と、場末の小さな店からつまらない黒色の石の入った指輪を買つてきて与え、アイダが安い黒石の指輪でもしていれば「そんなものをはめていては貴女の美しさがだいなしになる」とばかり、わざわざリオの大宝石商から、何カラットのダイヤの指輪を取りよせ、みずから女の指にはめてよろこんでいる。ゼロの沢山つく数字を小切手にどんどん書き、云いなり次第のぜいたく品は右から

左に買つてやるのに無上のよろこびを感じてらしい。長年の辛勞に疲れ果てた老妻のやつれた寝顔は、見るさえもうとましく、享樂に飽いたアイダの寝顔は抱きよせてなめずりまわたい程可愛くてならないのである。

アイダには、しかしヴイルセンのこの献身的な愛の奉仕も一向にうれしくもなんともなく、老醜をさへ感ずる年よりの愛慾のうとましさにほとほと厭気がさしているのだが金の蔓の切れることを思えば別れることもできずその口直しの意味もあつて先頃から一人の美青年を秘かに愛しはじめていた。

おなじアパートの住人でリオの或る銀行のベロオリゾンテ支店につとめる二十二才の若者、眉目秀麗な上、蹴球の選手で大学時代は新聞のスポーツ欄にもよく写真の出た位で、今でもクラブでは重要なメンバーの一人である。彼は公定の休暇を十日間貰い、リオの全伯選手権争奪試合を見にめく心算でいたがアイダと別れるのも惜しくてぐずぐず迷っていたところなのである。アイダはそれをきいて知っているので好機！とばかり心の中で手を拍った。リオで同じホテルに泊らせ、酒に弱いビルセンを酔わして早寝させ（或いはビールの中に眠りぐすりを仕込んでいゝ——とまで彼女は考えた）ソツとぬけ出して愛する青年の室にゆけばいゝ——
——早くも計画はまとまり、一方ではサモ洪々と恩に着せる如くヴイルセンをぢらせながら結局リオ行を承諾するのである。ヴイルセンの喜悦と言つたらない。彼は工場のことと事務所のことも、息子達のことと、老妻のことなどは勿論忘れ果てて、早やリオの海岸で女と波にたわむれるよろこびを胸いっぱい膨らませるのである。

ミナス・ジエラエス州の政界の重鎮で、同時に法曾学者としても全伯に著名な法学博士、弁護士、ネルソン・フェルナンデス・カム波斯氏は、その時、怒りに夢中になっていたので、極く上等の葉巻をくわえていたのだが、それを喫うよりも噛みしめながら、苦り切って左前の方の座席を右側最尾の座席からにらみ据えていた。

機はすでに快調の爆音をたてて滑走をはじめ、左右にもうもうと赤土の煙りがあがり、プロペラの音が、少時耳を聾するばかりである。だが、博士のカツと瞳開いた双の眼は、ぢいつと左り前方二番目の席にうしろ頭を並べている二人の人物の背に向ってまたゝきもしない。やり場のない憤怒と情ないようなコキユにされた男のみじめな想いがいまのところ心のぜんぶであつた。

弁護士という派手な職業上、また、政界の重鎮ともなれば、どんな男でも「遊蕩」には無縁でいられない。また、学究肌の人に似合わず、キャバレや酒場の一種なまめかしい、頹廢的な雰囲気を、此の上もなくすきな博士は、多忙な公職、政界の往来に付暇もない昼が終り、夕暮れがくると、そぞろに心がうき立ち、半裸に厚化粧の夜の貴婦人達のたむろする「グルータ」(洞窟は俗語)一の享樂場へと車を馳らせるのである。

こういう場所はベロオリゾンテはすくなくリオに多かつたから、博士は大低リオのホテルで暮し、一ヶ月のうち、帰邸するのはほんの数日に過ぎない。ベロオリゾンテ郊外パンプーリヤ湖畔には当時大きなカジノがあり、賭準と女と酒はふんだんに楽しめたが、名士は大体自分の土地では遊ばないスキヤンダルをおそれるから

である。新聞などに万一暴露されると、政敵の好餌、攻撃の好材料にされるからで。

放蕩は激しくても、事実、博士は愛妻家であつた。ミナス州の片田舎に生れ、苦学力行の末に弁護士となり民法の大家となつたカンポス氏が、今日、政界の重鎮としてハバを利かすようになったのも、何回も連邦下院代議士に当選できたのも実を言えば、夫人の財産に拠る所が多かつた。その点、カンポス博士は夫人に感謝もしているし、また、十五歳の花の蕾の夫人を、まずしい学生時代に烈しく恋し、とうとう強引にわがものとしてしまった位であるから妻を殆んでデキ愛して銀婚式もとうにすませたが、性来の遊びずきと浮氣の虫は妻を愛し乍らも、また、ちまたに夜の蝶を遂うことをも止めないのである。ミナス州でも屈指の名門で大地主、帝政時代は爵位まで持っていたという豪族の愛娘であつたマチルドは、カンポス博士に見染められてまだ愛慾の何たるかをも解さない内「妻」として抱きられ、その座に着かせられてしまつた。それまでは全くの深窓の処女で、尼僧の家底教師、それからフランスのシオン女学院に学ばせられ、つまりその頃のブラジルの最上流階級の子女のとつた勉学の道を歩み男と云えばカトリックの僧侶よりほか口を利いたこともない生活から一転してその頃はまだ名もない法学士弁護士の免状をとつたばかりのカンポス博士苦しい家政のやりくり直面せねばならなかつたが、妻に対する激しい、そして一途な愛情に燃えてカンポス氏は、とに角大奮斗努力の果て、学位も取り、若手弁護士としてぐんぐん名を揚げかずかずの難事件をこなして先輩を追いぬき、さらに官界に入るや益々その手腕を発揮して数年ならずして人々の上位に昇ること

ができた。その内にマチルド夫人の両親が逝き、期せずしてその莫大な遺産は、ひとり娘の継承するところとなりその財力を以て氏は宮界から政界に飛躍し、数年ならずしてこの方も頭角を現わし、現在ではミナス政界の一流人物である。

カンポス博士には兄事する一人の親友があつた。二ツ三ツ年長で大学でもその男の方が先輩の地位にあつたが、竹馬の友、刎頸の友、莫逆の友、などと昔から親友を形容するが、兄弟のないカンポス博士にしてみれば世界に唯一人の信頼すべき兄とも云うべき人物で、また、学生時代から遊蕩も冒険も共にしてきた仲である。博士がマチルド夫人を恋して、殆んど不可能と思われたその恋を成就して結婚出来たのも、官界に入つたのも、政界に活躍出来るのも、みなこの親友のお蔭であつた。また、二人がうまく共同の煙幕を張つて、女関係のもつれやスキャンダルもうまく外部には知られずに切りぬけて来られたのも、此の友あればこそであつた。ところが不幸にして此の信すべき友のジョゼ・オリンピオ・ソウザ博士は数年前に妻を喪い子供達はそれぞれ独立して家庭を持っているので、淋しい一人身を、すゝめられるまゝにカンポス博士の家庭に寄遇することとなつた。カンポス博士の方は若い時からの放蕩のためか、或いは夫人が繊細すぎて弱い所でもあつたのか子供は一人もなく家庭は雇人達ばかりで至極淋しいのでミゲル博士は親友のジョゼ・オリンピオ・ソウザ博士にきて貰つたら妻も淋しがらなくてよいだろうと至つて簡単に考えた結果、遠慮する孤独の老友をむりやり自邸に連れてきて住まわせた。―これが運命とでも云おうか、美しいカンポス博士夫人にその少女時代からカンポス博士よりも早く恋心を持っていたソウザ博士であつた

のだが自分はその時既に妻帯して居り親友のカンポス氏の熱烈な恋情に心をうたれて自分の心を哀しく抑制し友のために骨を折って結婚させてやったのであった。しかし、胸中の悶々は、夫人を見る度に深くなるので、一時は家庭への訪問は、意識してやめていた時代もあつた位である。そのために四人の子は間にあり乍ら、妻をどうしても心から愛することのできなくなつてしまつたソウザ博士は口実をつけて妻を別の町に住ませ殆んど妻の許を訪ねることもなくなつていた。その妻は病死したので、結局何か重荷がとれた様な心地でサバサバしたがしかし意中のマチルドは依然として親友の妻の座に居りわが手にとることは出来ないが、せめてその側近く居る幸福だけで満足しようと、何も知らぬ友の好意に任せてその邸内に同居することとなつた。しよつちゅう、リオにゐる上に夫は公務が多すぎて家に帰つてもロクロク夫人と口を利くこともない。

それにいくら恋い焦れて一緒になつたとは言え、わが物にしてしまつてみればその情熱も次第に静かとなり、況して、夫人の財力のお蔭で今日になつた夫の心には、やはり一種の劣等感がつきまとい、自然と心がそよそしくなる。感謝は山山ながら、心は反対に離れて行き、妻に対する愛情は変らぬつもりでもやはりどこか冷めたい態度になつてきた。富裕に生れて育ち人の心を測量するなどということを全然知らないマチルド夫人はまた、夫の心が見ぬけないので「あなたが州統領候補に推されるのも、結局わたしのお父様の下さつた財産のお蔭よ」などと言う。事実それはその通りなので一言もないが、それがまた夫には此上もなく癪に障る。そこに一つのギャップが出来夫の心は益々夫人から遊離してゆく

その時一人の強敵が夫人の前にあらわれた。

ポルトガル帝政時代からの名家で、帝政時代はヴィスコンデ（子爵）を許されていたというエリアス・シントラ・リスボア氏の未亡人が、良人在世中はカンポス博士とは政敵同士でいつも一方が与党の時は他方は野党で議会では仇敵以上の間柄、それが皮肉なことにエリアス・リスボア議員がパリで不慮の自動車事故で死亡するや未亡人とカンポス博士の間には、ふしぎな友情が芽生え、いつしかそれは恋に似た雰囲気をさへ持ち始めてきた……。夫を深く愛する妻ほど敏感なものはない。いち早くこれを感じたマチルド夫人は、自他ともに美しく賢いことを自負し切っていただけ、自分の美しい面子を泥で汚されたような激しい屈辱感をおぼえ、嫉妬の焰は恨みと変り恨みはエリアス未亡人への強い憎悪となりひとり娘できようだいもなく社交上の女友達にこんなことをうっかり洩らせばパツと噂しになって笑いものにされる位がオチなことを、賢い夫人は知っていたので外部には一切洩らさず、しかし、胸中の悶々は日夜ヤル方もないのでとうとう、思いあぐねて、ある日、同居しているジョゼ博士に　このとを訴えてみた。心に想うひとのそば近く、男こころの哀しさを胸の奥底秘めて、何かとまめやかに夫人の相談相手となつてやっていたソーサ博士は、夫人の涙乍らの悲憤の訴えをきくと、今更乍ら夫人がいかに夫カンポス博士を深く愛しているかをまざまざと見せられる思いで、ひどく淋しい気持がしたが、縫られてみればやはり夫人が気の毒にもなり、カンポス博士にそれとなく諫言や忠告を試みてみたのである。妻が、いつもの放蕩の時とは違って、ひどく心配している様子をきくと、カンポス博士の胸中には何故か一種の快感

めいたものが湧き、エリアス・リスボア未亡人とのほんの淡いつき合いを、もつと深間の如く見せかけて、妻を少し苦しめてやれ、という意地の悪い悪戯心が湧いてきた。日頃妻の財力のお蔭をいやという程知らされて劣等感にうちひしがれていた博士は絶好のレヂチタンスと、考えたのかも知れない。妻を欺むくにはまず側近の親友を欺むかねばと　ソーザ博士はまことしやかにリスボア未亡人とのことを、サモ、深い意中の仲でもある如く語り、これ見よがしに一層ソーザ博士の前でも未亡人と親しげに振舞つてみせるのである。

これは、しかし、菓が少し利きすぎて事は思わぬ方向に外れて行つた。少女時代から長い間秘かに烈しく恋してきたひとを独占しているばかりか、その人のなげきをよそに、他の未亡人などとうつつをぬかしている、――この不とどきな男、ここに初めてソーザ博士の心に、それまでの親友、カンポス博士を憎む心が出た。それは夫人への恋情を一層反射的に強める結果となり、その切なくも哀しい男ごころ、多年秘めに秘めてきてきた男の恋心は、堰を切った如く夫人の上に注がれるので、これを感じない女性はない。その上、男同士仲の良かった時は、夫人にかくれての遊蕩も共にし、ともどもに口うらを合せて夫人をだまして女遊びなどしたことなども思い返されて一層夫人に済まないという心地になり、ソーザ博士の恋情は、最早半狂乱に近く夫人にかくも屈辱の痛手を与えたリスボア未亡人に対する復讐、ならびに離間策を施こすことについて、日夜額をあつめて語り合う内、いつしか一方の情熱の火が片方にも燃えうつり、はじめは二人とも心の苛責を多少は感じはしたがいつ知らず分別盛りを通すぎた二人の心も肉

体も一致した。

この時、人生に「偶然」というふしぎな作用がなかったら、運命のダグラス機に、期せずして三人が同時に乗り込み、追わる者も追う者もいづれはおなじ焦土と化する悲惨は起らなかったかもしれないが。

不幸にしてその不測の偶然がカンポス博士をして、妻と親友との畜ならぬ仲となつていることを発見させてしまったのであった。若い時から刻苦勉励した人だけあつて、カンポス博士は、そうすると偏執狂のような執拗さで二人の仲を探究しはじめ、妻が親友と、しめし合わせ博士の旅行中を倖いにリオに逃避行をしようと計画している一切を悉とくさぐり出して了つたのであった。

ソーザ博士の方は、カンポス博士が、リスボア未亡人と熱々の仲だと信じ込んでいるから、この際マチルドとこのことをうちあけて、穏やかに別居してもらい、自分はマチルドと一緒になり良人の方はリスボア未亡人と一緒になればよいではないか、――と提案したが、夫が、自分は浮気をしていても絶対自分とは別れないことをよく知っているマチルド夫人は大反対で、それよりいつそ荒療治でスキヤンダルに持つて行つてしまつた方が、却つてあと腐れなく解決の道がつかますわ、と固執した結果、一組の老いらくの逃避行となつたのである。それらの一切を知悉してしまつた時、カンポス博士は、最初は茫然とし、次には赫怒した。人もあろうにジョゼと妻が！彼は心の中でひどく惨酷な方法で二人を苦しめてやろうと思案した。けれども思慮分別あり教育もあり名誉も地位もある者が、下級の労働者達のように、殺すの何のという方法をとることは愚である、と悟り、何とかいゝ方法はないものかと

一夜眠れずに考えたがさて、うまい考えも浮ばないので、とも角も彼等二人のあとをつけてリオのホテルまでゆき突然出現しておどろかしてやろうと、もう殆んど、出発間ぎわの飛行機に自動車で駆けつけ、ソツと最後尾の座席にすべり込むと、倅いまだ何も知らぬ二人は前部の、はるか離れた席にこちらへ背を向けているので気がつかないからそれを倅いちいつと監視をはじめたのであった。

一ヶ月後の十月に行われるブラジル大統領選挙の前哨戦で、応援の演説と地方遊説に出かけていたのを急にとりやめてかけつけた位で、二人が人目をしのぶようにひっそりとしかし情熱をこめてより添っている背中を、鷹のような鋭い眼で監視しながら博士は自分がこれまで放蕩の限りをつくして妻を泣かせてきたことはまるで棚にあげ、怒りのために味も何も判らなくなっている葉巻をかみしめている内、不覚にも憤おりの涙が出てくるのをおぼえた。葉巻の汁が苦いのか、心が苦いから葉巻の汁が苦く感じられるのか、その分別さえ判らなかった。リオに着いた時、或いは此の機がとび立った時、ゆつくりと彼らの眼前に出てやろう、――その時の二人の驚愕と狼敗とを想像して、その決ろよさに微笑しようとするのだが、どうしても微笑が出来なかった。表情と心は益々こわばるばかりである。

こともあろうに、ジョゼが！妻と！！

その観念ばかりがぐるぐると頭の中をまわり他に何も考えることができない。

うん。とカンポス博士は低く唸った。

途端に、機は黒い密雲中に突入して、翼が大きくぐらりと揺れ、

機は大きく胴体を振ったので博士はかみ切っていた葉巻の先を、はずみで呑み下してしまった……。○

一生に一遍でよいから、死ぬまでに、あたしはあの、空をとぶ飛行機というものに、乗ってみたいよ。

息子や。……と云うのが、十年此の方、ドナ・ローザ婆さんの言い暮してきた言葉で、無邪気にカトリックを信仰し、神と悪魔の存在をすなおに信じ、正直にしかしあまり豊かでもなく生活してきた六十九才の黒い皮膚のお婆さんは、五十年間、洗濯石鹸の泡の中で、汚れ物と格闘してきた黒松の枝みたいな腕に優雅な黄金の腕輪を穿め、白エナメルの手提げ、白皮の靴。パナマの婦人帽を被り、うすい絹のシヨールを三角に折って頸にかけ、木の実で作った珠数と小さい旧約聖書とを片手に、ヨチヨチと、赤土の埃の立つ道を飛行機の入口めがけて他の乗客達と前後しながら、歩いて行った。時々、うしろをふり返ってみる。

その顔いっぱいに、うれしそうな微笑と、少しの畏怖と不安と、つよい好奇心の表情が、混合して動いていた。

何しろ一生に一度のありがたい、うれしいチャンスが、めぐってきたのだ。

笑わずに居られようか。

黒人の洗濯婆さんは、またしてもニタニタと笑った。顔中いっぱいの、声のない笑い。

お婆さんのうしろから、息子や娘達のボン・ボエイジの声々が、追っかけてくる。

建物の送迎口でみんながハンケチを振っている。飛行場の柵の所

にも人々が一と塊まりづつにより合つて、手を振ったり叫んだりしている。旅馴れたセールスマン達は、誰も見送りもないのか、ふり返りもせず手もふろうともせず、見本の入った鞆や小型のスーツケースを提げて大股に、さつさと機の入口の階段さして歩いてゆく。乗客の手荷物を積み込んだ小さい手押車が制服制帽の男達の手で勢よくガラガラと帰ってゆく。飛行機の入口の階段の前に事務長や会社の人々が停立して、客の乗り了るのを待っている。操縦士は既に座席に着いて飛行帽をかぶり直したり屈み込んで計器を調べたりしている。つよい風が一陣、さあつと飛行機のそばを吹き過ぎ赤い土埃りが舞い上る。機の入口の金属製の段々に片足をかけたローザ婆さんは、しげしげと段々を眺め、二三度昇ってから途中で立ち止まりもう一度うしろをふり返ってみた。そして片手をじゅずと一緒に高くさしあげて二三度振りまたトコトコと昇って、やつと窓際の座席に辿りつくともまず窓のカーテンを押しかけて外を覗いて見た、が、会憎この座席は反対側の窓ぎわに、その時は、なっていたから飛行場の赤土と、遠くに並んで大きなトンボが翼を拡げて休息している様な格好で地上に休んでいる数台の飛行機が見られただけであつた。あきらめて、ホツと吐息をしながら座席にすわる。まだ隣席の人は昇つて来ない。彼女は、もの珍らしく床を覗き天井を仰ぎ窓のガラスをなでてみる。すぐ眼の前の席の背中に大きなポケットが着いていて茶色の紙袋のようなものが二、三枚はさんであるこれが話にきいたあの仕末をする袋か、と思うと、酔つて吐く自身を想像してちよつと不安になつてきた。

だが、また笑いたくなつた。不安よりもうれしさの方が勝ってい

た。私の一族親類中では、まだ、だあれも飛行機に乗った人はいない。私をはじめでだ。彼女はまた微笑した。無学で底なしのお人好し、正直者まる出しの、きれいな瞳が、しばらくうつとりとする。彼女は急に思い出して、いねいに胸のところで十字を切った。このチャンスで、チャンスと金を与えて下さった神様にお礼を申さなくちゃ。彼女は娘達が総がかりで縫ってくれた人絹の晴れ着や、息子達が買ってくれた靴下や靴を俯向いて眺め、ソツと帽子に片手をやった。お小遣いも充分に手提げに入っている。耳飾りの金の小さい輪を何となく右手でつまみ、胸に下げた金鎖の先の聖像をなでて見る。――何てうれしいことでしょう。ああ。神様。

娘達や息子達は今日一日の労働を棒に振ってみんなで仕度を手伝ってくれ、みんなで送ってきてくれた有り難い子供達！不意に椰子の葉と板と泥で出来た自分の小屋と香ばしい珈琲の熱い舌ざわりが思い出

された。娘達はガヤガヤと私のことを噂しながら帰ってゆくだろう。息子どもは、またリオの試合の予想で喧嘩を始めなければよいが。どうしてあゝ蹴球にみんな夢中になるのだろうか――。

彼女はやゝ厚手の、海老茶色の窓のカーテン地をソツと指先でなでてみた。この布地は何だろう。――スカート地みたいだが……。こんな布地は今まであまり洗ったことがない。何という布地なのか。その時デエラルミンの白く光る天井の灯が一斉に消えた。……ハツとしたら一瞬にまた灯がともった。ずっと前方からエンヂンの始動する音だかプロペラの始動する音だか動揺だかゝ伝わってくる。大勢の乗客が、静々と、或いは重々しい様子で次々

と入ってきて席にそれぞれ着いている。立ったり坐ったり。みんな私話したり笑ったり咳払いしたりしている。ドナ・ローザはソツと伸び上ると、すばやく頭かずをかぞえてみた……十九、二十、二十一……私を入れて二十一人。これなに大勢の客を乗つけて一体こんなヤワな金物で出来ているみたいな機が、あの高い空を飛べるのか知ら？彼女は一瞬不安にもなり、不思議にもなった。こつそりと四辺を見まわしてほかの人々の顔色を見たが、誰も彼も平然としている。もう帯を身に巻いて頭をうしろにもたせ、眠りはじめた人すらいる。あの人はきつと、もう空の旅に馴れ切っているのだ。

彼女の隣席がふさがった。六十近い見知らぬ紳士である。よくよく四辺を見廻して判ったことだが、彼女の席は右側の最後部であつた。うしろは便所と荷物室のようである。

横眼でソツと眺めてその隣人が、どこかで見たような気がしてならなかったが思い出せない。選挙の度にベロオリゾンテ中の街角に貼り出される代議士候補写真で、しらずしらずに眼の底に潜在意識的に記憶してしまっていることを彼女は忘れていた。

はて――誰だっけ。しかし、彼女の洗濯のおとくいでないことだけは確かだ。と彼女は思い返してやゝ安心した。おとくいだつたら少しはずかしいのである。恐縮する気持でもあつた。気がつくとも機はもう動き出していた。地表をぐるぐると這い廻っている様だ。滑走が始まったのだ。耳のはたで、何かゴウゴウ、ゴウゴウと鳴っている様な気がした。プロペラがすでに廻っているのだ。それとも風の音か知ら？ ああ、私も、上流の人達と同じ様に飛行機に乗ってリオに行くのだ。ドナローザは、まっくろい顔

の中の白い眼を緊張させてソツと四辺を覗った。おとくい様の誰方かゞ乗り合わせていたら？とふと考えたからである。おずおずと前後左右を見廻したが倅い誰も知った人は居ない様に思われた。安堵したが、また、淋しい様な妙な心地がした。誰かにこの晴れの旅行を見て貰いたい氣もしたからだ。

氣がついて、また、窓のカーテンをソツとめくってみると、すぐ近くの所にみんなの姿があつた。いつの間にか向きを変えていたのだ。あわてて手を振つたが窓ガラスをあける方法を知らないの。で内側で手を振ってみた。判るか知ら？ 機はしばらくすると、又向きが變つたと見えて人々の姿も建物も消え草の処々に生えた赤土の広い空地と、地に伏せている飛行機の姿。その間を巧みに縫つてダグラス機は大きく楕円形を画いて地を滑走する。

地面が面白い様にグルグルとまわる感じ。

ドナ・ローザには、此の滑走の長いのが、あまりに乗客が多いので、重くてとび上れないのではないかと思われて、心配であつた。そこでまたちよつとの間不安になった。

横の隣人を振り向いて見るとその老紳士は外の景色など一向に氣にないらしい。鷺の様なこわい眼をして前方をぢいつとにらみ据えたまゝなのだ。何と言う。こわい眼だろう。いつか家の近所で出会つた狂人の眼よりも、もつと、こわい眼だ。一体此の人は、何をあんなに怒っているのか。ずっと前方の硝子戸の上の方に灯がともつて字がうき出た。

「上昇開始、シンタ（皮帯）をおしめ下さい」の啓示だが、ドナ・ローザは文盲だから平氣である。隣りの老紳士も帯をつけるのを忘れているのか知らないのか。しかし、四辺がザワザワとして、み

んなが皮帯で体を縛りつけ出したのを見て、やっとドナ・ローザにも合点がゆき、乗る前、娘連にぐどくと注意されたことを思い出した。そうだ、体を縛るんだつけ。ところが皮帯がない！立ったり座ったりしてキヨロキヨロ探すと、あった！椅子の両側から出ている皮帯を子供の様に面白がって何度も引っぱって見る。それを見た隣りの紳士も漸やく我れに返った表情で皮帯をつけた。機は、しばらくの間ぐるぐると廻っていたが、その内に、やがて、ゆらりと揺れる気配がして、フワリと体が宙に浮いた感じがした。上昇を始めたのである。ドナ・ローザはカーテンをにかけて、熱心に外を覗く。

ゴウゴウの音はもつとひどくなった。

地面がだんだん下に下にと退いてゆき人も家も地面と一緒に沈んでゆく。あれあれ、みんながこつちを口を開いて見ている。手を振っている。誰が誰だか、もう判らない。眼鼻のない白い人形の顔、くろい人形の顔。機はグングンと上昇している。白雲の上だ。

「皮帯をはずして下さい」。

啓示が変わる。まわりの人々がまた、身動きをはじめ。ドナ・ローザも悟って帯を外す。

若い制服の女が銀盆にオモチヤの様な小さい紙製のコップ、小皿、フオーク ナプキン サジ、などを揃え

もう一つの盆にはキレイな箱庭みたいにいろいろのたべものを盛りわけて皆の前を歩く。飲み物を注いでくれる。

なになに？ ガラナ？ コーヒー？ お茶？

ああ、とドナ・ローザはあわてて手提げを開き、紙に包んだ鶏肉のサンドキツチをとり出す。

すべてのブラジル人が必らずするように、ドナ・ローザは自分がたべる前に、まず隣人にそれを差し出した。

「アッセイタ？」（召し上る？）

カンポス博士はニコリともしない。

うるさそうに首を振った。眉が険しくよせられる。葉巻はまだ口にくわえたまゝである。

それならば、とドナ・ローザは安心して鶏肉のサンドイッチにかぶりつく。紙の紙の小皿にとりわけた鶏肉、サラダやゼリーやビスケットがチョココレエトの小皿と共にドナ・ローザの膝の上一杯に犇めいている。

みんな、たべられるか知ら？

カーテンを絞って窓から外を眺め乍ら、黒人の老婆は生れて初めての空の食事を、ゆつくりと、ゆつくりと、心から楽しんだ。

雲の上にまた空があるなんて　―　なんて素晴らしいんだろう
―　と彼女は飽かず眼下の雲界と高く拡がる青空とを眺めた。
しばらくたってから後、ふしぎなものを見た。ずっと向うに何かまっくろな霧の塊の如きものがあり、それが相当の速さでこちらの方にやってくるのを見つけた時、ドナ・ローザはまたしても不安になった。そのくろい塊、雲の塊みたいなものの中に、時折ピカリと閃めく赤黄色の閃光。

あれは一体何であろう？　だが、ドナ・ローザはその正体を遂に知ることはできなかった。それから一時間後に大爆音が起ったのである。

あとがき

人の世の、さまざまのすがたを、紙の上に残してみたい、というのが、私の念願であつた。生活苦と闘かい、子供二人の成長をみつめ乍ら 日夜寸暇を借しんで、コツコツと私は「ものを書いて」きた。たゞ好きだから書いてきたので ほかに金もうけの沢山あるブラジルのコロニアで、ろくな収入にもならない小説なんかを書いて、あえぎあえぎ貧乏の中に埋もれてきたのも、たゞ、すきだからの一言に尽きる。

主義もイデオロギイもない。

たゞ私の作品を、よろこんで読んで下さる人達に、面白くよんでもらいたいと思つて書いてきた。

人は何と言うとも書くよりほかに何もできない私は、死神にとりつかれている今も尚、書いている。恐らくあの世とやらに行つても、私の魂は書いているであろう。

一九四七年「新世紀」誌に発表した「運命のダグラス機」は、其の後「琉球新報」に引きついで連載されたがその未完を補つてこの本に入れた。また、一九四九年二月発表の「まにら丸異聞」は、今回、まえがきを加筆して多少の補筆訂正をした。一九五一年一月発表の「沖繩の飛行隊長」は、私の思い出の深いものであり、この二篇は、ともに「よみもの誌」に発表したものである。これに、一九六一 — 六三年まで、「週刊日系誌」に掲載した短篇、コント風のを数篇集めてみた。

この本の出版を引きうけて下さった宮城松成氏、印刷会社の山出肇氏、表紙を快ろよく描いて下さった間部学画伯、いつも私を励

まして下さった文化協会書記長藤井卓治氏に私はいま、心からお礼申し上げ度い。ともかくも、私の本が、コロニアで、はじめて出たのである！

この本を面白がって読んで下されば、倖いと思う気持ちでいまはいい。

一九六四年七月

著者 略歴及筆歴

神奈川県人

一九〇六年三月六日横浜市平戸町に生る。一三歳左腕の自由を失なう。

日本女子商業卒、日進英語、アテネフランセと、其他数種の学校に行ったが病患のためいづれも中退。

暖国ブラジルを慕って一九二九年二月渡伯。直ちに

コレジオバチスタに入り三年在学、一九三二年帰日、同年四月、雑誌『新青年』の新人紹介に入選爾来一九三五年渡伯まで同誌に推理小説を發表、この間、海外興業会社囑託となり雑誌『移民地事情』編集員及び葡文の翻訳をした。傍わらキング、日の出、令女界、若草、婦人サロン、其他の雑誌に随筆、雜文、中南米の文学紹介を書く。新潮社版の世界現状大観『中南米メキシコ篇』に、『ラテンアメリカ文学の素描』なる論文執筆、一九三五年十月再

渡伯北島弘毅と結婚、以来十一年間育児のため筆を執らず、一九四六年以後、南米時事、新世紀、よみもの、パウリスタ新聞、等に記者となり傍わら時折日本の諸雑誌に寄稿、コロニア週刊誌其他在伯邦字新聞諸紙に、作品を発表しつゝ今日に至る。二児ある未亡人。

北島府末子作品集

一九六四年七月二十五日 印刷

一九六四年七月三十一日 発行

著 者 北 島 府 末 子

発行者 サンパウロ市ドートル・ロドリゴ・シルバ街七〇二
階二十三号室

日 系 出 版 社 宮 城 桧 成

発行所 パウリスタ印刷株式会社

聖市オスカル・シントラ・ゴルジンニョ街四二

電話 三六〇七九六七